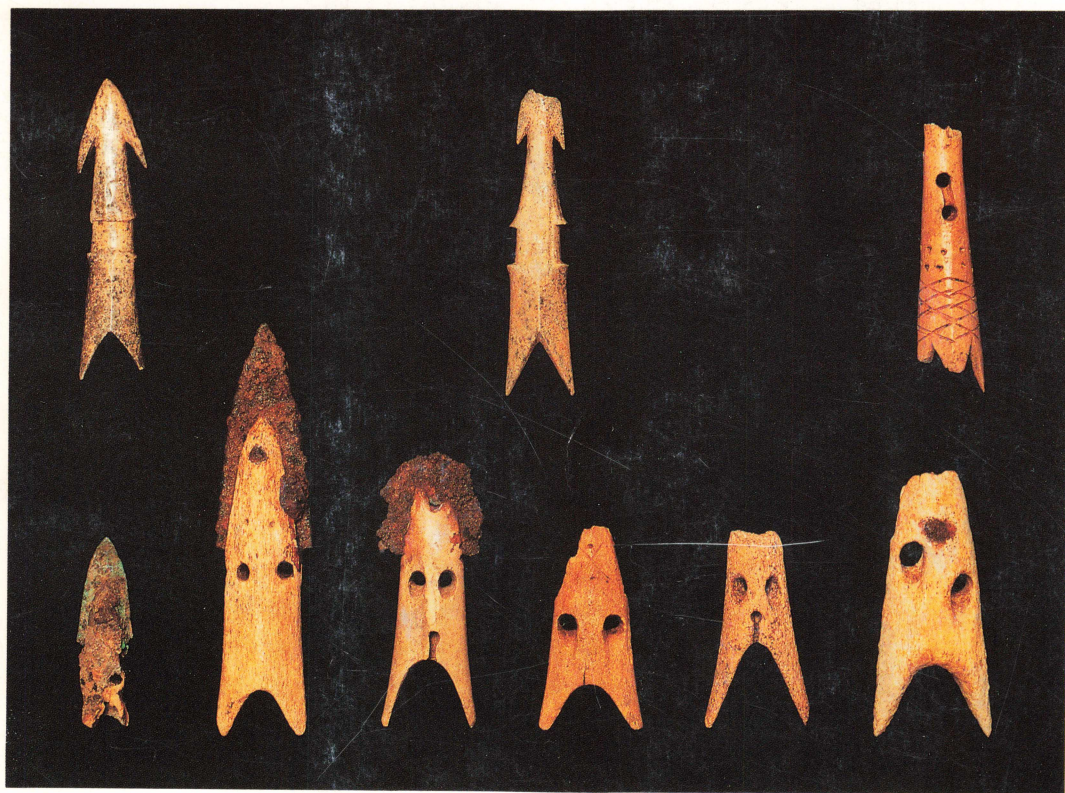


おおかわ
1994年度大川遺跡発掘調査概報

—余市川改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の概要 VI—



1995年3月

北海道余市町教育委員会

■表紙写真の説明■

回転式離頭銚(キテ)

表紙写真のキテのうち、上段の3点が中世アイヌ文化期、下段の6点が近世アイヌ文化期にそれぞれ相当するものである。擦文文化期における当該資料との比較検討や変遷を考える上で非常に興味深い資料である。

おおかわ
1994年度大川遺跡発掘調査概報

—余市川改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の概要 VI—

1995年3月

北海道余市町教育委員会

例 言

1. 本書は余市川改修事業に伴い発掘調査を実施した大川遺跡の第6次調査（1994年度）の概報である。調査原因者である北海道小樽土木現業所の委託を受け、余市町教育委員会が調査主体となり実施した。

2. 今年度の発掘調査面積は、約1,962m²であり、発掘調査・遺物整理等の日程は、以下のとおりである。

4月1日～5月15日 遺物整理・発掘調査準備作業（遺物実測・図面整理・矢板打ち・杭打ち等）

5月16日～10月31日 発掘調査作業（包含層掘り・遺構掘り・実測図作成・写真撮影他）

11月1日～3月31日 整理作業（水洗・注記・分類・保存処理・復原・遺物実測・概報作成等）

3. 事務局並びに調査体制は、以下のとおりである。

調査主体者	教育長 笹山義孝	調査指導員	岡田淳子（北海道東海大学
事務局	教育次長 三浦清治		国際文化学部長）
	水産博物館々長 高橋慶紀	調査担当者	宮 宏明（日本考古学協会員）
	文化財係長 盛 昭史	調査補助員	荒川暢雄（日本考古学会々員）
		〃	青木 誠（〃）
			小川康和（北海道考古学会々員）

調査実習生 青野友哉（明治大学文学部学生）・三澤壮太（北海道東海大学国際文化学部学生）

大波紀子・酒井秀治（福島大学行政社会学部学生）・山岸 寛（東京大学文学部学生）

作業員 東 五月・阿部栄子・荒岡民雄・荒川亀雄・井川幸子・岩崎靖子・及川京子・扇谷陽子
岡西美喜子・奥谷誠一・片岡常夫・門野利郎・川又智恵子・神成弘美・菊池由起
北川千登世・榎引葉子・工藤忠幸・久保忠章・久保照代・小林和夫・小見玲子
斉藤麻紀・佐藤洋子・佐藤主計・茂野憲一・菅野賢治・菅原宏文・杉山賢治・高島武夫
武田勇三・寺崎和歌子・東門田ルミ子・富岡きみ・富永順子・鍋島弘明・浪岡達也
野田真紀子・橋本広子・長谷川清道・畠山香代子・浜川ひとみ・平野政秋・古田千穂
堀野香織・本城まこと・前田貞子・水田るり子・宮崎 健・武藤 康・山口路子
横山由紀子・米谷登志子・渡辺エミ子

4. 検出された遺構等については、便宜上、下記のような略称を用いて示した。

JH	縄文時代（統縄文期を含む）の建物跡	SH	擦文時代の建物跡	HP	後出の建物跡
GP	墓壇	UP	性格不明のピット	SX	縄文晩期前葉の環状周溝状の区画墓
SY	縄文晩期中葉の竪穴状の区画墓	MO	中世の壕状遺構	HS	縄文時代の石組炉
FP	地床炉とみられる焼土跡	SM	貝塚		

5. 本書の執筆は、6の各位並びに調査指導員・調査員・調査補助員等がそれぞれ分担し、編集は宮 宏明が、監修は岡田淳子が行なった。

6. 遺跡・遺物の分析・鑑定・年代測定・保存処理ならびに原稿執筆等については、以下の方々に、また、下記の各位より御指導・御助力を賜りました。記して感謝申し上げます次第です。
金属製遺物の保存処理と墓壇伴出北宋銭の分析 赤沼英男・咲山まどか（岩手県立博物館）
炭化物の放射性炭素年代測定 木越邦彦（学習院大学理学部名誉教授）

動物遺存体の同定・分類	西本豊弘 (国立歴史民俗博物館考古研究部)
植物遺存体の同定・分類	松谷暁子 (東京大学総合研究資料館客員研究員)
碧玉・鉄石英の産地同定	藁科哲男 (京都大学原子炉実験所)
墓壇伴出玉の残存糸の分析	菊地美知子・小原奈津子 (昭和女子大学)
黒色不明玉の分析	小笠原正明 (北海道教育大学教育学部函館校)
焼失住居址伴出炭化材の樹種同定	大谷 諄・斉藤智子 (北海道大学農学部森林科学科)
中世陶磁器の分類と中世遺構関連原稿	吉岡康暢 (国立歴史民俗博物館考古研究部)
硯・砥石・石臼・茶臼等石材の鑑定と関連原稿	垣内光次郎 (石川県立埋蔵文化財センター)
土器の鑑定・分類	大沼忠春 (北海道教育庁生涯学習部文化課)

藤村久和 (北海道大学), 大島直行 (札幌医科大学), 菊池俊彦・天野哲也 (北海道大学), 鶴丸俊明 (札幌学院大学)
 佐藤栄一 (北海道東海大学), 須藤 隆 (東北大学), 大平 聡 (宮城学院女子短期大学), 工藤雅樹 (福島大学)
 李 成文 (横浜国立大学), 藤本 強・大貫静夫 (東京大学), 小野山 節・高橋克壽・森下章司 (京都大学)
 酒寄雅志 (国学院大学栃木短期大学), 菊池徹夫 (早稲田大学), 渡辺 誠 (名古屋大学), 小倉淳一 (法政大学)
 桜井清彦 (昭和女子大学), 鈴木靖民・青木 豊 (国学院大学), 酒詰秀一 (立正大学), 石川日出志 (明治大学)
 野崎欽吾 (日本大学), 三辻利一 (奈良教育大学), 阿部朝衛 (帝京大学), 田村晃一 (青山学院大学)
 麻生 優 (千葉大学), 前田 潮 (筑波大学), 山浦 清 (立教大学), 斎藤 忠 (大正大学名誉教授)
 任 孝宰 (ソウル大学), 田辺征夫, 坂井秀弥・原田昌幸 (文化庁), 巽 淳一郎 (奈良国立文化財研究所)
 阿部義平 (国立歴史民俗博物館), 井上洋一 (東京国立博物館), 中村福彦・畑 宏明・種市幸生・田才雅彦 (北海道教育庁)
 出利葉浩司・手塚 薫 (北海道開拓記念館), 及川研一郎 (北海道音更高等学校)
 森田知忠・越田賢一郎・西田 茂・田口 尚・鈴木 信・中山昭大・藤原秀樹・澤田 健・末光正卓 (北海道埋蔵文化財センター)
 三浦圭介・成田滋彦 (青森県埋蔵文化財センター)
 富樫泰時・桜田 隆・高橋 学・五十嵐一治 (秋田県埋蔵文化財センター), 船木義勝 (秋田県立博物館)
 高橋興右衛門・羽柴直人・金子昭彦・村上 拓 (岩手県埋蔵文化財センター), 藤沼邦彦 (多賀城跡調査研究所)
 安孫子昭二 (東京都埋蔵文化財センター), 小林 克 (江戸東京博物館), 小田静夫 (東京都教育庁)
 小嶋芳孝 (石川県立埋蔵文化財センター), 乗安和二三 (山口県教育庁), 大橋康二 (佐賀県立九州陶磁文化館),
 古原敏弘 (北海道立アイヌ民族文化研究センター), 今福利恵 (山梨県立考古博物館)
 加藤邦雄・仙庭伸久・秋山洋司・中山真理 (札幌市埋蔵文化財センター), 瀬川拓郎 (旭川市教育委員会)
 河野本道・青柳信克 (旭川市博物館), 佐藤智雄・五十嵐貴久 (函館市教育委員会)
 野村祐一・尾崎 涉 (函館市立博物館), 北沢 実 (帯広百年記念館), 松田 猛 (釧路市立埋蔵文化財調査センター)
 佐藤一夫・工藤 肇・渡辺俊一・二階堂哲也 (苫小牧市埋蔵文化財調査センター)
 大島秀俊・石川直章 (小樽市教育委員会), 杉浦重信 (富良野市立郷土館), 福士廣志 (留萌市海のふるさと館)
 葛西智義 (深川市教育委員会), 大谷敏三・田村俊之・豊田宏良 (千歳市埋蔵文化財センター)
 長谷山隆博 (芦別市星の降る里記念館), 新見幸夫 (滝江町歴史民俗資料館), 土井義夫・服部敬史 (八王子市郷土資料館)
 宇部則保・大野 亨 (八戸市教育委員会), 八木光則・神原雄一郎 (盛岡市教育委員会)
 杉本 良 (北上市埋蔵文化財センター), 千葉啓蔵 (久慈市教育委員会), 小松正夫 (秋田市教育委員会)
 山本哲也 (君津郡市文化財センター), 高森良夫 (銚子市教育委員会), 馬淵和雄・汐見一夫 (鎌倉市教育委員会)
 杉浦裕二 (豊田市郷土資料館), 嶋谷和彦 (堺市埋蔵文化財センター), 勝部 衛 (玉湯町立出雲玉作資料館)
 金盛典夫・松田 功 (斜里町立知床博物館), 熊崎農夫博 (厚岸町教育委員会), 今井真司 (下川町教育委員会)
 森岡健二・長田佳宏 (平取町教育委員会), 佐藤 稔 (長万部町教育委員会), 瀬田正明 (一宮町教育委員会)
 阿部千春・福田裕二・小林 貢 (南茅部町教育委員会), 土肥研晶 (由仁町教育委員会)
 角田隆志 (虻田町教育委員会), 寺崎康史 (今金町教育委員会), 橋爪 実 (訓子府町教育委員会)
 松崎水徳・佐藤一志・柳沼弥生 (上ノ国町教育委員会)
 佐藤矩康 (日本美術刀剣保存協会評議員), 吉野孝雄 (アトリエ43), 鈴木 稔・櫛原功一 (帝京大学山梨文化財研究所)
 星 梓 (北青山遺跡調査会), 佐藤利雄・青木延広 (北海道文化財保護協会理事), 福井光行 (歯科医)
 大竹憲治・千代 肇・大槻 巖・豊原照司・宮塚義人・仲田茂司・平井尚志・櫛 國男・横山英介 (日本考古学協会員)
 高井悌二郎 (辰馬考古資料館), 伊藤睦憲 (銚子コハクの会), 扇谷亮三 (余市町在住)

目次

図1	大川遺跡の発掘調査区域と入舟遺跡	2
図2	大川遺跡縄文晩期と考えられる遺構の分布	3・4
図3	大川遺跡続縄文期と考えられる遺構の分布	5・6
図4	大川遺跡擦文期と考えられる遺構の分布	7・8
図5	大川遺跡中世と考えられる遺構の分布	9・10
図6	大川遺跡近世・近代と考えられる遺構の分布	11・12
図7	大川遺跡出土の管玉	27
図8	碧玉および碧玉様緑色石の原産地	29
図9	花仙山産碧玉原石の蛍光X線スペクトル	29
図10	管玉1の碧玉製管玉の蛍光X線スペクトル	33
図11	管玉2の碧玉製管玉の蛍光X線スペクトル	33
図12	管玉3の碧玉製管玉の蛍光X線スペクトル	33
図13	管玉4の碧玉製管玉の蛍光X線スペクトル	33
図14	管玉5の碧玉製管玉の蛍光X線スペクトル	33
図15	管玉6の碧玉製管玉の蛍光X線スペクトル	33
図16	管玉7の碧玉製管玉の蛍光X線スペクトル	33
図17	管玉8の碧玉製管玉の蛍光X線スペクトル	33
図18	管玉9の碧玉製管玉の蛍光X線スペクトル	33
図19	管玉10の碧玉製管玉の蛍光X線スペクトル	33
図20	管玉11の碧玉製管玉の蛍光X線スペクトル	33
図21	管玉12の碧玉製管玉の蛍光X線スペクトル	33
図22	管玉13の鉄石英製管玉の蛍光X線スペクトル	33
図23	管玉14の鉄石英製管玉の蛍光X線スペクトル	33
図24	管玉15の鉄石英製管玉の蛍光X線スペクトル	34
図25	管玉16の鉄石英製管玉の蛍光X線スペクトル	34
図26	管玉17の碧玉製管玉の蛍光X線スペクトル	34
図27	管玉18の碧玉製管玉の蛍光X線スペクトル	34
図28	管玉19の碧玉製管玉の蛍光X線スペクトル	34
図29	管玉20の碧玉製管玉の蛍光X線スペクトル	34
図30	管玉21の碧玉製管玉の蛍光X線スペクトル	34
図31	管玉22の鉄石英製管玉の蛍光X線スペクトル	34
図32	管玉23の鉄石英製管玉の蛍光X線スペクトル	34
図33	管玉24の鉄石英製管玉の蛍光X線スペクトル	34
図34	碧玉原石のESRスペクトル	35
図35	碧玉原石の信号ⅢのESRスペクトル	35
図36	大川遺跡出土管玉の信号ⅢのESRスペクトル	35
図37	大川遺跡出土管玉の信号ⅢのESRスペクトル	35
図38	大川遺跡出土管玉の信号ⅢのESRスペクトル	35
図39	大川遺跡出土管玉の信号ⅢのESRスペクトル	35
図40	出土試料の溶媒による分割	39
図41	大川遺跡G P-608出土の洪武通寶の形状・外観	45
図42	蛍光X線分析法による定性分析結果	45
図43	大川遺跡出土の硯	47
図44	大川遺跡出土の砥石	50
図45	大川遺跡出土の石臼・茶臼	51
図46	大川遺跡における中世遺構	55・56
図47	大浜中遺跡陶磁器	64
図48	伝茶町遺跡兵庫鎮付帯執	67
図49	大川遺跡珠洲陶器	69
図50	各遺跡出土の握石	75
図51	大川遺跡出土運上家・漁場関連資料	86
図52	△(ダキヤマイチ)と刻まれている石碑	88
図53	大川遺跡出土の墨書磁器	89
図54	大川遺跡出土の土鈴	91
図55	大川遺跡出土の土製品(1)	92
図56	大川遺跡出土の土製品(2)	93
図57	大川遺跡出土の石剣	95
図58	大川遺跡出土の石刀・石製品	96
図59	大川遺跡出土の後北式土器	97
図60	大川遺跡出土山岸コレクション	98

本文目次

I	発掘調査の概要	
a	今年度の発掘調査区域と調査方法	1
b	検出遺構	3
c	出土遺物	22
II	諸分析の概要と若干の考察	
a	大川遺跡出土の管玉の産地分析	26
b	大川遺跡出土の首飾り(Okawa 1990, GP-102)の材質について	38
c	恵山式期墓塚からの糸状出土物の鑑別結果報告	41
d	大川遺跡出土洪武通寶のX線分析法ならびに誘導結合プラズマ発光分光分析法による分析	44
e	大川遺跡出土の石製品について	46
f	北方流通史と大川遺跡	54
g	大川遺跡出土の握石とその類例	74
h	大川遺跡検出恵山期の遺構について	81
i	大川遺跡出土の運上家・漁場関連資料について	85
III	結び	
a	小括	90
b	あとがき	100

写真目次

表紙	回転式離頭鉤(キテ)	
写真1	大川遺跡遠景と近代遺構・遺物	14
写真2	大川遺跡検出の中世遺構と近代遺物	15
写真3	大川遺跡検出の続縄文期の建物跡	16
写真4	大川遺跡検出墓塚Ⅰ	17
写真5	大川遺跡検出墓塚Ⅱ	18
写真6	大川遺跡検出墓塚Ⅲ	19
写真7	大川遺跡検出墓塚Ⅳ	20
写真8	大川遺跡検出墓塚Ⅴ	21
写真9	大川遺跡出土のヒスイの玉	25
写真10	大川遺跡出土のニカンリ	25
写真11	大川遺跡G P-48管玉出土状況	26
写真12	大川遺跡G P-123検出状況	26
写真13	大川遺跡G P-123管玉検出状況	26
写真14	大川遺跡出土の管玉	27
写真15	大川遺跡G P-102出土の玉	38
写真16	G P-847コハク玉出土状況	41
写真17	G P-367糸出土状況	41
写真18	マイクروسコープによる観察	42
写真19a	電子顕微鏡による糸の表面形態	42・43
写真19b	電子顕微鏡による糸の断面形態	43
写真20	大川遺跡G P-608	44
写真21	大川遺跡G P-608出土の洪武通寶の形状・外観	45
写真22	大川遺跡出土の硯(表)	48
写真23	大川遺跡出土の硯(裏)	48
写真24	大川遺跡出土の砥石	52
写真25	大川遺跡出土の臼	52
写真26	大浜中遺跡出土の中世陶磁器(表)	65
写真27	大浜中遺跡出土の中世陶磁器(裏)	65
写真28	伝茶町遺跡出土の兵庫鎮付帯執と杏葉	67
写真29	大川遺跡主要握石出土状況	76
写真30	握石出土状況	77
写真31	大川遺跡出土運上家・漁場関連資料	86
写真32	大川遺跡△の石碑出土状況	88
写真33	大川遺跡出土の△の石碑	88
写真34	大川遺跡出土の墨書の銚子	89
写真35	大川遺跡出土の土鈴	91
写真36	大川遺跡出土の土製品(1・2)	94
写真37	大川遺跡G P-900伴出の石剣・ヒスイ玉・石鏃	96
写真38	大川遺跡出土の後北式土器	97
写真39	大川遺跡出土の山岸コレクション	99
写真40	北海道・東北史研究会余市市シボジウム	100

I 発掘調査の概要

a 今年度の発掘調査区域と調査方法

1994年度の調査区域は、1992年度の発掘区域と1993年度の発掘区域の中間に位置する。ラインは1992・1993年度のグリッドを延長し、杭は道々豊丘余市停車場線の南西側歩道の基準を延長して打ち込み、発掘区全域に一辺5mのグリッドを設定した。グリッド表示は、北東から南西へ44～57の算用数字、北西から南東へA～Rのアルファベットを用い、南隅のグリッドライン交点で表した。また、調査半ばの9月に、余市川寄りにも遺構及び遺物が確認され、9月9日より発掘調査を実施した。さらに10月25日の現場作業完了間際に、1993年度調査区域との隣接部分において、今年度の矢板との間に未発掘区域があることが判明し、急拠、10月27・28日の両日、杭打ちから実測までの一連の作業が行われた。

遺構及び遺構に伴う遺物については、状況に応じて縮尺1/10・1/20・1/50・1/100等の図面に出土位置・レベル・種別等を記録して取り上げた。包含層出土の遺物は、I層及び攪乱部分についてはグリッドごと一括して取り上げ、II・III・IV層の主要なものについては適宜、縮尺1/20で図面化して取り上げた。住居址のカマド・地床炉及び完形土器内の土壌については、フローテーション法により、炭化種子を抽出した。墓壙・土壙の埋土については土壌水洗を、貝層及び魚骨層については1mmメッシュを用いて水洗を行い、貝片・骨片・玉・剥片・土器片等の微細遺物を採取した。これらについては室内にて、A選別（種別ごとの分類）とB選別（動物遺体の分類・同定）を実施した。鉄製品については、当遺跡では処理が困難な刀やマキリなど今年度までに計63点を、岩手県立博物館に保存処理を依頼し、他の鉄製品は当遺跡で土砂・錆等を落として薬品処理を施した。また、コハクについては、超音波洗浄器パールクリーン（日本電機工業株式会社製）を使用して水洗を行い、アクリル系の薬品での処理と乾燥を繰り返し実施したが、表面を痛めてしまうため今後は水溶性の薬品での処理を検討中である。土層・砂層の色調確認は日本色彩研究所刊の『新版 標準土色帖』を使用した。写真撮影は、遺構・遺物・遺跡遠景・調査風景等をモノクロームフィルム及びカラーフィルムで適宜実施した。特に、墓壙・住居址等の主要な遺構については、セクション・遺物出土状況・完掘状態等を必要に応じて撮影した。

今年度の発掘調査は5月16日に開始し、10月31日に終了した。今年の夏は例年にない暑さで、その暑さに悩まされながらの作業となった。また、今年度の発掘区域は1992・1993年度の調査区域との位置関係から調査が複数年に亘る遺構があり、以前の調査結果と照合しながら慎重に作業を進めねばならなかった。大川遺跡の調査は今年度で6年目を数え、来年度からは対岸の入舟遺跡(図2)の発掘調査にかかる予定である。6年間の総発掘面積は17,200m² 余りに達した。

(小川)

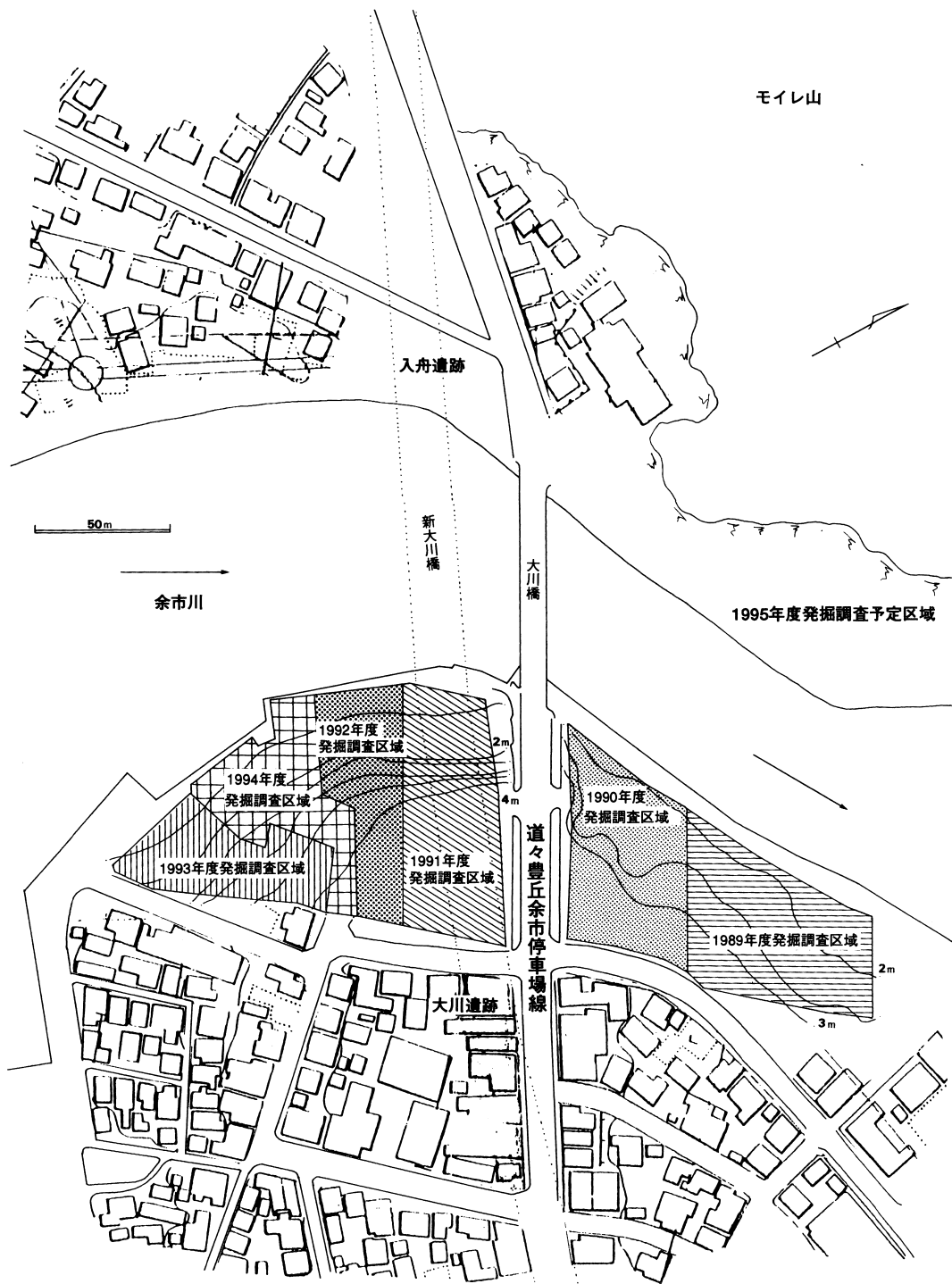


図1 大川遺跡（1989年度～1994年度）の発掘調査区域
と入舟遺跡（対岸，1995年度発掘調査予定区域）

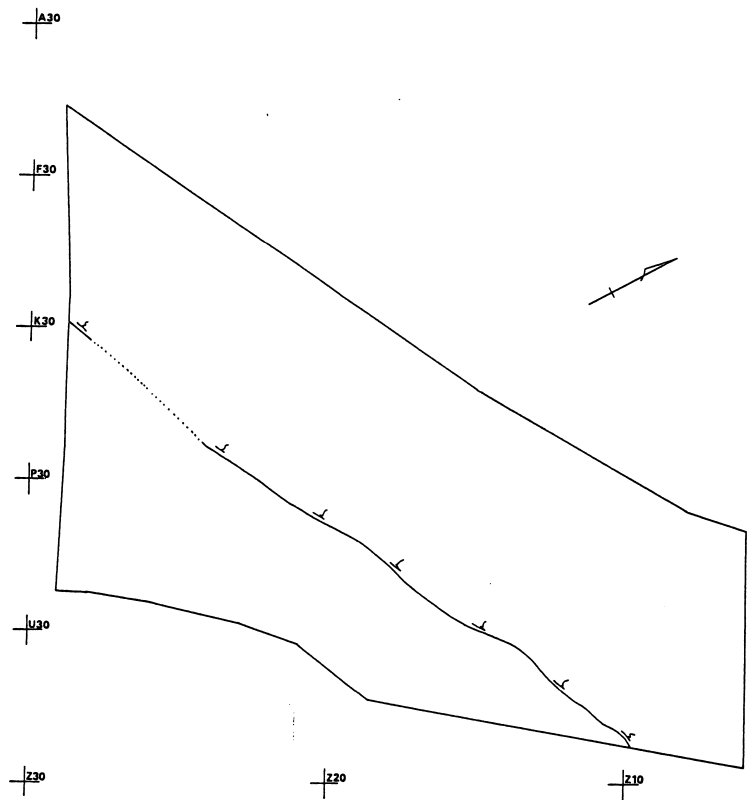


図2 大川遺跡縄文晩期と考えられる遺構の分布 (1989~1994)

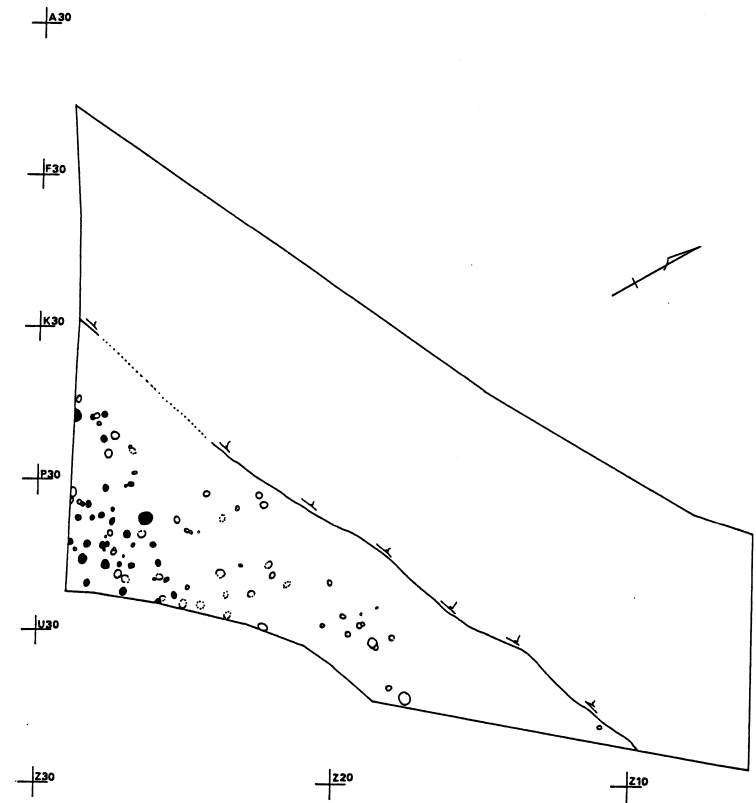


図3 大川遺跡縄文期と考えられる遺構の分布 (1989~1994)

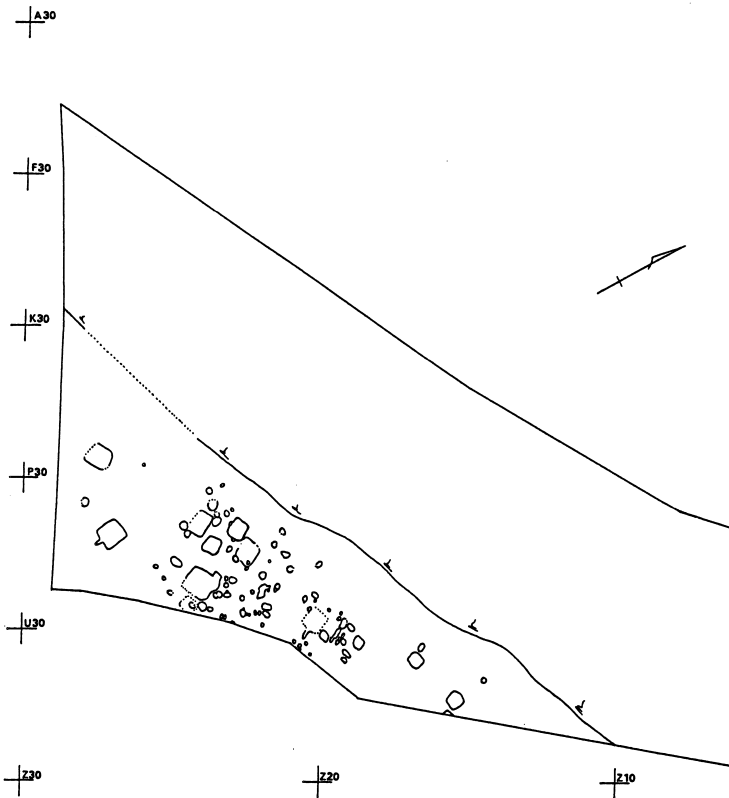


50 m

260

250

240



A30

F30

K30

E30

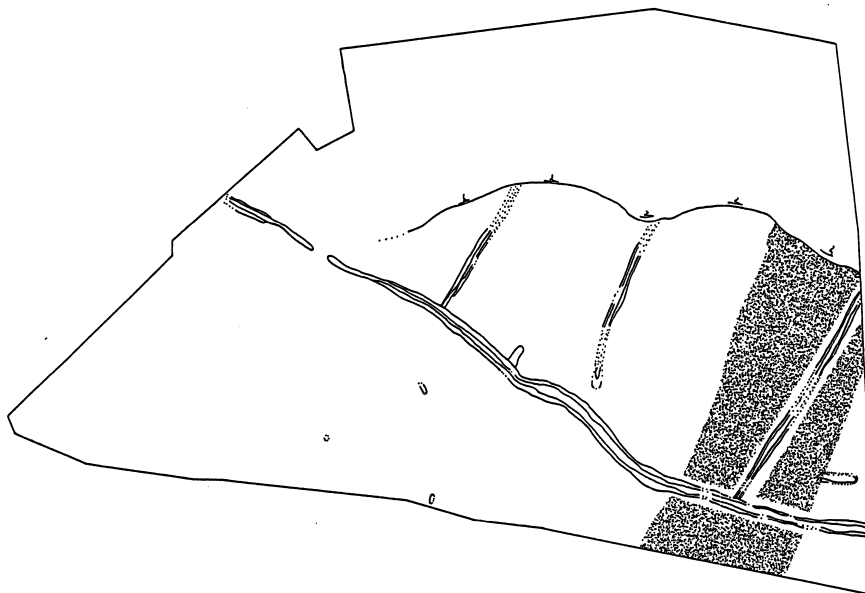
U30

230

220

210

図4 大川遺跡縄文期と考えられる遺構の分布 (1989~1994)

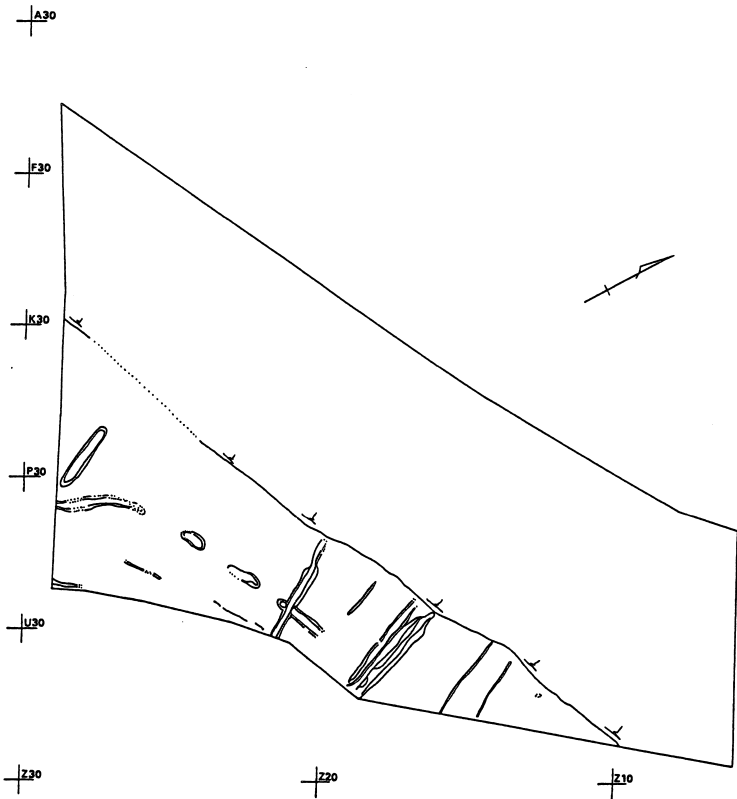


50 m

Z80

Z80

Z40



A30

F30

K30

P30

U30

Z30

Z20

Z10

図5 大川遺跡中世と考えられる遺構の分布 (1989~1994)

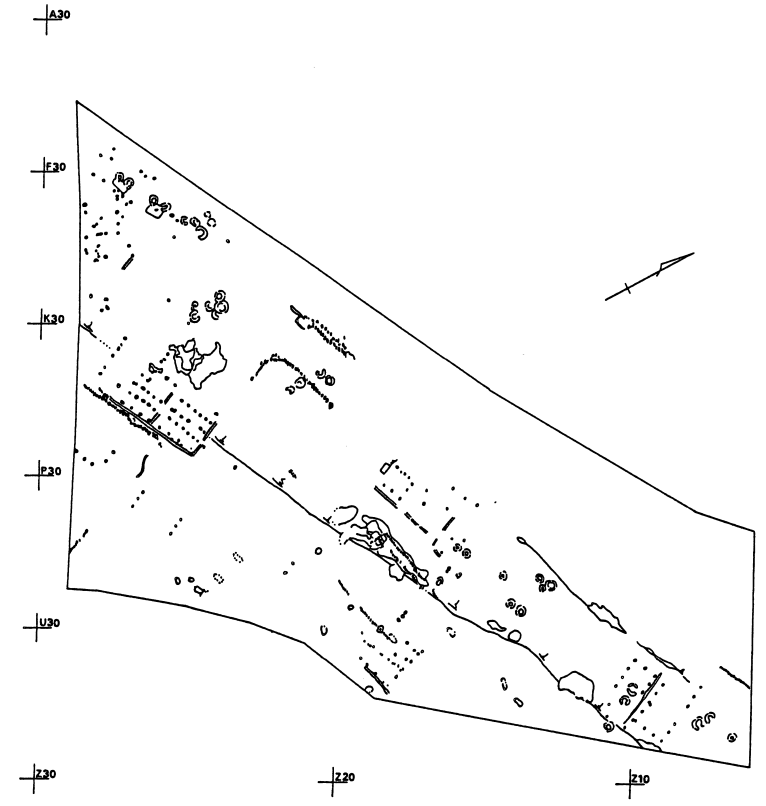


図6 大川遺跡近世・近代と考えられる遺構の分布 (1989~1994)

b 検出遺構

1994年度の発掘調査によって検出された遺構数並びに該当するとみられる時期は、表1のとおりである。また、1989年度～94年度までの6ヶ年に及ぶ発掘調査区（図1）における遺構分布も、縄文晩期～近世・近代（図2～6）について示したが、縄文後期については、表1でもわかるように、今年度検出されていないことや、小ピット2基（GP-796・807）と石組炉（HS-1）1ヶ所にすぎないので、当該期の遺構分布については『1993年度大川遺跡発掘調査概報』（同書3頁・図2）を参照していただきたい。

擦文期の建物跡については、今年度3軒（SH-69・70・71）の検出となっているが、実際には、1992年と94年の両年度に互って調査したもの（SH-17・19・20・24）4軒、及び、1993年と94年の両年度に互って調査したもの（SH-40・58・60）3軒があり、合計10軒について調査を実施したことになる。同様に、縄文晩期前葉の周溝状の区画墓（SX-1）については1992年と94年の両年度に互って、縄文晩期中葉～後葉に比定されるとみられる竪穴状の区画墓（SY-1）については1993年と94年の両年度に互って、それぞれ調査した。中世の濠状遺構であるM0-10についても、1991年・92年・94年の3ヶ年に互って、M0-13については1992年・94年の両年度に互って調査されたものであり、当該期については、M0-15・16のみ今年度内に調査されたものである。したがって、表1では合計169の遺構等の検出数となっているが、実際には、180ほどの遺構を調査したことになる。

（宮）

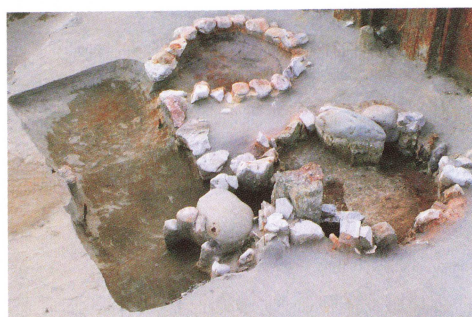
	縄文後期	縄文晩期	続縄文期	擦文期	中世	近世	近代	不明	合計
建物跡		(1)	3 (17)	3 (71)		(1)			6 (90)
G P	(2)	97 (636)	15 (264)	2 (44)	(4)	2 (18)		(3)	116 (971)
S X		(2)							(2)
S Y		(1)							(1)
U P		8 (28)	1 (10)	1 (17)		(11)		2 (2)	12 (68)
M O					2 (16)				2 (16)
S P					(78)	(337)			(415)
F P		(6)	(4)	(58)		(2)			(70)
H S	(1)								(1)
S M						(17)			(17)
溝状遺構					(4)				(4)
立石		(1)							(1)
列石				(4)					(4)
礎石						27 (290)			27 (290)
矢来						1 (11)			1 (11)
石組炉							5 (50)		5 (50)
合計	(3)	105 (675)	19 (295)	6 (194)	2 (102)	35 (737)		2 (5)	169(2011)

表1 1994（1989～1994）年度大川遺跡検出遺構一覧

写真1 大川遺跡遠景と近代の遺構・遺物



1) 1994年度大川遺跡発掘調査区域(北からの遠景)



2) 石組炉検出状況(奥49号, 手前50号, 近代)



3) 石組炉検出状況(右49号, 左50号)



4) 石組炉検出状況(第49号石組炉礫出土状況)



5) 列石・石組等検出状況(K50・J50・J49・I49 Grid他)



6) 列石・石組等検出状況(I48・J48Grid)

7) 列石とMO-10の重複状況

(列石は近代, 直交している溝がMO-10で中世, MO-10が完全に埋まった後に石が並べられている)



8) 貝及び遺物出土状況(F51Grid, II層出土, コタマガイが主体, 近代とみられる)



写真2 大川遺跡検出の中世遺構と近世遺物



1) MO-10遺構検出状況 (溝底部は数日前の風雨で、一部埋まっている、中世)



3) MO-10覆土人骨出土状況 (近世)



2) MO-10覆土遺物出土状況 (近世には礫も多数棄てたようである)

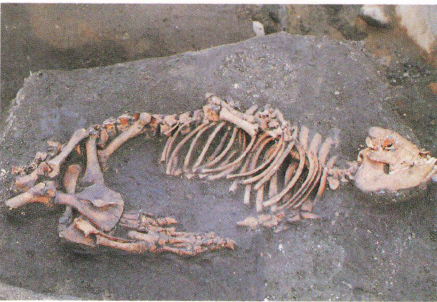
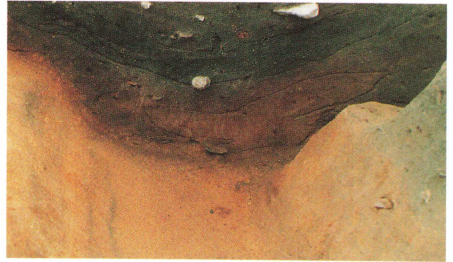


4) MO-10覆土遺物出土状況 (近世)



5) MO-13セクション ▶
観察状況
(断面に礫が見られる層が近世と考えられる)

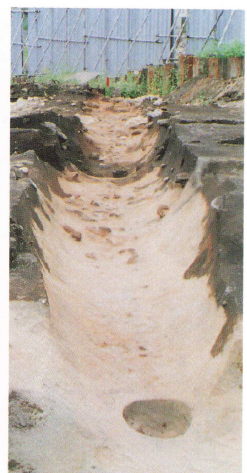
◀ 6) MO-13遺構検出状況
(SH-20を切って構築されている)



7) MO-14覆土ブタ出土状況 (近世～近代)

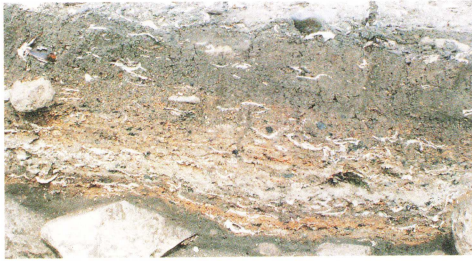


8) MO-14セクション (MO-14は1992年度検出であるが、未掲載のため今回掲載)



9) MO-14遺構検出状況 (中世)

写真3 大川遺跡検出の統縄文期の建物跡



1) J H-11覆土上部セクション観察状況
(ニシンの魚骨が主体、近世～近代)



2) J H-11覆土上部セクション観察状況
(貝はコタマガイ・イガイが主体)



3) J H-11遺物出土状況 (覆土出土の土偶)



4) J H-11遺物出土状況 (覆土出土の土版)



5) J H-11遺物出土状況 (覆土出土のイモガイ状土製品)



6) J H-16遺構検出状況(後北期, プランはほぼ円形)



7) J H-16遺物出土状況
(床面出土の多数のフレーク・チップ)



8) J H-16遺物出土状況 (床面出土の土鈴と土器片)



9) J H-17遺構検出状況(統縄文期, プランはほぼ円形)

写真4 大川遺跡検出墓壙 I



1) GP-847遺物出土状況 (コハク玉約720点出土)



5) GP-853遺構検出状況 (恵山期)



2) GP-850遺構検出状況 (近世アイヌ墓, 刀子2本伴出)

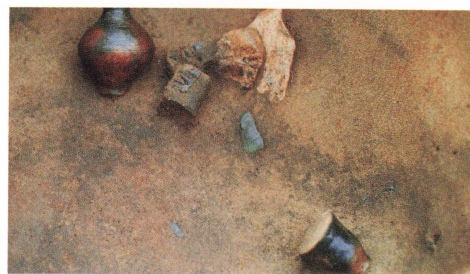
6) GP-853伴出
の恵山式土器



7) GP-854遺構検出状況 (恵山・後北伴出例)



3) GP-850人骨・遺物出土状況 (ニンカリ2点伴出)



8) GP-854遺物出土状況 (左 恵山, 右 後北)



4) GP-852埋土確認状況 (縄文晩期前葉)

9) GP-855遺構
検出状況 (統縄文期)



写真5 大川遺跡検出墓塚Ⅱ



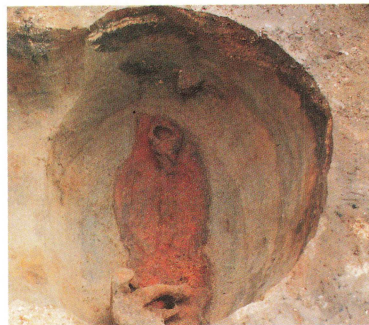
◀ 1) GP-856
遺構検出状況
(続縄文恵山期, 南川
型葬法, 頭に土器,
足に石, テイピカな
恵山墓)



◀ 2) GP-856
遺物出土状況
(右 恵山式土器,
左 人骨頭部)



◀ 3) GP-865
遺物出土状況
(縄文晩期, 中央部
からは玉4点出土)



◀ 4) GP-871
遺構検出状況
(縄文晩期, 南頭位)



◀ 5) GP-884
遺物出土状況
(縄文晩期前葉,
覆土は砂質凝灰岩,
遺体にヒスイ玉伴出)



6) GP-887遺構検出状況 (縄文晩期)



7) GP-887遺物出土状況 (握石2点・玉1点他伴出)



8) GP-892人歯・玉出土状況 (縄文晩期)



9) GP-897セクション観察状況 (縄文晩期)

写真6 大川遺跡検出墓墳Ⅲ



1) G P-900遺構検出状況 (縄文晩期前葉, 4体合葬)



7) G P-906遺物出土状況 (縄文晩期前葉)



2) G P-900遺物出土状況 (頭部にサメの歯, 胸部に石剣)



8) G P-906遺物出土状況 (人骨と握石等伴出)



3) G P-900遺物出土状況 (ヒスイ玉20点出土)



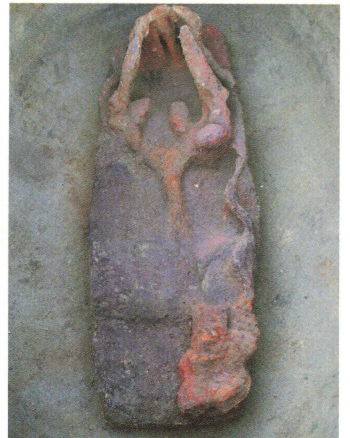
9) G P-910遺構検出状況 (縄文晩期前葉)



4) G P-904セクション観察状況 (縄文晩期前葉)

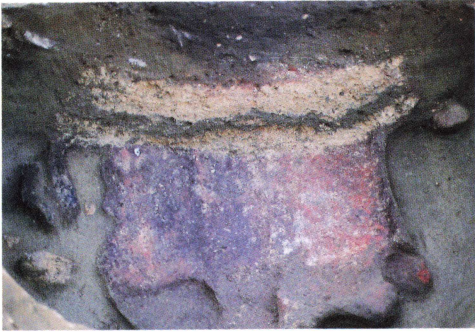


5) G P-904遺構検出状況
(南東頭位?)



6) G P-904遺体出土状況 (握石伴出)

写真7 大川遺跡検出墓塚Ⅳ



1) GP-914セクション観察状況（縄文晩期前葉）



2) GP-914遺構検出状況（覆土より土鈴出土）



3) GP-914玉出土状況（ヒスイ玉17点出土、右は勾玉）



4) GP-916遺構検出状況（恵山・後北伴出）

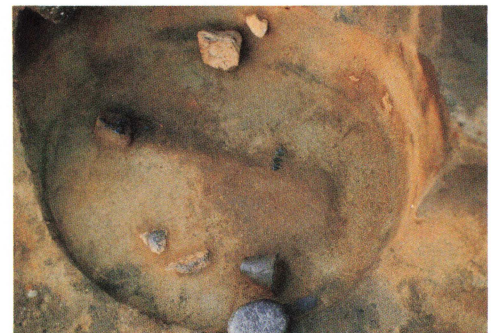


5) GP-920遺構検出状況（覆土上部には多数の礫）



6) GP-913(左)・920(右)検出状況(両者とも縄文晩期前葉)

7) GP-920
人骨出土状況
(東頭位、手前が頭部、
右手に握石1点、
玉18点等伴出)



8) GP-922遺構検出状況（続縄文後北期）

写真8 大川遺跡検出墓壙Ⅴ



1) G P-939検出状況 (縄文晩期前葉, 側臥屈葬)



2) G P-941遺構検出状況 (縄文恵山期)



3) G P-941遺物出土状況 (石鏃224点・石斧3点他伴出)



4) G P-944遺構検出状況 (縄文恵山期)



5) G P-945遺構検出状況 (縄文恵山期)



6) G P-945遺物出土状況 (左 恵山式土器, 右 異形石器)



7) G P-945遺物出土状況 (黒曜石製異形石器
39mm×47mm)



8) G P-948遺構検出状況 (縄文恵山期)



9) G P-951遺体出土状況 (縄文晩期前葉)

c . 出土遺物

今年度の発掘調査で出土した遺物は、総数約27万6千点（23頁参照）であった。6ヶ年度分を合計すると概ね153万点という驚異的な点数になってしまった。今年度出土遺物の内訳は、土器が概ね23万4千点、石器が約1万1千点、剥片が約1万2千点、動物遺体が約1万点、陶磁器が約3千8百点であり、残りは土製品・石製品・骨角器・骨角製品・金属器・金属製品・ガラス製品・石核・礫等によって構成されている。他に掲載していない多量の動物遺体等もある。

土器は、縄文前期の綱文、中野、縄文中期の円筒上層（サイベVI・VII a）、萩ヶ岡、天神山、北筒（トコロ6類）、大安在B、縄文後期の余市、手稲砂山、入江（白坂3）、ニセコ、ウサクマイC（船泊上層）、手稲、鮎澗、堂林、御殿山等である。縄文後期の土器のうち、ニセコが80%前後を占めている。縄文晩期の大洞B・BC・C1・C2・A・A'相当の土器及び大津Ⅲ、浜中大曲、上ノ国、桃内、日ノ浜、ヌサマイ、タンネトール等、続縄文期の土器としては、大狩部、港大照寺、トニカ、恵山（南川Ⅲ・Ⅳ）、後北（江別太、後北A・B・C1・C2・D）、モヨロ、北大Ⅰ・Ⅱ及びスヌヤ式等がある。弥生系の土器として、砂沢、二枚橋相当、宇鉄Ⅱ、赤穴等がある。擦文期のもものとして、北大Ⅲ、十勝茂寄、土師器、須恵器、擦文（刻文）が出土している。出土土器総数23万点のうち圧倒的多数を占めるのが縄文晩期全般にわたる土器である。縄文後期の土器の多くはニセコで、堂林を含めると90%以上を占める。該期の土器は、大川遺跡6ヶ年の調査中これまでで最も多く出土した。続縄文期の土器は恵山や港大照寺が多く、後北他は少ない。擦文期の土器は、全期間に亘るものが出土しているが、当該期前葉から中葉のものが多い。その他の縄文前期・中期の土器は、各々1点から数点程度の出土でしかない。

土製品としては、スタンプ状土製品、滑車状耳飾、土偶（図55・56・写真36）、土版、動物形土製品（図56・写真36）、土鈴（図54・写真35）、有孔土製円板、土製円板、土玉、紡錘車、鞆羽口、土錘、泥面子、泥人形、手焙り、七厘等がある。

石器としては、石鏃、石槍、石銛、石錐、搔器、削器、ナイフ、石匙、靴形石器、石斧、石鑿、砥石（Ⅱd参照）、矢柄研磨器、石鋸、石錘、敲石、凹石、石皿、石臼（Ⅱd参照）、茶臼（Ⅱd参照）、石棒、石剣（図57・写真37）、石刀（図58）等がある。石製品としては、玉（Ⅱa・b・c、写真9）、握石（図50・写真29・30）、黒曜石の棒状原石、硯（Ⅱe参照）等がある。骨角器・骨角製品としては、回転式離頭銛（表紙写真）・箆・中柄、鯉口、箸、ブラシ、網針、針、篋等がある。金属器・金属製品としては、刀剣類（大刀・太刀・山刀・マキリ・鏢・刀装具・石突・小柄）、鑷子、袋状鉄斧、矢筒の飾り金具（イカヨブのトンピ）、鎌、鉈、釘、釣針、鉄鍋、鍋弦、おろし金、キセル、鏡、矢立、灰搔き、眼鏡のフレーム、指貫、古銭（表3）、ニンカリ（写真10）、斧、燭台、銃弾、葉莢、鉄砲の火挾、スラグ等である。木製品としては漆製椀、ガラス製品としては、各種玩具、瓶、玉等が出土している。出土陶磁器のうち80%前後が近代、20%前後が近世、1%程度が中世のものである。中世陶器についてはⅡfを参照願いたい。（宮）

表2 1994(1989~1994)年度大川遺跡遺構・遺構外出土遺物一覧

遺構名・ Grid	JH 11,16,17 (1-17)	SH 17-19,20- 24,40-58, 60-69~71 (1-71)	HP	GP 843~958 104~118	UP 104~118	SP	SX	SY	MO 10-13,15- 16	溝状遺構			SM	立石	I層	II層	III層	IV層	計
										FP	HS	HS							
土器	43,022 (95,752)	22,482 (94,071)	0	32,833 (146,614)	654 (3,354)	0	1,057 (13,966)	312 (9,323)	15,944 (47,454)	0	0	0	0	0	51,407 (301,219)	42,463 (172,297)	19,256 (42,856)	5,250 (5,537)	234,680 (938,075)
土製品	103 (114)	137 (137)	0	41 (100)	0 (38)	0 (16)	2 (3)	27 (32)	49 (80)	0	0	0	0	0	250 (1,933)	113 (297)	30 (50)	4 (4)	658 (2,841)
石器	2,157 (2,924)	700 (1,821)	0	1,223 (6,689)	14 (75)	0 (9)	16 (116)	0 (145)	558 (1,087)	0	0	0	0	0	3,164 (8,959)	2,326 (4,675)	876 (1,292)	314 (318)	11,348 (28,156)
石製品	39 (68)	70 (70)	0	915 (6,793)	0 (5)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	27 (67)	0	0	0	0	0	51 (248)	5 (36)	2 (11)	0 (0)	1,045 (7,361)
骨角器	11 (33)	0 (26)	0	1 (44)	0 (2)	0 (1)	0 (0)	0 (0)	1 (47)	0	0	0	0	0	26 (316)	18 (63)	5 (14)	1 (1)	52 (556)
金属製品	4 (147)	0 (7)	0	0 (12)	0 (2)	0 (0)	0 (1)	0 (0)	8 (11)	0	0	0	0	0	9 (693)	2 (79)	0 (4)	0 (0)	30 (80)
木製品	0 (5)	0 (1)	0	0 (64)	0 (8)	0 (4)	0 (0)	0 (0)	0 (39)	0	0	0	0	0	0 (198)	0 (26)	0 (4)	0 (0)	0 (351)
陶磁器	467 (508)	19 (625)	0	6 (23)	0 (25)	0 (7)	0 (0)	2 (3)	403 (723)	0	0	0	0	0	2,884 (50,183)	62 (2,132)	2 (129)	9 (9)	3,854 (54,961)
刺片	2,556 (11,186)	1,505 (23,977)	0	1,667 (78,740)	17 (556)	0 (173)	55 (1,413)	0 (461)	1,310 (6,145)	0	0	0	0	0	2,397 (31,805)	2,101 (18,503)	828 (3,448)	407 (431)	12,843 (178,959)
礫	0 (269)	67 (632)	0	50 (2,210)	4 (174)	0 (43)	1 (5)	0 (3)	18 (89)	0	0	0	0	0	46 (477)	26 (533)	5 (87)	0 (1)	237 (4,663)
動物遺体	1,500 (2,777)	9 (1,827)	0	41 (1,415)	0 (19)	0 (15)	0 (0)	0 (1)	1,060 (3,558)	0	0	0	0	0	764 (9,672)	251 (1,202)	1 (46)	0 (0)	3,626 (24,631)
貝	4 (4,423)	19 (3,027)	0	0 (9)	0 (3)	0 (11)	0 (0)	0 (0)	4,786 (39,267)	0	0	0	0	0	756 (78,756)	1,440 (12,221)	0 (380)	3 (3)	7,008 (272,803)
植物遺体	0 (86)	0 (24)	0	2 (5,738)	0 (200)	0 (12)	0 (0)	0 (0)	931 (931)	0	0	0	0	0	113 (113)	129 (129)	0 (40)	0 (0)	2 (9,945)
その他	1 (5)	0 (34)	0	1 (83)	0 (10)	0 (3)	0 (0)	0 (0)	6 (28)	0	0	0	0	0	32 (542)	3 (154)	1 (29)	0 (0)	44 (910)
計	50,031 (118,365)	24,853 (126,903)	0	36,792 (248,908)	689 (4,654)	0 (1,468)	1,131 (15,509)	341 (9,968)	24,365 (100,174)	0	0	0	0	0	62,021 (487,859)	48,843 (213,644)	21,009 (48,453)	6,033 (6,348)	276,108 (1,533,100)

※ UP-2・5・7・29・32・36・38・39・44・45・53・57・60~62・66~70・72・75~89・92・94~101・103・105・107・113は欠番

※※ 微小遺物については重量で集計しているが記載はしない。

※※※ この表は1995年2月10日現在のものである。

表3 1994 (1989~1994) 年度遺構出土古銭・硬貨

〈遺構出土古銭・硬貨〉

遺構名	古銭・硬貨名	鑄造年	時代	枚数	備考
JH-4	開元通宝	621~	唐	(1)	覆土
"	寛永通宝	1626~1869	江戸	(1)	"
JH-5	寛永通宝	"	"	(1)	"
JH-10	寛永通宝	"	"	(2)	"
JH-11	永樂通宝	1411~	明	1 (1)	"
"	寛永通宝	1626~1869	江戸	2 (2)	"
"	桶1銭青銅貨	1913	大正	1 (1)	"
JH-14	淳化元宝	990~	北宋	(1)	"
"	桶1銭青銅貨	1921	大正	(1)	"
SH-6	開元通宝	621~	唐	(3)	"
"	不 明	—	—	(1)	"
SH-16	2銭銅貨	1881	明治	(1)	"
SH-21	毫1銭銅貨	1880	"	(1)	"
SH-23	半銭銅貨	1887	"	(1)	"
SH-34	文久永宝	1863~	江戸	(1)	"、草文
"	桶1銭青銅貨	1919	大正	(1)	"
SH-37	寛永通宝	1626~1869	江戸	(1)	"
SH-50	寛永通宝	"	"	(1)	"
GP-590	寛永通宝	"	"	(1)	"
GP-600	開元通宝	621~	唐	(1)	伴出、真書
"	淳化元宝	990~	北宋	(1)	"
"	咸平元宝	998~	"	(3)	"
"	祥符通宝	1009~	"	(1)	"
"	天禧通宝	1017~1021	"	(2)	"
"	天聖元宝	1023~	"	(3)	"、真書1
"	皇宋通宝	1039~	"	(3)	"、真書2、篆書1
"	至和元宝	1054~	"	(3)	"、真書1、篆書1、行書1
"	嘉祐元宝	1056~	"	(1)	"、篆書
"	治平元宝	1064~1067	"	(1)	"、真書
"	熙寧元宝	1068~	"	(4)	"、真書2、篆書2
"	元豐通宝	1078~	"	(4)	"、篆書1、行書3
"	元祐通宝	1086~	"	(6)	"、真書2、篆書4
"	紹聖元宝	1094~1097	"	(1)	"、真書
"	聖宋元宝	1101~	"	(1)	"、篆書
"	政和通宝	1111~	"	(2)	"、真書
"	洪武通宝	1368~	明	(2)	"
"	永樂通宝	1408~	"	(4)	"
"	宣德通宝	1433~	"	(1)	"
"	不 明	—	—	(1)	"
GP-608	開元通宝	621~	唐	(1)	"
"	至道元宝	995~	北宋	(1)	"、行書
"	咸平元宝	998~	"	(2)	"
"	景德元宝	1004~	"	(1)	"
"	祥符通宝	1008~	"	(3)	"
"	祥符通宝	1009~	"	(3)	"
"	天禧通宝	1017~1021	北宋	(2)	"
"	皇宋通宝	1039~	"	(1)	"、篆書
"	至和元宝	1054~	"	(2)	"、真書、篆書
"	嘉祐元宝	1056~	"	(1)	"、真書
"	熙寧元宝	1068~	"	(1)	"、真書
"	元豐通宝	1078~	"	(3)	"、真書2、篆書1
"	元祐通宝	1086~	"	(1)	"、真書
"	紹聖元宝	1094~1097	"	(1)	"、真書
"	政和通宝	1111~	"	(2)	"、真書、篆書
"	洪武通宝	1368~	明	(2)	"
UP-17	天聖元宝	1023~	北宋	(1)	覆土
UP-23	不 明	—	—	(1)	"
MO-1	不 明	—	—	(1)	覆土
MO-10	寛永通宝	1626~1869	江戸	4 (7)	"
"	文久永宝	1863~	"	1 (1)	"
"	毫1銭銅貨	1881	明治	(1)	"
MO-11	天聖元宝	1023~	北宋	(1)	"
"	寛永通宝	1626~1869	江戸	(1)	"
SM-1	寛永通宝	"	"	(1)	"
SM-2	寛永通宝	"	"	(4)	"
"	不 明	—	—	(2)	"
SM-3	胤元重宝	753~	唐	(1)	"
"	寛永通宝	1626~1869	江戸	(2)	"
"	不 明	—	—	(1)	"
SM-4	元符通宝	1098~1100	北宋	(1)	"
"	聖宋元宝	1101~	"	(1)	"
SM-10	寛永通宝	1626~1869	江戸	(1)	"
SM-11	不 明	—	—	(1)	"
SM-13	不 明	—	—	(2)	"
SM-17	寛永通宝	1626~1869	江戸	(7)	"
計				9 (133)	

〈遺構外出土古銭〉

古銭名	鑄造年	時代	1層	日層	計
開元通宝	621~	唐	(2)	(1)	(3)
祥符元宝	1008~	北宋	(2)		(2)
天禧通宝	1017~1021	"	(1)		(1)
天聖元宝	1023~	"	1 (3)	(2)	1 (5)
皇宋通宝	1039~	"	(4)		(4)
嘉祐通宝	1056~1063	"	(1)		(1)
治平元宝	1064~1067	"	(1)		(1)
熙寧元宝	1068~	"	1 (2)	(1)	1 (3)
元豐通宝	1078~	"	(2)		(2)
元祐通宝	1086~	"	(1)		(1)
紹聖元宝	1094~1097	"	(2)	(1)	(3)
元符通宝	1099~1100	"	(1)	(1)	(2)
政和通宝	1111~	"	(2)	(1)	(3)
泰和通宝	不 明	金	(1)		(1)
洪武通宝	1368~	明	(1)		(1)
永樂通宝	1411~	"	(6)		(6)
常平通宝	1679~1910	李朝	(1)		(1)
寛永通宝	1626~1869	江戸	39 (323)	1 (24)	40 (347)
宝永通宝	1708~	"	1 (1)		1 (1)
大保通宝	1835~1870	"	(3)		(3)
文久永宝	1863~	"	(9)	(3)	(12)
箱館通宝	1856~	"	1 (2)		1 (2)
不 明 銭	—	—	(22)	(7)	(29)
計			43 (393)	1 (41)	44 (434)

〈遺構外出土硬貨〉

硬貨名	鑄造期間	1層	日層	計
旭日50銭銀貨	1906~1917	(2)		(2)
竜20銭銀貨	1873~1905	(3)		(3)
旭日20銭銀貨	1906~1911	1 (1)		1 (1)
竜10銭銀貨	1873~1906	(5)		(5)
旭日10銭銀貨	1907~1917	1 (1)		1 (1)
竜5銭銀貨	1873~1877	(1)		(1)
菊5銭白銅貨	1889~1897	(8)	1 (2)	1 (10)
桶5銭白銅貨	1897~1905	(2)		(2)
2銭銅貨	1873~1884	(21)	1 (3)	1 (24)
竜1銭銅貨	1873~1888	5 (48)	(18)	5 (66)
半銭銅貨	1873~1888	7 (69)	(4)	7 (73)
10銭白銅貨	1920~1932	1 (5)		1 (5)
小型5銭白銅貨	1920~1932	(6)	(1)	(7)
桶1銭青銅貨	1898~1915	(1)		(1)
桶1銭青銅貨	1916~1938	7 (81)	(5)	7 (86)
5厘青銅貨	1916~1919	(1)	(1)	(2)
大型50銭黄銅貨	1946~1947	(1)		(1)
小型50銭黄銅貨	1947~1948	1 (3)		1 (3)
菊10銭アルミ貨	1940~1943	(2)		(2)
10銭錫貨	1944	1 (3)	(1)	1 (4)
5銭アルミ貨	1940~1943	2 (8)		2 (8)
穴アキ5銭錫貨	1944	(2)		(2)
菊5銭錫貨	1945~1946	(1)	(1)	(2)
鳥1銭アルミ貨	1938~1940	(2)		(2)
富士1銭アルミ貨	1941~1943	(4)		(4)
1銭錫貨	1944~1945	(1)		(1)
穴ナシ5円黄銅貨	1948~1949	(1)		(1)
1円黄銅貨	1948~1950	2 (4)		2 (4)
不 明 硬貨	—	(14)	(1)	(15)
計		28 (301)	2 (37)	30 (338)

〈遺構外出土西洋硬貨〉

硬貨名	鑄造期間	国名	枚数
3カペイカ	1926	ソ連	(1)
不 明	—	—	(1)
計			(2)

〈遺構外出土絵銭〉

絵 銭 名	時代	枚数
吉 田 牛 曳 銭	江戸	(1)
全 林 蓮 上 屋	江戸	(1)
計		(2)



写真9 大川遺跡出土のヒスイの玉(各墓壙等出土)



写真10 大川遺跡出土のニンカリ (1・2 GP-850, 3・4 GP-600, 5 P49Grid出土)

II 諸分析の概要と若干の考察

a 大川遺跡出土の管玉の産地分析

藁科哲男・東村武信（京都大学原子炉実験所）

はじめに

遺跡から出土する大珠・勾玉・管玉の産地分析というのは、玉類の製品が何処の玉造遺跡で加工されたかということ調査するのではなくて、何ヶ所かある碧玉の原産地のうち、どこの原産地の原石を利用しているかを明らかにするのが玉類の原産地推定である。玉類の原石の産地を明らかにすることは考古学上重要な意味をもっている。糸魚川市でヒスイが発見されるまでは、中国雲南・ビルマ説、発見後は、専ら国内説で、岩石学的方法および貴重な考古遺物を非破壊で産地分析を行った蛍光X線分析で行う元素比法が報告されている。また、碧玉製管玉の産地分析を系統的に行った研究では、蛍光X線分析法と電子スピン共鳴法を併用し産地分析をより正確に行った例が報告されている。石鏃などの石器と玉類の製品はそれぞれ使用目的が異なるため、それぞれの産地分析で得られた結果の意味も異なる。

(1) 石器の原材産地推定で明らかになる、遺跡から石材原産地までの移動、活動範囲は、石器は生活必需品であるため、生活上必要な生活圏と考えられる。

(2) 玉類は古代人が生きるために必ずしも必要なものではない。勾玉・管玉は権力の象徴・お祭・

表4 大川遺跡出土管玉(碧玉・鉄石英)分析一覧

分析No	試料No	遺構No	遺物No	石質	時期	長(→)×径(←)	重量(g)
36803	1	GP-48	1	碧玉	7c	24.0 9.5	3.9
36804	2	"	2	"	"	23.0 10.0	4.3
36805	3	"	3	"	"	28.0 10.0	4.6
36806	4	"	4	"	"	25.5 8.5	3.3
36807	5	GP-123	47	碧玉	恵山式期	18.0 2.5	0.2
36808	6	"	48	"	"	31.0 4.0	0.8
36809	7	"	50	"	"	27.5 4.5	0.9
36810	8	"	54	"	"	16.5 3.0	0.2
36811	9	"	55	"	"	18.5 3.0	0.3
36812	10	"	57	"	"	15.5 3.0	0.2
36813	11	"	—	"	"	17.5 2.5	0.2
36814	12	"	—	"	"	17.0 3.0	0.2
36819	13	"	46	鉄石英	"	18.0 4.5	0.7
36820	14	"	49	"	"	20.0 4.5	0.8
36821	15	"	53	"	"	22.5 4.5	0.8
36822	16	"	56	"	"	14.5 4.5	0.6
36815	17	GP-620	17	碧玉	恵山式期	16.0 4.5	0.6
36816	18	"	18	"	"	13.5 4.7	0.5
36823	19	"	19	"	"	22.0 5.0	0.8
36824	20	"	192	"	"	20.0 5.0	0.8
36825	21	"	357	"	"	15.5 4.5	0.6
36826	22	"	16	鉄石英	"	17.0 4.0	0.5
36827	23	"	355	"	"	16.0 5.0	0.7
36828	24	"	356	"	"	14.5 4.3	0.5



写真11 大川遺跡GP-48管玉出土状況



写真12 大川遺跡GP-123検出状況



写真13 大川遺跡GP-123管玉出土状況

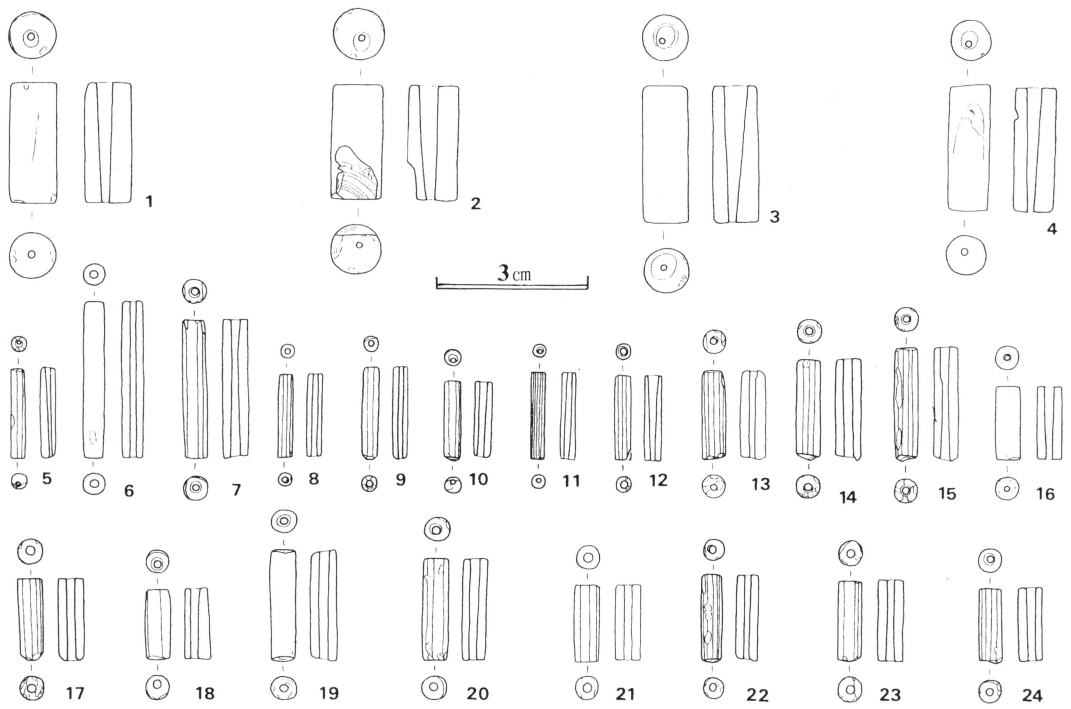


図7 大川遺跡出土の管玉 (1~4 GP-48, 5~16 GP-123, 17~24 GP-620)

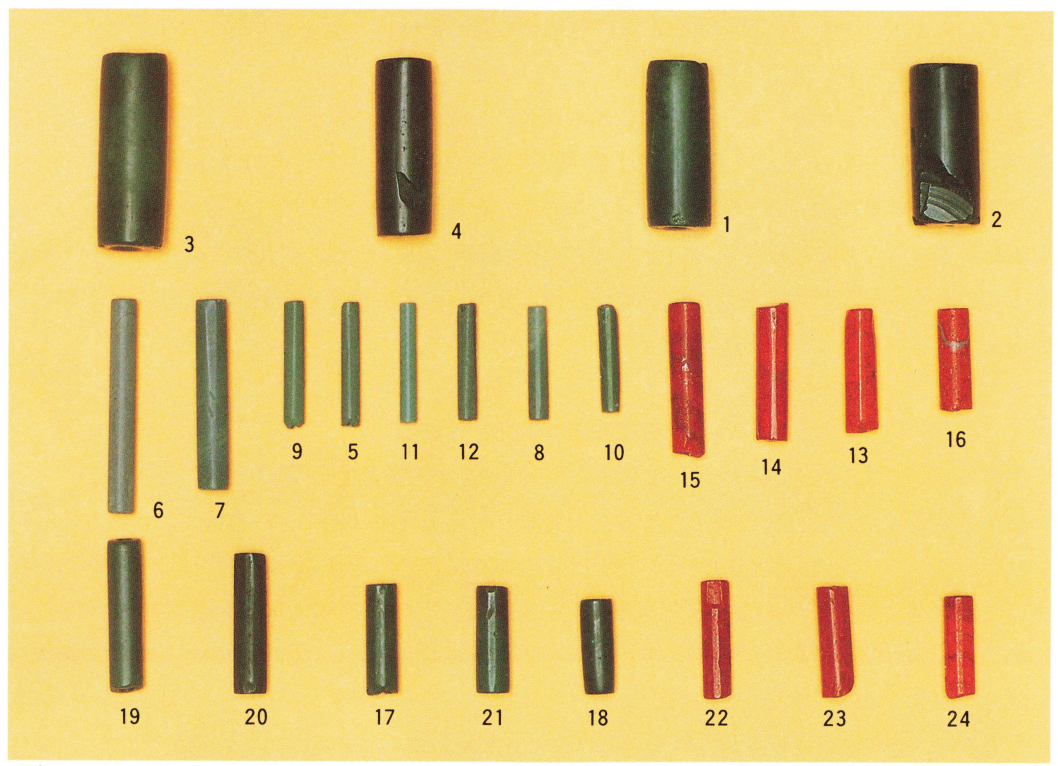


写真14 大川遺跡出土の管玉 (1~4 GP-48, 5~16 GP-123, 17~24 GP-620)

御守り・占いの道具・アクセサリーとして、精神的な面に重要な作用を与えると考えられる。従って、玉類の産地分析で明らかになる碧玉製玉類の原石の分布範囲は、権力の象徴としての玉類であれば、権力圏を現わしているかもしれない。お祭り・御守り・占いの道具であれば、同じような習慣を持つ文化圏が考えられる。石器の原産地分析でしか得られない貴重な資料を考古学の分野に提供することができる。

今回分析を行った遺物は北海道余市町に位置する大川遺跡出土の管玉24個で、分析した管玉(写真14)の出土状況(写真11~13)・実測図(図7)、試料番号・出土遺構番号・遺物番号・肉眼的石質・時期等を表4に示す。これら遺物の分析結果が得られたので報告する。

非破壊での産地分析の方法と手段

原産地推定の第一歩は、原産地間を区別する人間で言えば指紋のような、その原産地だけにはないという指標を見つけなければならない。その区別するための指紋は鉱物組成の組み合わせ、比重の違い、原石に含有されている元素組成の違いなどにより、原産地同士を区別できなければ産地分析はできない。成功するかどうかは、とにかく行ってみなければわからない。原産地同士が指紋で区別できたならば、次に遺跡から出土する遺物の指紋と原産地の指紋を比較して、一致しない原産地を消去して一致する原産地の原石が使用されていると判定する。

ヒスイや碧玉製の勾玉・大珠・玉などは、国宝・重要文化財級のものが多くて、非破壊で産地分析が行える方法でなければ発展しない。石器の原材産地分析で成功している非破壊で分析を行う蛍光X線法を用いて玉類に含有されている元素を分析する。

遺跡から出土した大珠・勾玉・管玉などを水洗いして、試料ホルダーに置くだけの、完全な非破壊で産地分析を行った。碧玉・ヒスイ製玉類は蛍光X線分析法で元素の種類と含有量を求め、試料の形や大きさの違いの影響を打ち消すために分析された元素同士で含有量の比をとり、この元素比の値を原産地を区別する指紋とした。碧玉製玉類はESR法を併用するが試料を全く破壊することなく、碧玉に含有されている常磁性種を分析し、その信号から碧玉産地間を区別する指標を見つけて、産地分析に利用した。

碧玉原石の蛍光X線分析

碧玉の蛍光X線スペクトルの例として島根県花仙山産原石を図9に示す。

猿八産・玉谷産の原石から検出される蛍光X線ピークも異同はあるものの図9で示されるピークは観測される。土岐・興部の産地の碧玉は鉄の含有量が他の産地のものに比べて大きいのが特徴である。産地分析に用いる元素比組成は、Al/Si, K/Si, Ca/K, Ti/K, K/Fe, Rb/Fe, Fe/Zr, Rb/Zr, Sr/Zr, Y/Zrである。Mn/Fe, Ti/Fe, Nb/Zrの元素比は非常に小さく、小さい試料の場合測定誤差が大きくなるので定量的な判定の指標とはせず、判定のときに、Ba・La・Ceのピークの高さとともに、定性的に原材産地を判定する指標として用いる。

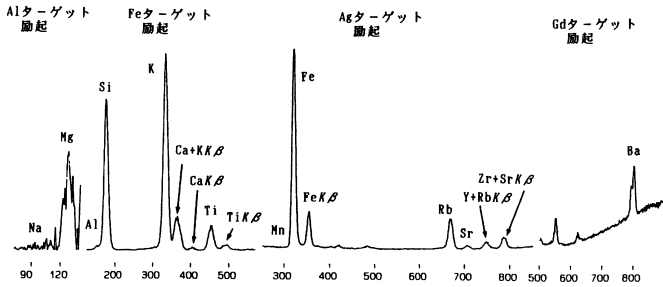
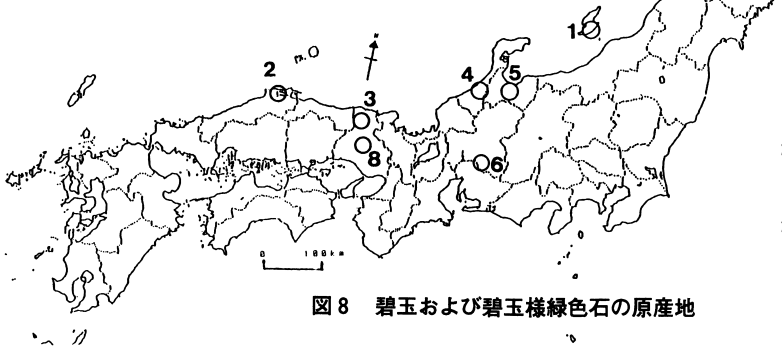


図9 花仙山産碧玉原石の蛍光X線スペクトル



- 露頭（原石が生成した場所で採集可能な地点）
- 1: 畑野町 猿八原産地
 - 2: 玉添町 花仙山産地
 - 3: 豊岡市 玉谷産地
 - 8: 山南町 石戸産地
- 露頭不明で2次の産地
- 4: 金沢市 二俣産地：碧玉様
 - 5: 細入村 細入産地：碧玉様
 - 6: 土岐市 土岐産地
 - 7: 西興部村 興部産地
 - 9: 富良野市 空知川流域

図8 碧玉および碧玉様緑色石の原産地

碧玉の原産地と原石の分析結果

分析した碧玉の原石の原産地を図8に示す。佐渡猿八原産地は、(1)新潟県佐渡郡畑野町猿八地区で、産出する原石は地元で青玉と呼ばれている緑色系の石で、良質なものは割れ面がガラス光沢を示し、質の良くないものは光沢の少ないグリーンタフ的なものである。産出量は豊富であったらしく採石跡が何ヶ所も見られ、分析した原石は猿八の各地点から表採したものおよび地元で提供された原石などで、提供されたものの中には露頭から得られたものがありグリーンタフ層の間に約7cm幅の良質の碧玉層が挟まれた原石であった。分析した原石の比重と個数は、比重が2.6~2.5の間のもは31個、2.5~2.4の間は5個の合計36個で、この中には、茶色の碧玉も2個含まれている。原石の比重が2.6~2.3の範囲で違っても、碧玉の色が茶色・緑色、また、茶色系と緑色系の縞があるなど、多少色の違いがあっても組成上には反映されていない。出雲の花仙山は近世まで採掘が行われた原産地で、所在地は(2)島根県八束郡玉湯町玉造温泉地域である。産出する原石は濃緑色から緑色の緻密で、剥離面が光沢をもつ良質の碧玉から淡緑色から淡白色などいろいろで、硬度が低そうなグリーンタフの様な原石も見られる。良質な原石の比重は2.5以上あり、質が悪くなるにしたがって比重は連続的に2.2まで低くなる。分析した原石は、比重が2.619~2.600の間のもは10個、2.599~2.500は18個、2.499~2.400は7個、2.399~2.300は11個、2.299~2.200は11個、2.199~2.104は3個の合計60個である。比重から考えると碧玉からグ

リーントフまでの領域が分析されている。花仙山産原石は色の違い、比重の違いによる組成の差はみられなかった。玉谷原産地は、(3) 兵庫県豊岡市辻、日高町玉谷地域で、産出する碧玉の色、石質などは肉眼では花仙山産の原石と全く区別がつかない。また、原石の中には緑系色に茶系色が混じるものもみられ、これは佐渡猿八産原石の同質のものに非常によく似ている。比重も2.6以上あり、質は花仙山産、佐渡猿八産原石より優れた感じのものもみられる。このような良質の碧玉の採取は、産出量も少ないことから長時間をかけて注意深く行う必要がある。分析した原石は、比重が2.644~2.600は23個、2.599~2.589は4個の合計27個で、玉谷産原石は色の違いによる分析組成の差はみられなかった。また、玉谷原石と一致する組成の原石は日高町八代谷・石井・アラクなどで採取できる。二俣原産地は、(4) 石川県金沢市二俣町地域で、原石は二俣川の河原で採取できる。二俣川の源流は医王山であることから、露頭は医王山に存在する可能性がある。河原で見られる碧玉原石は、大部分がグリーンタフ中に層状、レンズ状に非常に緻密な部分として見られる。分析した4個の原石の中で、3個は同一塊から3分割したもので、1個は別の塊からのもので、前者の3個の比重は2.42で後者は2.34である。元素組成は他の産地の組成と異なり区別できる。この4個が二俣原産地から産出する碧玉原石の特徴を代表しているかどうか、さらに分析数を増やす必要がある。細入村の産地は、(5) 富山県婦負郡細入村割山定座岩地区のグリーンタフの岩脈に団塊として緻密な濃緑の碧玉質の部分が見られる。肉眼では、他の産地の碧玉と区別できず、また、出土する碧玉製の玉類とも非常に似た石質である。しかし、比重が非常に軽く、分析した8個は2.25~2.12で、この比重の値で他の原産地と区別できる場合が多い。土岐原産地は、(6) 愛知県土岐市地域で、赤色・黄色・緑色などが混じり合った原石が産出し、このうち緻密な光沢のよい濃緑で比重が2.62~2.60の原石を碧玉として11個分析を行った。ここの原石は鉄の含有量が非常に大きく、カリウム含有量が小さいという特徴を持ち、この元素比の値で他の原産地と区別できる。興部産地、(7) 北海道西興部村の碧玉原石には鉄の含有量が非常に高く、他の原産地と区別する指標になっている。また、比重が2.6以下のものはなく遺物の産地を特定する指標として重要である。石戸の産地、(8) 兵庫県氷上郡山南町地区の安山岩に脈岩として採取されるが産出量は非常に少ない。元素組成から他の産地の碧玉と区別できる。

これら原石を原産地ごとに統計処理を行い、元素比の平均値と標準偏差値をもとめて母集団を作り表2に示す。各母集団に原産地名を付けて、その産地の原石群、例えば花仙山群と呼ぶ。花仙山群は比重によって2個の群に分けて表に示したが比重は異なっても組成に大きな違いはみられない。したがって、統計処理は一緒にして行い、花仙山群として取り扱った。原石群とは異なるが、豊岡市女代南遺跡で主体的に使用されている碧玉製の玉の原材料で原産地は不明の遺物が出土している。同質の材料で作られた可能性がある玉類は北陸・近畿・中国地方に分布しているらしい。この分布範囲を明らかにし、原石産地を探索するという目的で女代南遺物群として原石群と同じように使用する。

この他、鳥取県の福部村多鯉池・鳥取市防己尾岬などの自然露頭からの原石を4個分析した。

表5 各碧玉の原産地における原石群の元素比の平均値と標準偏差値

原石群名	分析個数	A1/Si X±σ	K/Si X±σ	Ca/K X±σ	Ti/K X±σ	K/Fe X±σ	Rb/Fe X±σ	Fe/Zr X±σ	Sr/Zr X±σ	Rb/Zr X±σ	Sr/Zr X±σ	Y/Zr X±σ	Mn/Fe X±σ	Ti/Fe X±σ	Nb/Zr X±σ	比重 X±σ
奥郡	31	0.011±0.003	0.580±0.320	0.123±0.137	0.061±0.049	0.022±0.006	0.070±0.021	174.08±124.9	16.990±13.44	0.668±0.435	1.801±1.434	0.004±0.003	0.001±0.001	0.455±0.855	2.626±0.032	
空知A1	10	0.049±0.017	1.044±0.299	2.308±0.556	0.484±0.096	0.052±0.012	0.108±0.042	4.658±2.044	0.638±0.089	15.675±4.311	0.054±0.041	0.078±0.152	0.019±0.005	0.003±0.007	2.495±0.039	
空知A2	3	0.019±0.009	0.675±0.377	0.623±0.203	0.172±0.031	0.040±0.007	0.037±0.010	27.651±10.97	1.132±0.759	5.305±3.179	0.349±0.251	0.009±0.003	0.006±0.003	0.118±0.167	2.632±0.012	
空知B	4	0.066±0.001	3.927±0.267	0.088±0.004	0.089±0.003	0.283±0.034	0.455±0.010	2.281±0.278	1.035±0.104	0.235±0.084	0.129±0.022	0.015±0.002	0.022±0.004	0.123±0.010	2.607±0.001	
篠八	36	0.046±0.007	3.691±0.548	0.049±0.038	0.088±0.011	0.370±0.205	0.384±0.153	1.860±1.070	0.590±0.185	0.271±0.127	0.265±0.138	0.003±0.001	0.018±0.010	0.032±0.014	2.543±0.049	
土岐	27	0.029±0.009	0.404±0.229	0.090±0.074	0.067±0.035	0.027±0.007	0.091±0.029	47.540±31.76	4.074±2.784	0.312±0.323	0.158±0.065	0.001±0.001	0.001±0.001	0.261±0.242	2.607±0.009	
玉岐	11	0.029±0.009	0.625±0.297	0.170±0.102	0.077±0.035	0.046±0.014	0.151±0.020	6.190±1.059	0.940±0.205	0.192±0.170	0.156±0.075	0.006±0.003	0.016±0.003	0.054±0.021	2.619±0.014	
花畑山1	27	0.019±0.004	0.509±0.437	0.117±0.108	0.222±0.098	0.069±0.019	0.225±0.028	10.633±3.616	2.345±0.693	0.476±0.192	0.098±0.052	0.009±0.002	0.009±0.002	0.042±0.034	2.570±0.044	
花畑山2	3	0.019±0.003	1.178±0.324	0.157±0.180	0.229±0.139	0.050±0.015	0.073±0.020	12.677±2.988	2.723±0.519	0.132±0.164	0.132±0.071	0.009±0.004	0.008±0.004	0.035±0.025	2.308±0.079	
細入	8	0.043±0.003	2.644±0.284	0.991±0.386	0.372±0.125	0.031±0.008	0.170±0.029	12.884±3.752	0.882±0.201	1.879±0.650	0.003±0.002	0.003±0.002	0.008±0.002	0.021±0.044	2.169±0.039	
一俣	4	0.043±0.001	2.644±0.183	0.337±0.079	0.158±0.009	0.332±0.069	0.338±0.079	1.495±0.734	0.481±0.176	0.897±0.051	0.088±0.015	0.007±0.002	0.043±0.010	0.043±0.023	2.440±0.091	
二石	4	0.019±0.004	0.601±0.196	0.075±0.022	0.086±0.038	0.154±0.072	0.170±0.072	7.242±1.597	1.142±0.315	0.649±0.158	0.247±0.092	0.007±0.001	0.009±0.002	0.227±0.089	2.598±0.008	
女代南B	68	0.045±0.016	3.115±0.445	0.042±0.024	0.107±0.036	0.283±0.099	0.267±0.063	2.374±0.676	0.595±0.065	0.214±0.097	0.171±0.047	0.011±0.004	0.026±0.009	0.034±0.016	2.554±0.019	

X: 平均値, σ: 標準偏差値, 女代南B: 女代南遺跡 (豊岡市) で使用されている原石産地不明の玉原材で作った群

表6 大川遺跡出土の管玉の分析結果

試料番号	分析番号	A1/Si	K/Si	Ca/K	Ti/K	K/Fe	Rb/Fe	Fe/Zr	Rb/Zr	Sr/Zr	Y/Zr	Mn/Fe	Ti/Fe	Nb/Zr	重量g	比重
管玉1	36803	0.19	956	0.95	1.66	0.62	218	15,508	3.384	3.18	0.134	0.001	0.007	0.045	3.901	2.615
"	36804	0.21	1,048	1.21	1.62	0.56	189	14,002	2.640	2.26	0.156	0.001	0.007	0.000	4.279	2.609
"	36805	0.23	1,575	1.26	1.92	0.82	231	14,373	3.326	4.40	0.226	0.001	0.007	0.061	4.599	2.379
"	36806	0.24	1,220	1.20	1.88	0.57	205	18,106	3.703	5.95	0.226	0.002	0.008	0.000	3.290	2.613
"	36807	0.44	4,283	0.48	2.83	4.17	252	2,200	5.55	1.58	0.090	0.008	0.009	0.014	0.204	2.582
"	36808	0.57	5,410	0.52	3.11	7.10	367	1,333	4.89	1.05	0.155	0.000	0.184	0.009	0.793	2.517
"	36809	0.58	3,795	0.29	3.02	4.39	288	1,883	5.42	0.74	1.09	0.008	0.112	0.014	0.932	2.553
"	36810	0.49	4,267	0.47	2.66	4.95	315	1,830	2.29	1.25	1.15	0.009	0.103	0.000	0.275	2.594
"	36811	0.45	3,910	0.54	3.18	2.93	229	2,901	6.65	1.38	0.098	0.008	0.073	0.000	0.275	2.594
"	36812	0.33	2,336	0.26	0.45	7.79	728	801	5.84	1.03	0.04	0.004	0.032	0.000	0.229	2.257
"	36813	0.45	3,835	0.39	1.26	5.95	554	727	4.02	2.03	0.090	0.005	0.060	0.000	0.182	2.637
"	36814	0.00	0.225	8.63	3.26	2.19	166	3,362	5.57	1.31	1.27	0.009	0.005	0.000	0.197	2.558
"	36815	0.00	0.024	1.361	1.52	0.06	0.000	148,292	0.58	3.58	0.345	0.000	0.000	0.000	0.713	2.660
"	36816	0.01	0.18	2.271	0.86	0.05	0.000	999,999	999,999	999,999	999,999	0.000	0.000	0.000	0.783	2.700
"	36817	0.00	0.015	8.47	2.67	0.04	0.000	999,999	999,999	999,999	999,999	0.001	0.000	0.000	0.808	2.684
"	36818	0.00	0.422	0.41	0.53	2.87	362	1,765	6.39	0.74	1.47	0.002	0.013	0.000	0.590	2.744
"	36819	0.51	3,599	0.84	0.55	3.59	400	1,361	5.44	1.90	0.337	0.004	0.016	0.000	0.608	2.555
"	36820	0.44	3,593	0.51	0.95	3.16	252	1,997	5.03	1.73	0.082	0.003	0.030	0.000	0.505	2.577
"	36821	0.47	4,198	0.25	0.51	3.08	357	1,641	5.86	0.96	0.086	0.002	0.015	0.024	0.763	2.560
"	36822	0.00	0.12	3.059	0.590	0.03	0.001	999,999	999,999	999,999	999,999	0.000	0.000	0.000	0.569	2.563
"	36823	0.10	0.012	0.830	0.511	0.003	0.002	906,529	1,810	1,752	5.87	0.000	0.000	0.000	0.469	2.650
"	36824	0.11	0.036	1.906	0.721	0.04	0.001	386,117	1,197	0.515	0.972	0.001	0.000	0.000	0.686	2.680
"	36825	0.80	3,703	0.751	0.212	1.28	251	3,874	1,278	0.974	0.232	0.023	0.023	0.075	0.464	2.698

a): 標準試料, Ando, A., Kurasawa, H., Ohmori, T. & Takeda, E. (1974). 1974 compilation of data on the GJS geochemical reference samples JG-1 granodiorite and JB-1 basalt. *Geochemical Journal*, vol.8, 175-192.

比重は2.6以上あり元素比組成は、興部・玉谷・土岐石に似るが、他の原産地の原石とは組成で区別される。また、緑系の原石ではない。

大川遺跡出土の管玉と国内産碧玉素材との比較

遺跡から出土した玉類は表面の泥を超音波洗浄器で水洗するだけの完全な非破壊分析で行っている。

遺物の原産地の同定をするために、(1) 蛍光X線法で求めた原石群と碧玉製遺物の分析結果を数理統計の手法を用いて比較をする定量的な判定法で行なう。(2) また、ESR分析法により各産地の原石の信号と遺物のそれを比較して、似た信号の原石の産地の原材であると推測する方法も応用した。

蛍光X線法による産地分析

これら遺物の蛍光X線分析の結果(図10~33)および比重(表6)から原材料の岩石を碧玉および考古学者間で俗に呼ばれている鉄石英の2個に分類した。(1) 碧玉と分類した遺物は、緻密で比重が2.5以上あること、蛍光X線分析でRb・Sr・Y・Zrの各元素が容易に観測できるなどを条件に分類した。(2) 赤色の緻密で、比重も碧玉より若干重く、蛍光X線分析で碧玉に比べてK・Ti・Feの各元素が容易に観測できて、Al・Rb・Sr・Y・Zrの含有量が少ない管玉を鉄石英として分類した。これら遺物の元素組成比および比重の結果を碧玉原石群(表5)の結果と比較してみる。遺物の比重が2.3以上ある遺物は細入原産地の原石でないことが分かる。原石の数が多く分析された産地については、数理統計のマハラノビスの距離を求めて行うホテリングT²検定により同定を行い結果を表7に示した。信頼限界としている0.1%以上で原石群に帰属された遺物は興部群には管玉13で、花仙山群に管玉1・2・3・4で、佐渡猿八群には管玉10・11・17・18・19・20・21で、女代南(B)遺物群では管玉19・20で、この2個は猿八群にも帰属されている。また、土岐・二俣・細入・石戸原産地は統計処理ができるだけの原石の分析数が用意されていないが元素組成の比較から、これら産地の原石と一致する組成の遺物は見られなかった。蛍光X線分析の結果から原産地が特定された遺物を、その原産地の原石であると結論するには、以下に述べる電子スピニング共鳴(ESR)法による結果も花仙山・猿八・女代南(B)遺物群に一致すればより確実な結果となる。

ESR法による産地分析

ESR分析は碧玉原石に含有されているイオンとか、碧玉が自然界からの放射線を受けてできた色中心などの常磁性種を分析し、その信号から碧玉産地間を区別する指標を見つけて、産地分析に利用した。ESRの測定は、Varian社のE-4型X-バンドスペクトロメーターで行う。試料は完全な非破壊分析で、直径が11mm以下の管玉なら分析は可能で、小さい物は胡麻粒大で分析がで

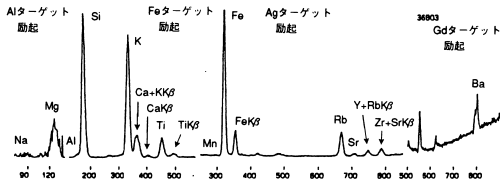


図10 管玉1 (36803) の碧玉製管玉の蛍光X線スペクトル

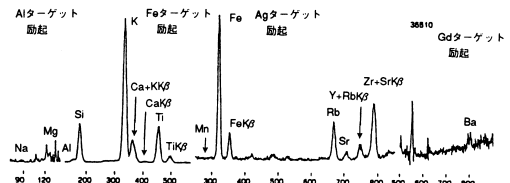


図17 管玉8 (36810) の碧玉製管玉の蛍光X線スペクトル

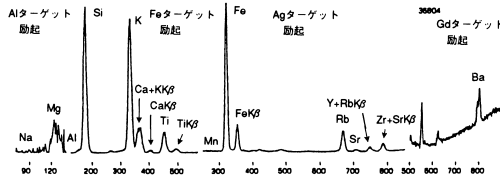


図11 管玉2 (36804) の碧玉製管玉の蛍光X線スペクトル

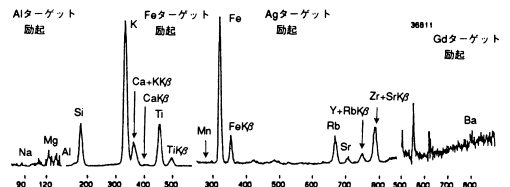


図18 管玉9 (36811) の碧玉製管玉の蛍光X線スペクトル

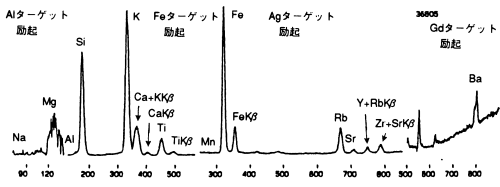


図12 管玉3 (36805) の碧玉製管玉の蛍光X線スペクトル

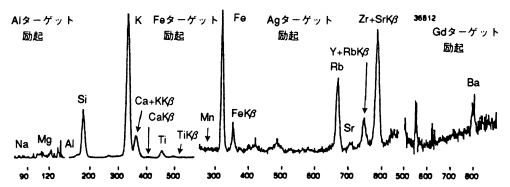


図19 管玉10 (36812) の碧玉製管玉の蛍光X線スペクトル

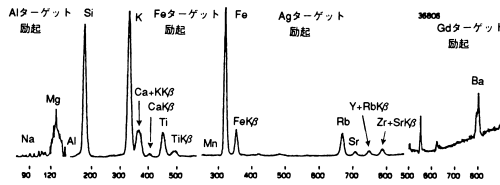


図13 管玉4 (36806) の碧玉製管玉の蛍光X線スペクトル

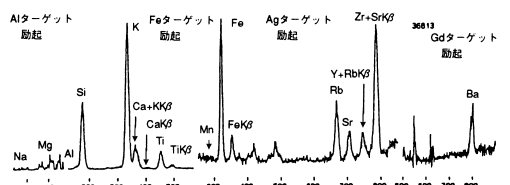


図20 管玉11 (36813) の碧玉製管玉の蛍光X線スペクトル

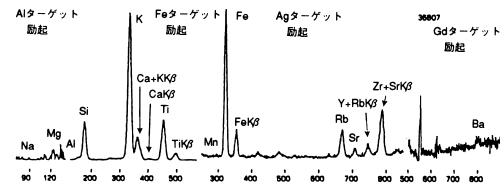


図14 管玉5 (36807) の碧玉製管玉の蛍光X線スペクトル

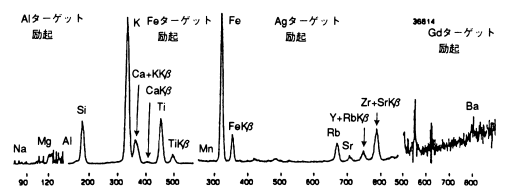


図21 管玉12 (36814) の碧玉製管玉の蛍光X線スペクトル

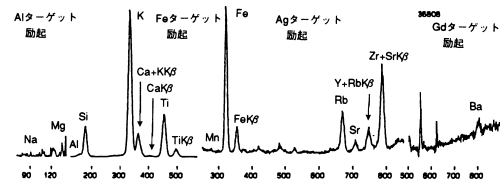


図15 管玉6 (36808) の碧玉製管玉の蛍光X線スペクトル

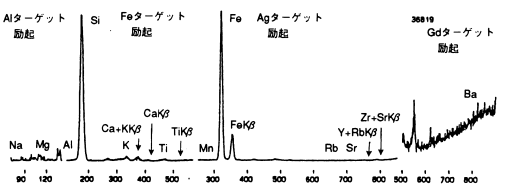


図22 管玉13 (36819) の鉄石英製管玉の蛍光X線スペクトル

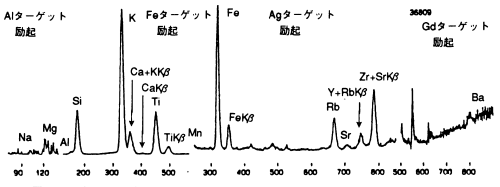


図16 管玉7 (36809) の碧玉製管玉の蛍光X線スペクトル

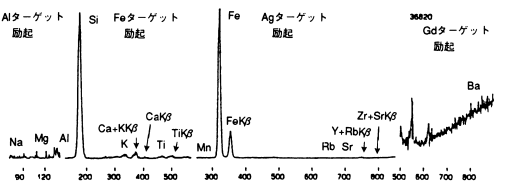


図23 管玉14 (36820) の鉄石英製管玉の蛍光X線スペクトル

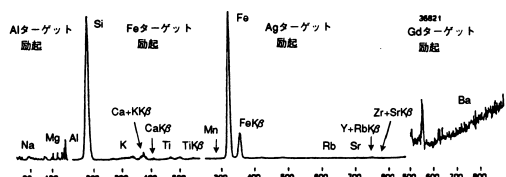


図24 管玉15 (36821) の鉄石英製管玉の蛍光X線スペクトル

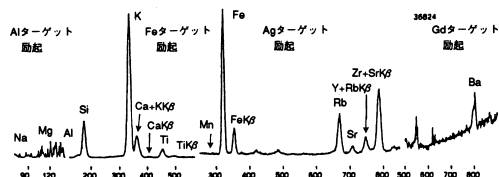


図29 管玉20 (36824) の碧玉製管玉の蛍光X線スペクトル

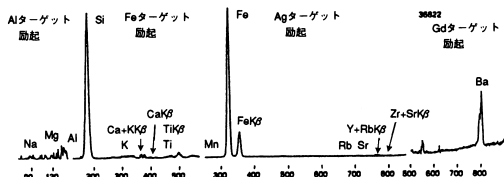


図25 管玉16 (36822) の鉄石英製管玉の蛍光X線スペクトル

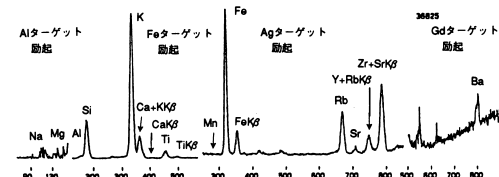


図30 管玉21 (36825) の碧玉製管玉の蛍光X線スペクトル

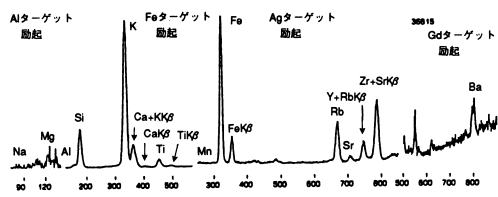


図26 管玉17 (36815) の碧玉製管玉の蛍光X線スペクトル

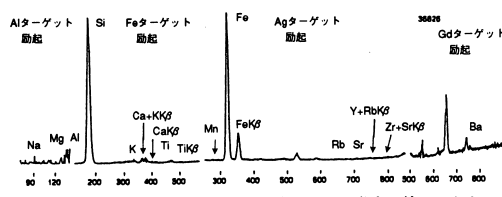


図31 管玉22 (36826) の鉄石英製管玉の蛍光X線スペクトル

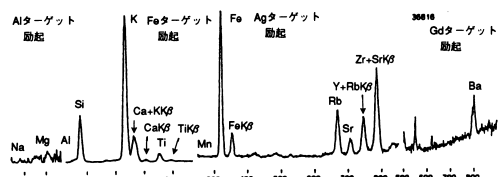


図27 管玉18 (36816) の碧玉製管玉の蛍光X線スペクトル

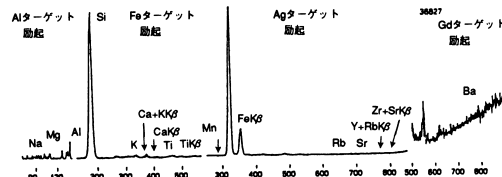


図32 管玉23 (36827) の鉄石英製管玉の蛍光X線スペクトル

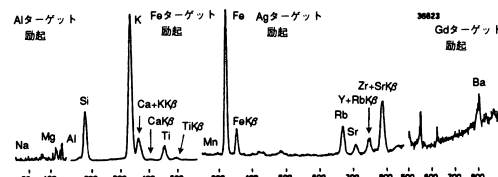


図28 管玉19 (36823) の碧玉製管玉の蛍光X線スペクトル

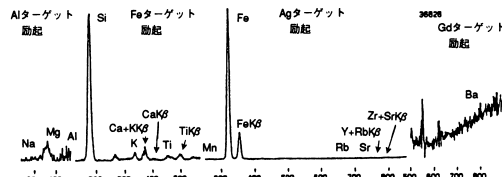


図33 管玉24 (36828) の鉄石英製管玉の蛍光X線スペクトル

きる場合がある。図35-(1)のESRのスペクトルは、幅広く磁場掃引したときに得られた信号スペクトルで、 g 値が4.3の小さな信号(I)は鉄イオンによる信号で、 g 値が2付近の幅の広い信号(II)と何本かの幅の狭いピーク群からなる信号(III)で構成されている。図35-(1)では、信号(II)より信号(III)の信号の高さが高く、図35-(2)・(3)の二俣・細入原石ではこの高さが逆になっているため、原石産地の判定の指標に利用できる。

今回分析した玉類の中で信号(II)が信号(III)より小さい場合は、二俣・細入産でないといえる。各原産地の原石の信号(III)の信号の形は産地ごとに異同があり産地分析の指標となる。図35-(1)に花仙山・猿八・玉谷・土岐を、図35-(2)に興部・石戸・八代谷-4・女代(B)遺物群・八代谷、および図35-(3)に富良野市空知川の空知(A)・(B)および北海道今金町花石の各原石の代表的な信号(III)

図34 碧玉原石のESRスペクトル
(花仙山・玉谷・鑿八・土岐)

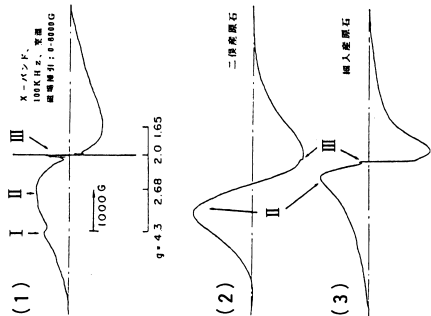


図35-(1) 碧玉原石の信号ⅢのESRスペクトル

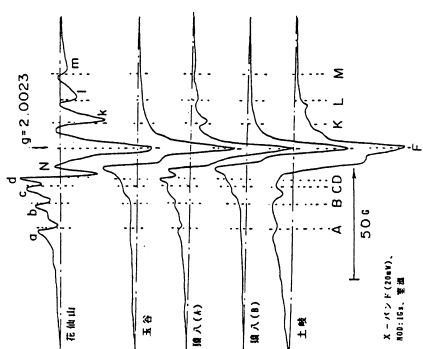


図35-(2) 碧玉原石の信号ⅢのESRスペクトル

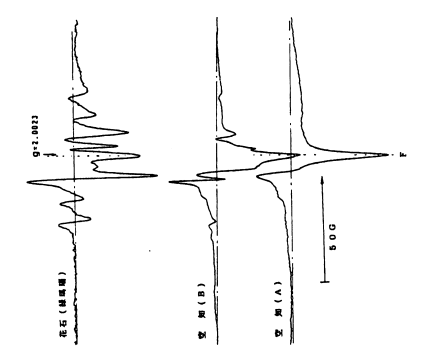


図36 大川遺跡出土管玉の信号ⅢのESRスペクトル

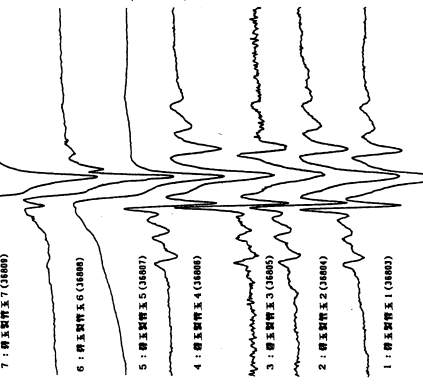


図37 大川遺跡出土管玉の信号ⅢのESRスペクトル

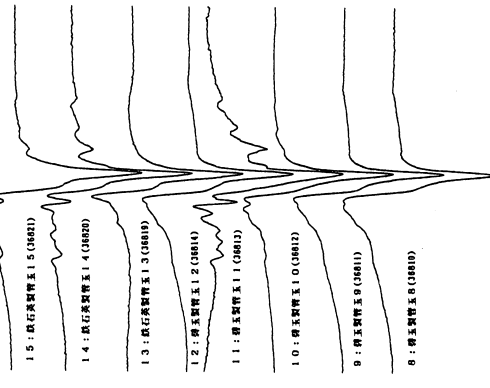


図38 大川遺跡出土管玉の信号ⅢのESRスペクトル

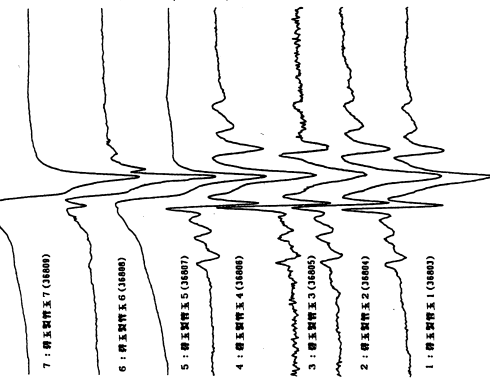


図39 大川遺跡出土管玉の信号ⅢのESRスペクトル



表7 大川遺跡出土の碧玉原石産地分析結果

遺物 番号	分析 番号	碧玉製玉類蛍光X線分析法による帰属確率					E S R 信号形	総合判定 原石産地
		興部群	玉谷群	花仙山群	猿八群	女代(B)群		
管玉 1	36803	2X10 ⁻⁵ %	1X10 ⁻¹³ %	61 %	1X10 ⁻¹⁵ %	<10 ⁻²⁵ %	花仙山形	花仙山産原石
〃 2	36804	3X10 ⁻⁴ %	1X10 ⁻⁸ %	90 %	1X10 ⁻¹² %	<10 ⁻²⁵ %	〃	〃
〃 3	36805	1X10 ⁻⁷ %	1X10 ⁻¹³ %	34 %	1X10 ⁻¹⁵ %	<10 ⁻²⁵ %	〃	〃
〃 4	36806	1X10 ⁻³ %	1X10 ⁻¹³ %	89 %	1X10 ⁻¹⁷ %	<10 ⁻²⁵ %	〃	〃
〃 5	36807	<10 ⁻²⁵ %	1X10 ⁻¹⁴ %	<10 ⁻²⁵ %	1X10 ⁻¹⁸ %	1X10 ⁻¹³ %	猿八形類似	
〃 6	36808	<10 ⁻²⁵ %	1X10 ⁻²¹ %	<10 ⁻²⁵ %	1X10 ⁻²⁰ %	1X10 ⁻²¹ %	不明	
〃 7	36809	<10 ⁻²⁵ %	1X10 ⁻¹⁶ %	<10 ⁻²⁵ %	1X10 ⁻¹⁸ %	1X10 ⁻¹³ %	猿八形類似	
〃 8	36810	<10 ⁻²⁵ %	1X10 ⁻¹⁷ %	<10 ⁻²⁵ %	1X10 ⁻¹⁷ %	1X10 ⁻¹² %	〃	
〃 9	36811	1X10 ⁻²⁴ %	1X10 ⁻¹⁰ %	<10 ⁻²⁵ %	1X10 ⁻¹⁸ %	1X10 ⁻¹¹ %	〃	
〃 10	36812	<10 ⁻²⁵ %	<10 ⁻²⁵ %	<10 ⁻²⁵ %	22 %	1X10 ⁻¹⁵ %	猿八(A)形	猿八産原石
〃 11	36813	<10 ⁻²⁵ %	1X10 ⁻²⁴ %	<10 ⁻²⁵ %	0.12 %	1X10 ⁻⁴ %	不明	
〃 12	36814	1X10 ⁻²¹ %	1X10 ⁻⁷ %	1X10 ⁻²³ %	1X10 ⁻¹⁸ %	1X10 ⁻⁹ %	猿八形類似	
〃 13	36819	0.4 %	<10 ⁻²⁵ %	<10 ⁻²⁵ %	<10 ⁻²⁵ %	<10 ⁻²⁵ %	玉谷形	
〃 14	36820	<10 ⁻²⁵ %	<10 ⁻²⁵ %	<10 ⁻²⁵ %	<10 ⁻²⁵ %	<10 ⁻²⁵ %	不明形	
〃 15	36821	<10 ⁻²⁵ %	<10 ⁻²⁵ %	<10 ⁻²⁵ %	<10 ⁻²⁵ %	<10 ⁻²⁵ %	猿八(A)形	
〃 16	36822	1X10 ⁻³ %	<10 ⁻²⁵ %	<10 ⁻²⁵ %	<10 ⁻²⁵ %	<10 ⁻²⁵ %	〃	
〃 17	36815	1X10 ⁻²³ %	1X10 ⁻¹⁵ %	1X10 ⁻²¹ %	95 %	0.01 %	猿八(A)形	猿八産原石
〃 18	36816	<10 ⁻²⁵ %	1X10 ⁻¹⁸ %	<10 ⁻²⁵ %	38 %	1X10 ⁻⁶ %	〃	〃
〃 19	36823	1X10 ⁻²⁵ %	1X10 ⁻¹¹ %	<10 ⁻²⁵ %	0.64 %	53 %	女代(B)形	女代南(B)遺物群
〃 20	36824	1X10 ⁻²³ %	1X10 ⁻¹⁵ %	1X10 ⁻²² %	50 %	0.15 %	猿八(A)形	猿八産原石
〃 21	36825	1X10 ⁻²⁵ %	1X10 ⁻¹⁸ %	<10 ⁻²⁵ %	98 %	0.03 %	〃	〃
〃 22	36826	<10 ⁻²⁵ %	<10 ⁻²⁵ %	<10 ⁻²⁵ %	<10 ⁻²⁵ %	<10 ⁻²⁵ %	不明	
〃 23	36827	1X10 ⁻⁵ %	<10 ⁻²⁵ %	<10 ⁻²⁵ %	<10 ⁻²⁵ %	<10 ⁻²⁵ %	石戸形	
〃 24	36828	1X10 ⁻⁹ %	<10 ⁻²⁵ %	<10 ⁻²⁵ %	<10 ⁻²⁵ %	<10 ⁻²⁵ %	不明	

のスペクトルを示す。今回分析した遺物のE S R信号(Ⅲ)の結果を図36~39に示す。これら遺物の中で花仙山形に一致する信号は管玉1~4で猿八形の類似する信号は管玉5・7・8・9・10・12・15・16・17・18・20・21で、女代(B)形に一致する信号を示す遺物は管玉19、玉谷形(八代谷形・空知(A)形)では14であった。E S R分析から見ると分析した遺物の原石産地がそれぞれ似た信号を示す原石の産地の可能性が大きいことを示唆しているが、さらに正確な原石産地を推測するために蛍光X線分析の結果と組み合わせ総合判定として、両方法でともに同じ原産地特定された場合のみ、その原産地の原石で作られた玉であると決定する(表7)。

結論

蛍光X線分析の結果で、花仙山群に高い確率で帰属された遺物は管玉1~4で、また、E S R分析においても花仙山形の信号を示していることから、これら7cとみられる碧玉製管玉には島根県花仙山産原石が使用されていると推測した。恵山式期の碧玉製管玉のうち、蛍光X線・E S Rの両分析での総合判定で佐渡猿八産碧玉と同定されたものは、管玉10・17・18・20・21であった。管玉19は総合判定で女代南(B)群に同定された。産地が特定できなかった碧玉製管玉5・6・7・8・9・11・12の蛍光X線分析結果は相互に似ていて、またE S R信号も一致し、

同じ産地の原石の可能性を示唆したのは管玉5・7・8・9・12の5個である。鉄石英製管玉については、蛍光X線分析で管玉13~16のTi/Kの比の値が管玉22~24に比較して小さい傾向にありこの両者はTi/Kの比で分類できるが、ESR信号は個々に異なっているように見えるため、これら全てが同じ産地からの原石とは言えない可能性がある。一部の考古学者の間で、色と管玉の様式で佐渡の管玉が伝播したと信じられている。しかし、佐渡の様式と同じ文化圏と考えるべきで、佐渡の管玉が伝播したと推測するには産地分析の結果によらなければならない。碧玉製の玉類については定量的に同定が可能になってきたが、鉄石英についてはまだ緒についたところで産地の議論ができる段階に達していない。今回分析した7cとみられる碧玉製管玉には島根県花仙山産原石が使用され西日本との交流が示された。恵山式期の碧玉製管玉では佐渡猿八産碧玉が使用され佐渡との交流が推測され、管玉19は女代南(B)群に同定されたことから、女代南(B)群の組成の管玉は畿内を中心とした西日本一帯で、弥生時代前・中期に広く使用された原石で、この石材が大川遺跡に伝播していたならば、本遺跡の古代人は西日本の文化などの情報を受けていた可能性を推測しても産地分析の結果と矛盾しない。また本遺跡で使用された碧玉製管玉の原石は複数の産地または複数の玉造遺跡から得た可能性が考えられ、広い地域との交流が推測される。

参考文献

- 1) 茅原一也(1964) 長者が原遺跡産のヒスイ(翡翠)について(概報) 長者ヶ原新潟県糸魚川市教育委員会 63-73
- 2) 藁科哲男・東村武信(1987) ヒスイの産地分析 富山市考古資料館紀要 61-18
- 3) 藁科哲男・東村武信(1990) 奈良県内遺跡出土のヒスイ製玉類の産地分析 檀原考古学研究所紀要『考古学論攷』14 95-109
- 4) Tetsuo Warashima(1992) Allocation of Jasper Archaeological Implements by Means of ESR and XRF. Journal of Archaeological Science 19 357-373
- 5) 藁科哲男・東村武信(1983) 石器原材料の産地分析 考古学と自然科学 16 59-89
- 6) 番場猛夫(1967) 北海道日高産軟玉ヒスイ 調査研究報告会講演要旨録 NO.18 11-15
- 7) 河野義礼(1939) 本邦における翡翠の新産出及び其化学的性質 岩石礦物鉱床学雑誌 22 195-201
- 8) 東村武信(1976) 産地推定における統計的手法 考古学と自然科学 9 77-90

b 大川遺跡出土の首飾り(Okawa1990,GP-102)の材質について

小笠原正明（北海道教育大学函館校）

1 はじめに

遺跡出土の首飾りには、ふつうはヒスイや頁岩などの石、時代が下るとガラスや金属などが原材料として使われている。しかし、本試料は目のあらい黒褐色の粒子からできていて、一見練りもののように見える。この外見から、原材料としては天然アスファルトか石炭が考えられる。そこでまず元素分析によって有機物であるかどうかを確かめ、ついで有機溶媒によってその成分を分けた。得られた結果を北海道南茅部町と秋田県昭和町で出土した天然アスファルトの結果と比較して検討した。

2 元素分析

飾り玉の破片の一部を採取して、北海道大学機器分析センターに依頼して炭素（C）・水素（H）・窒素（N）・イオウ（S）の4元素について元素分析を行った。得られた結果を南茅部町出土と昭和町出土の天然アスファルトの結果とともに表8に示した。CとHで全体の約68パーセントを占めていることから、この飾り玉は岩石や土などの無機物ではなく主として有機物からできていることが明らかとなった。

3 有機溶媒への溶解

試料0.681gを採取してベンゼン-メタノール（1：1）混合溶媒で抽出したところ、約90パーセントが不溶分として残った。溶液をろ過してエバポレーターで蒸発乾固したあとn-ヘキサンによる抽出を試みたがほとんど溶解しなかった。そこで、n-ヘキサンのかわりにクロロフォルムを

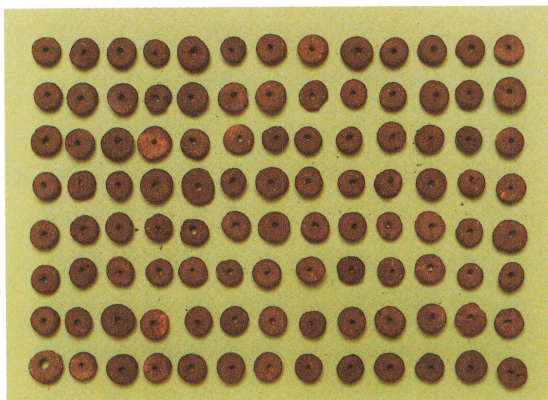


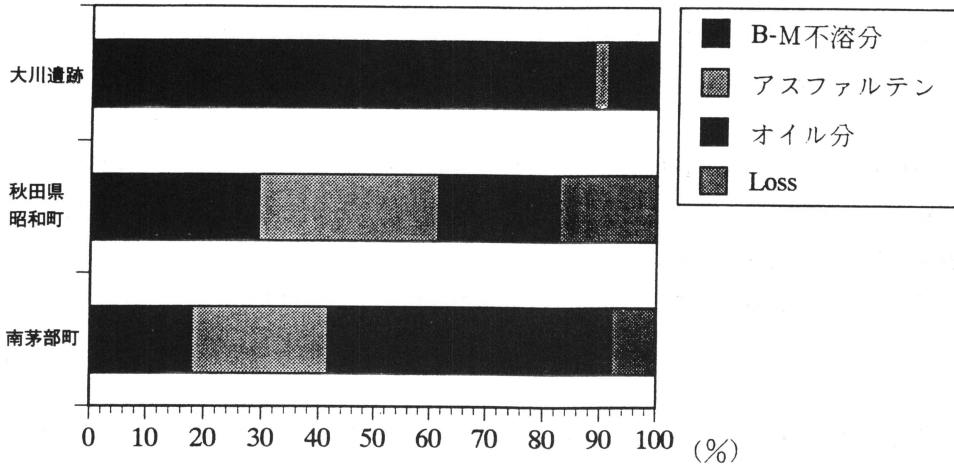
写真15 大川遺跡GP-102出土の玉（7c）

表8 出土試料の元素組成（重量%）

元素	本試料	南茅部出土	昭和出土
C	61.3	81.7	73.6
H	6.5	9.2	7.6
N	0.9	1.0	1.5
S	0.2	0.8	0.8
残り	31.1	7.3	16.5

図40 溶媒による出土試料の分割

大川遺跡の本試料でアスファルテン、オイル分とあるのはB-M可溶分中でそれぞれクロロフォルムに溶ける部分と溶けない部分を示している。他の試料ではそれぞれn-ヘキサンに溶ける部分と溶けない部分を示している。



用いたところ、試料全体の約9パーセントが溶解した。

アスファルトや石炭液化油などの重質油の場合、ベンゼン-メタノール（B-M）混合溶媒に溶ける成分のうちn-ヘキサンに溶けない部分は高分子化合物の混合物で、一括してアスファルテンと呼ばれている。また、n-ヘキサンに溶ける部分は低分子化合物の混合物でオイル分と呼ばれている（文献1参照）。従って、以上のような操作によって試料を①B-M不溶分、②アスファルテン、③オイル分の3成分に分割できる。図40にこのようにして分割した結果を南茅部町と昭和町出土の天然アスファルトの結果とともに示した。なお、大川遺跡の試料で、アスファルテン、オイル成分と表現しているものは、B-M可溶分のうちクロロフォルムに溶ける部分と溶けない部分を示している。クロロフォルムに溶けるか溶けないかは高分子の架橋（主鎖のあいだの橋かけ構造の形成）の程度によってきまるもので、正確にはアスファルテンとオイル分を区別したものではない。図40の結果は、本試料のB-M混合溶媒に溶ける部分は、平均的な分子構造において橋かけの程度が著しく低いことを示している。

4 考察

元素分析の結果で目につくのはC・H・N・S以外の元素の割合が高いことで、全体の30パーセント以上もある。本試料の主成分は有機物であるが、それ以外に土などの無機物が多く含まれていることを示している。炭素原子数に対する水素原子数の比H/Cは1.26で、昭和町出土試料の1.24、南茅部町出土試料の1.34に近い。H/Cは重質油の芳香族性を示すものでこの値が高い

ほどパラフィン化合物の割合が高い。1つの基準としてこの値が1以上であれば石油系、1以下であれば石炭系といわれている。(文献2・3参照)。

しかし、図40の溶媒抽出による成分分析の結果は、本試料が南茅部町出土や昭和町出土の天然アスファルトとはまったく別の材料から出来ていることを示している。この試料にはアスファルテンやオイル分はごくわずかしこ含まれておらず、大部分はB-M不溶分である。原油が蒸発乾固してできた天然アスファルトが、ベンゼンなどの強い有機溶媒で溶解しないということはある得ない。

以上の分析結果から、本試料は草炭あるいは泥炭からできていると推定される。草炭は植物遺体がバクテリアによって生化学的に分解され、水・炭酸ガス・メタンガスなどが遊離して次第に炭素分が濃縮されてできたものである。石炭の一種ではあるが、いわゆる石炭とはことなり軟弱な泥状の物質として得られる。この首飾りは、草炭または泥炭を成形加工して作られたものであろう。

謝辞 本報告を作成する際にご意見をいただいた北海道大学工学部の横山晋先生に感謝します。また、分析実験に協力していただいた北海道教育大学の前川靖明さんと川原祐二郎さんに感謝します。

参考文献

- 1 小笠原正明・阿部千春・前川靖明・横山晋「豊崎N遺跡出土の天然アスファルト塊」考古学ジャーナル 373号 25頁 (1994)
- 2 小口勝也・若林孟茂・中山悦郎「各種原油の常圧残油および減圧残油の性状」石油学会誌 24巻 4号 260頁 (1981)
- 3 C.E.Snape,K.D.Bartle「Definition of fossil fuel-derived asphaltenes in terms of average structural properties」,Fuel,63巻, 883(1984)

C 恵山式期墓壙からの糸状出土物の鑑別結果報告

菊地美知子・小原奈津子（昭和女子大学）

1 試料

北海道余市町大川遺跡第847号墓（GP-847）において、前回（1992年度）の発掘で出土したものと同様に、玉に通されていた数本の紐もしくは糸状の物の一部。本鑑別には、長さ約4mm，太さ約300 μ mの糸状試料を用いた。

2 方法

本試料の形態観察にはCUP-M3型カラービデオプリンター（ソニー製）を接続させたVH-6110型ハイパーマイクロスコープ（キーエンス製）およびJSMT-300型走査型電子顕微鏡（JEOL製）を用いた。電子顕微鏡観察の前処理としてJFC-1100型イオンスパッタリング装置（JEOL製）で試料表面を金蒸着した。

3 結果

本試料をマイクロスコープで観察したところ、写真18に見られるように、枝分かれした植物の形態が観察された。なお、写真では、おそらく発掘後に付着したと考えられる「かび」も糸表面に認められた。また、写真19aは、試料の表面、写真19bは断面形態であるが、断面に空隙があることなどから、おそらく草の茎など、植物を糸として用いたものと考えられる。前回出土した糸（GP-367）¹⁾の顕微鏡写真と比較すると、両者の表面および断面形態が非常に類似していることから、糸として使用されたこれらの材料は同一種の植物である可能性が高いものと推測される。

引用文献

- 1) 菊地美知子・小原奈津子 1993 【1992年度大川遺跡発掘調査概報】26-27頁



写真16 GP-847 コハク玉出土状況



写真17 GP-367糸出土状況

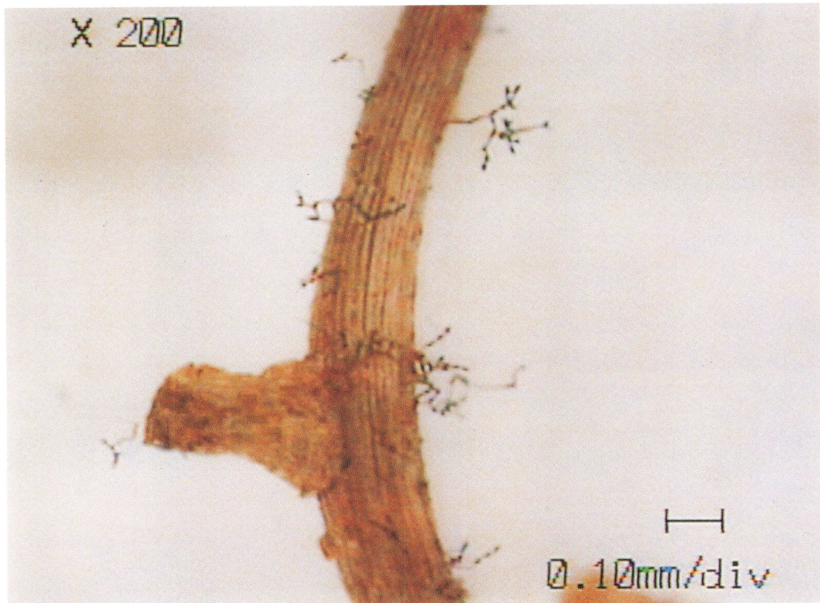


写真 18 マイクロスコープによる観察 (×200)

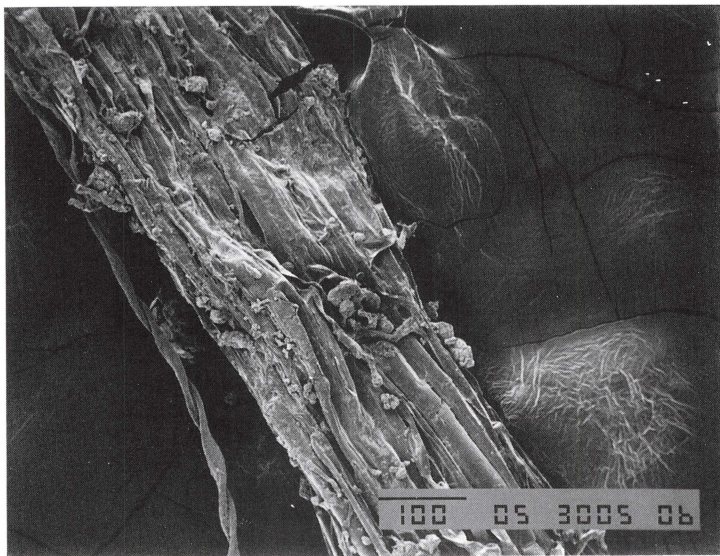


写真 19 a 電子顕微鏡による糸の表面形態 (×150)

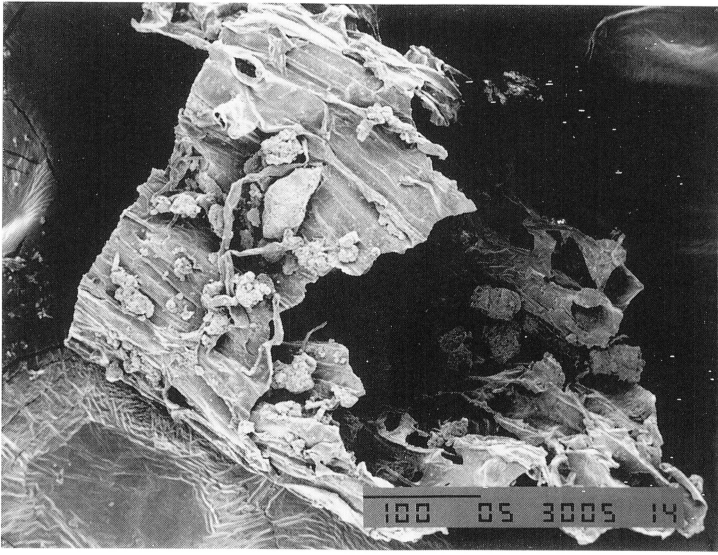


写真 19 a 電子顕微鏡による糸の表面形態 (× 200)

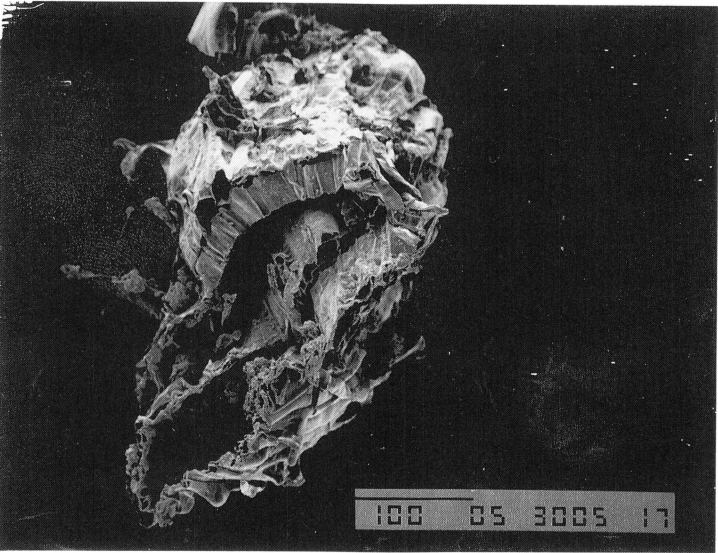


写真 19 b 電子顕微鏡による糸の断面形態 (× 200)

d 大川遺跡出土洪武通寶の蛍光X線分析法ならびに誘導結合プラズマ発光分光分析法による分析

咲山まどか・赤沼英男（岩手県立博物館）

大川遺跡から出土した洪武通寶について蛍光X線分析（XFA法）ならびに誘導結合プラズマ発光分光分析法（ICP-AES法）により分析を行った。以下にその結果を報告する。

1 分析試料

分析した試料は洪武通寶1点である。全体的に青みがかった錆で覆われてはいるものの完形品である。試料の形状・外観（拓本・写真）を図41・写真21に示す。

2 分析試料の調整ならびに分析方法

試料表面に付着している錆層をダイヤモンドカッターを装着したハンドドリルを用いて除去し金属面を露出させた。次にダイヤモンドペーストを使って上述の金属面を平滑にし、アルコールで超音波洗浄後、十分に乾燥した。このようにして得られた平滑な金属面をXFA法により分析し、含有される主成分元素を決定した。

XFA法による分析が終了した後、露出している金属表面から微量のメタル片を削り取り、秤量後、硝酸で溶解し、塩酸を加え1モル溶液となるように希釈して試料溶液を作成した。得られた溶液はICP-AES法により定量分析を行った。なお、採取できた試料量の関係から分析は、銅（Cu）・鉛（Pb）・錫（Sn）のみ実施した。

XFA法ならびにICP-AES法の測定条件は以下のとおりである。

(1) XFA法（定性分析）

対陰極 : Cr

印加電圧・電流 : 50kV-50mA

分光結晶 : LiF

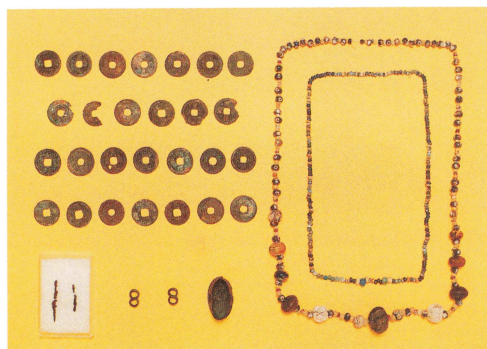
(2) ICP-AES法（定量分析） 出力：1.1kW,

アルゴンガス流量 プラズマガス：15l/min, 補助ガス：1.0l/min, ネブライザー：0.4l/min

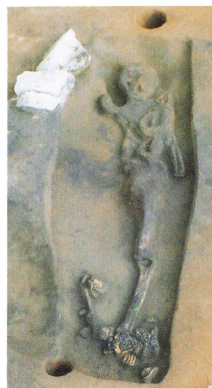
表9 洪武通寶の化学組成

Cu	Pb	Sn	合計
75.5	18.8	4.3	98.6

※分析はICP-AES法による



3) 大川遺跡G P-608出土一括遺物（渡来銭は27枚）



▲大川遺跡G P-608伴出遺物
出土状況（渡来銭・サメの
歯・針・トンボ玉他出土）

◀大川遺跡G P-608遺構検出
状況（中世アイヌ墓）

写真20 大川遺跡G P-608

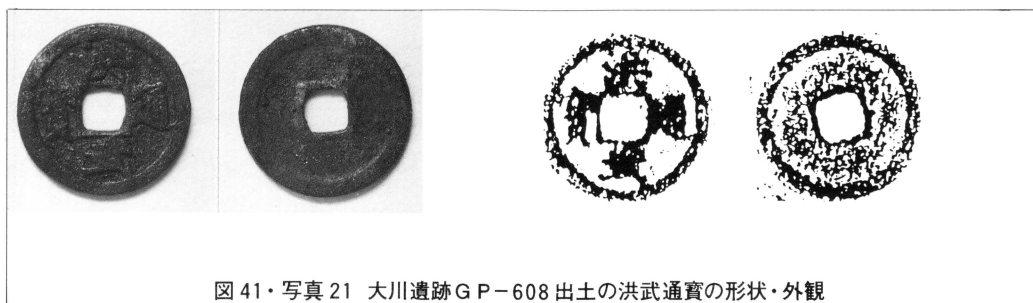


図 41・写真 21 大川遺跡 G P-608 出土の洪武通寶の形状・外観

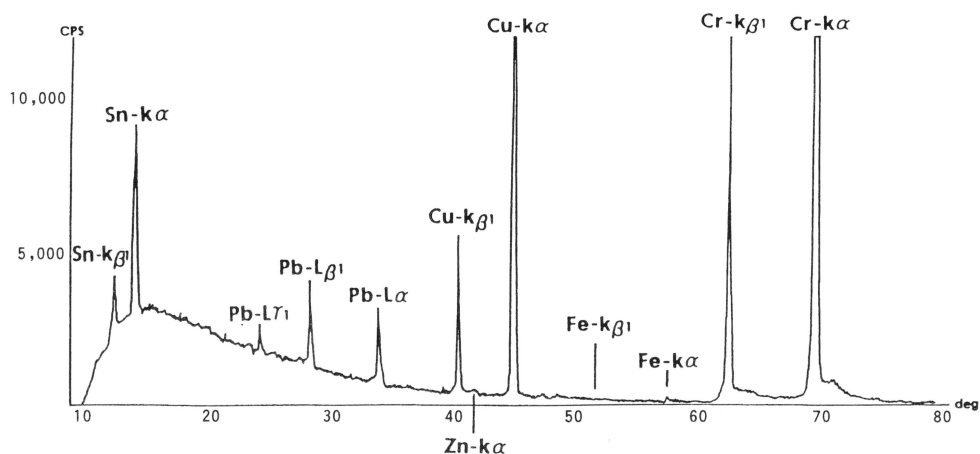


図 42 蛍光 X 線分析法による定性分析結果

3 分析結果ならびに考察

図42は X F A 法による定性分析結果である。Cu・Pb・Snを主成分とし、鉄 (Fe)・亜鉛 (Zn) も検出されている。後者の 2 元素の $K\alpha$ 線強度は、いずれも 100cps 程度であり、含有量レベルは低いものと推定される。表9は I C P - A E S 法による定量分析結果である。Cu分・Pb分・Sn分がそれぞれ 75.5%・18.8%・4.3% 含有されている。合計が 98.6% であることから、他に X F A 法で検出された Fe 等が微量に含有されていると判断される。

以上の分析によって、大川遺跡から出土した洪武通寶は Cu-Sn-Pb の三元系合金であることが判明した。この古銭が中国の正銭であるのか、もしくは私鑄銭であるのかは今後、形態・出土状況といった人文社会科学的根拠の明確な試料の自然科学的なデータの蓄積と、金属工学的側面からの考察を待って明らかにすることとしたい。

註

1) 内田哲男・平尾良光「I C P 分析法による銅製考古学的資料分析の基礎的研究」『保存科学29』1990 43~49

e 大川遺跡出土の石製品について

垣内光次郎（石川県立埋蔵文化財センター）

1989年から発掘調査が進められてきた大川遺跡出土の硯・砥石・石臼などの石製品は、中世末から近代にかけて消費された遺物群の一端を占めるものである。今回、私が分析する機会を与えられたこの三種類の石製品は、その製品構成や産地別の内訳から、東日本の近世遺跡で多く見受けられる様相に近似したものと判断される。さらに石製品の中でも、硯は遺跡に居住した住人の文房具、砥石は住人の生業に関わる道具、石臼は住人の飲食に関する家財道具として整理される考古学資料である。

1 硯（図43・写真22・23）

現在、近世遺跡から出土する和硯に関しては、石質と形状からその産地を把握する作業を進めている。その各硯産地の硯製造過程の調査では、法量に規定された硯の製品規格や、石質に連動した硯の品質と硯面の形状による品質が確認されている。大川遺跡出土の硯は、そのほとんどが近世後半以降の製品と判断されるが、それを産地別に整理すると、滋賀県の高嶋硯、山口県の赤間関硯、山梨県の雨畑硯など、列島の各地に所在する硯産地の製品に比定される。いずれの硯も各産地の硯職人が製造した硯である。

高嶋硯（1～3） 黒色系の和硯を代表する硯で、江戸時代に大きく発展した硯産地として知られている。滋賀県高嶋郡安曇川町あじがわの阿弥陀山周辺の村々がその産地である。かつては「江州高嶋硯」の呼名で、文人や歌人に愛用されていた。江戸遺跡をはじめとして、畿内以東の近世遺跡から数多く出土している硯である。大川遺跡からは、約20面の高嶋硯が出土している。

1は裏面中央の「本高嶋虎斑石」の刻名から、高嶋のとらふいし虎斑石を研磨したことが確定される硯である。虎斑石の名称は、青黒色の硯石に入る金色の石紋が、虎模様を連想させる事に由来すると言われている。そのため、この虎斑石は高嶋の最上の硯石とされ、高嶋硯の代名詞とされてきた。また、高嶋硯には五分刻みに整理された法量規格がある。1の硯は長さ15.2cm（五寸）、横幅7.6cm（二寸五分）であるから、五寸平の規格に該当する硯である。

2は裏を長方形に削るタイプの硯で、「高嶋玄」の刻名が見られる。高嶋には虎斑石に次ぐ硯石として、げんしょうせき玄生石と呼ばれる石材が阿弥陀山で採掘されていたが、刻名はこれに該当する可能性が高い。3は長さ13.6cm（四寸五分）、横幅7.5cm（二寸五分）で、四五平の規格にあたる硯である。現在でも四五平の規格の硯は、学童用の硯として最も普及している。また、この硯の石質は、安価な硯に使用される中石に近似している。

赤間関硯（4～6） 赤間関とは山口県下関市の旧称で、その下関を中心として生産が展開されてきた硯が赤間関硯である。下関は古くから九州および大陸との交通の接点である。そのため、この赤間関硯は列島の硯産地の中でも、生産の歴史が古いことで知られている。主に西日本を市場とし、しゅうんせき紫雲石を中心として五種類の硯石を使用している産地である。大川遺跡からは、約6

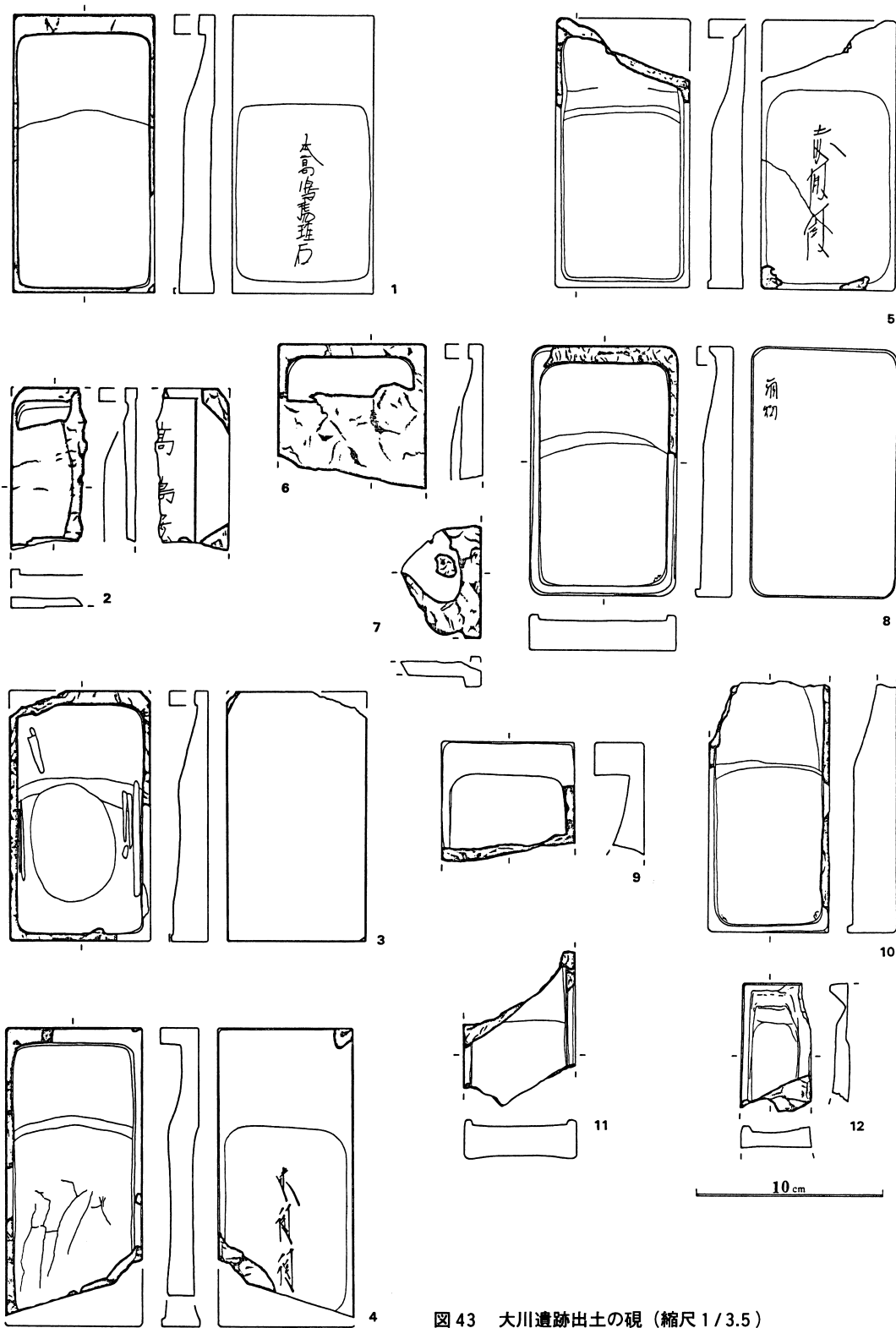


図 43 大川遺跡出土の硯 (縮尺 1/3.5)



写真22 大川遺跡出土の硯（表）



写真23 大川遺跡出土の硯（裏）

の赤間関硯が出土している。

4・5は裏面に「赤間関」が刻名された硯である。刻名は赤間関硯特有の右肩上がりの字体で、その刻みは片切彫りである。赤間関硯の場合、刻名は産地名だけが刻まれ、高嶋硯のように品質や石質の刻名は見受けられない。二点とも赤間関硯を代表する紫雲石とみられる。この紫雲石は赤色の酸化鉄を含んだ頁岩で、江戸時代の中期以降は山口県厚狭群楠町西万倉などで採掘された石材が使用されている。法量からして4は五五平（長さ五寸五分・横幅二寸五分）、5は五寸平（長さ五寸・横幅二寸五分）規格の硯である。

雨畑硯（8） 雨畑硯の名称は、山梨県南巨摩郡早川町^{あまばた}雨畑地区から生産が展開されたことによる名称である。雨畑は富士川沿いにある霊山の身延山の西方に位置する山村である。また雨畑硯は、現在でも学童硯の産地として稼働しているが、その生産は同郡^{げんしょうせき}鯉沢町鬼島を中心に甲府市まで広がり、主に宮城県産の玄昌石を加工し、雨畑硯として販売している。大川遺跡からは6面の雨畑硯が出土している。8は長さ13.7cm（四寸五分）、横幅7.8cm（二寸五分）を計り、四五平の規格にあたる硯である。裏面の隅に「雨畑」の刻名がある。四隅が角丸に近い形態で、緑裏が角張って、硯面の仕上げは高嶋硯より簡素である。

その他の硯（7・9～12） 遺跡から出土する硯には、硯産地の職人が研削した硯と消費地の住人が硯石に近い石材を加工した硯に大別される。7・9～11は前者、12は後者に属する硯である。7は裏面に台を削り出した硯で、戦国時代頃の鳴滝硯とみられる。9・10の硯は中砥石で知られる天草砥を加工した製品である。天草は西日本を代表する中砥石で、熊本県天草郡大矢野町江樋戸の明治山で採掘されている。この天草砥を硯に加工したのは、その仕上がりからしても硯職人の手に拠ると考えられる。中砥石は硯の研磨に使用され、高嶋硯でも各地から中砥石を購入していた。11はいわゆる人造硯である。外面は黒色塗料で仕上げられているが、内部は凝灰岩質の人造砥石と同質である。12は硯面の削りが荒く、加工痕をとどめた硯である。石材は京都の鳴滝産の仕上げ砥石であることから、遺跡住人が手持ちの砥石を硯に加工したものであろう。

2 砥石（図44・写真24）

砥石は刃物の生産と使用のための必需品である。素材は石材であるが、刀や鎌、鑿や包丁などの刃物文化を支えてきた道具である。道内には砥石の産出地は知られていない。そのため大川遺跡出土の砥石は、列島の各地にある砥石山で採掘された砥石である可能性が高い。石質から荒砥石・中砥石・仕上げ砥石の三者に基本分類されるが、同時に色合と質感から産出地の同定もほぼ可能と考えられる。いずれも遺跡で生活した住人の使用で、変形と欠損を受けている。

荒砥石（1～3） 刃物の形を整える荒研ぎ用の砥石で、主に砂岩が利用されてきた。その代表が大村砥と呼称される荒砥石で、現在でも天然の荒砥石の代名詞とされている。現在の産地は和歌山県田辺市周辺であるが、大川遺跡の荒砥石は、かつての産地である長崎県大村市松島町地内の採掘品とみられる。大村砥は石英砂粒が均一な淡黄色の砂岩で、その石質から荒

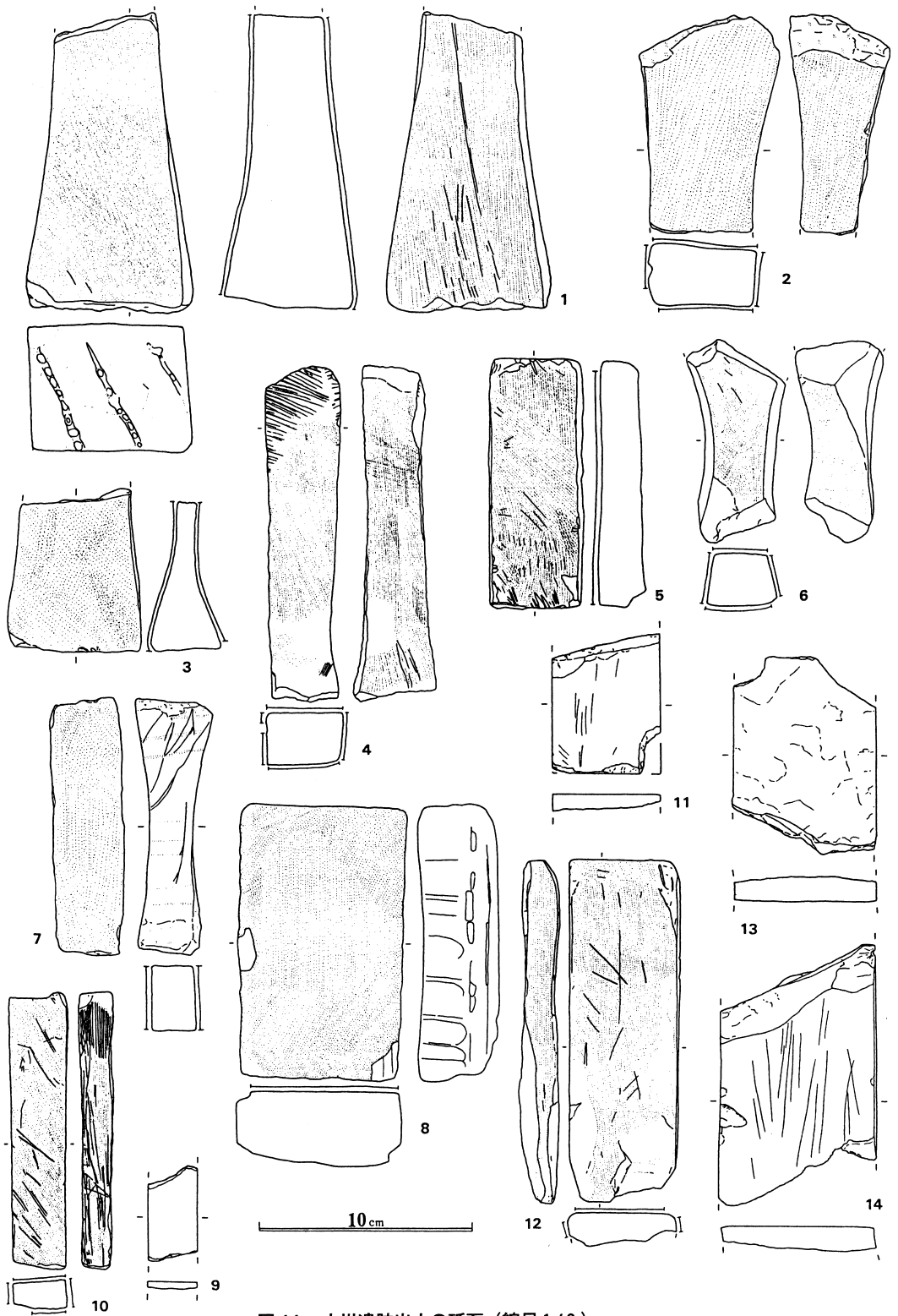


図 44 大川遺跡出土の砥石 (縮尺 1/3)

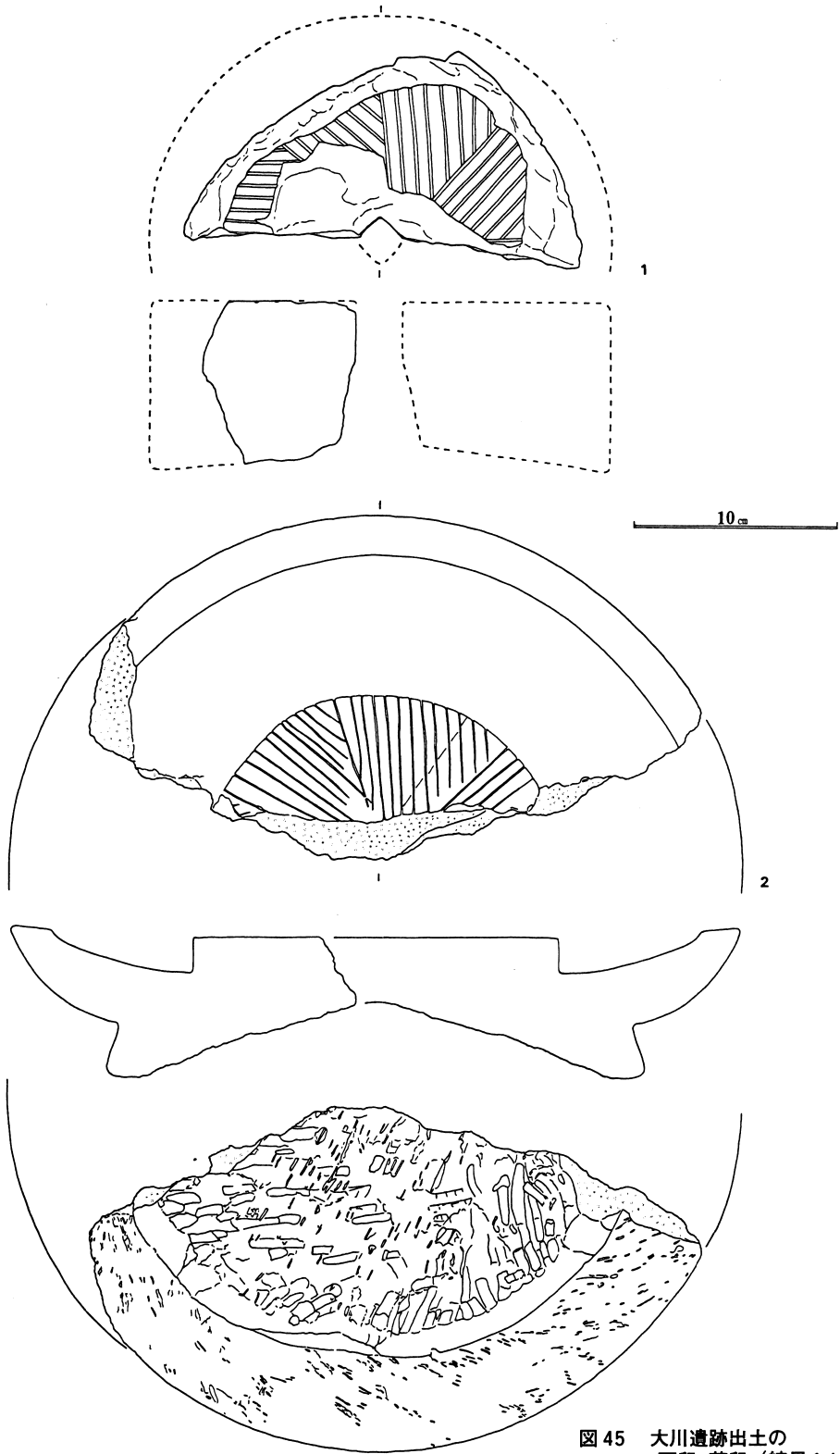


図 45 大川遺跡出土の
石臼・茶臼 (縮尺 1/3.5)



写真24 大川遺跡出土の砥石



写真25 大川遺跡出土の石臼

砥と大荒砥にわけられていた。1・2は荒砥で小口に整形痕が残る。出土品から本来の法量は、長さ七寸、幅三寸五分であったと推定される。3は大荒砥で、色合は灰白色に近く粗粒感が強い。これは大村砥の中でも、坑口から笹口と別称される大荒の砥石である。

中砥石（4～8） 農具の鎌から漁具の銚までと、多様な刃物に利用される砥石である。そのため大川遺跡をはじめとする消費遺跡では、中砥石の出土量が多い。石材は凝灰岩質の岩石が一般的で、列島の各地に位置する砥石山で採掘されていた。4・5は灰白色に赤褐色の弱い石紋が入る凝灰岩で、群馬県沼田市周辺で採掘された上野砥とみうけられる。仕上げ砥石としても使用されることがある砥石である。6は被熱により赤褐色が強い色調に変化しているが、その質感から熊本県産の天草砥の可能性が高い。7・8は薄い青緑灰色で、黒いシミ状の斑点が入る凝灰岩である。8は側面の整形痕から幅二寸五分の砥石である。さらに大川遺跡には、白色凝灰岩質の川原石を転用した砥石がある。その様子からして、余市川流域で採取された石材が、中砥石の代用として利用された遺物であろう。

仕上げ砥石（9～14） 刀や鉋や剃刀などの刃部の調整に利用される砥石で、側面に切断時の鋸目を残している。産地としては京都市右京区梅ヶ畑付近から採掘されてきた鳴滝^{なるたき}砥がその中心である。砥石は黄色や灰緑色を呈する頁岩で、採掘地点から中山砥や奥殿砥などの細別名称でも識別されている。9・10は幅一寸未満で、数少ない中世の中山砥である。11は幅一寸八分、13は二寸二分、14は二寸五分の規格品である。この中で幅二寸五分の出土が多い。この大川遺跡で見られる横幅の拡大は、中世末まで長さ六寸幅一寸の規格であった仕上げ砥石が、近世の期間に生じた法量の拡大を示す遺物と考えている。

3 石臼（図45・写真25）

石臼は主に屋内で使用される製粉の道具で、家財の一つにも数えられる石製品である。大川遺跡の石臼の種類と点数は、粉挽臼5点、茶臼4点、鉢形の石臼1点である。粉挽臼と茶臼とも、その上下関係から各二柄^{から}の個体が想定される。

1は粉挽臼の下臼で、石材は安山岩である。臼目は八分画で、摩耗度合いは弱く使用の痕跡は少ない。さらに、この粉挽臼は、東北地方の出土品に近似していることから、これらの地方から搬入された製品と考えたい。2は茶臼の下臼で、石材は花崗岩質である。臼面は径17.9cm（約六寸）受皿径36.4cm（一尺二寸）に復元される。臼目は何度かの目立てにより、分画が崩れはじめている。石質からして西日本の産品であろう。

参考文献

- 益富寿之助 『原色岩石図鑑』 保育社 1987
名倉鳳山 『日本の硯』 日貿出版社 1986
垣内光次郎 「江戸高嶋硯の生産」 『江戸時代の生産遺跡』 江戸遺跡研究会 1994
堀尾昇平 「赤間関硯1，赤間関硯の歴史」 『山口短期大学研究紀要第5号』 1983

f 北方流通史と大川遺跡

吉岡康暢（国立歴史民俗博物館）

1 大川中世遺跡の概要

大川中世遺跡は、1989～92年度の調査によって、余市川南岸沿いに帯状に展開する遺跡の大部分が掘開され、94年度調査地は砂丘の下り斜面から低地にかかることから遺構の枠組みを変えるような展開はないとみこまれていた。調査結果は、基幹をなす大溝の南西限が検出されたのは予想通りであったが、大溝の南約45m遊離したN58区表土層の数十cmの範囲から12世紀末に遡る珠洲壺1個体分（下胴亡失）が出土したことは、後述のごとく北方流通史に一石を投ずる発見であった。残る中世遺跡の調査予定地は遺跡を二分する道路敷部分のみとなり、大溝に南接する地区に未調査地が存するものの、遺跡構造の概要を知ることができる。したがって、本項は92年度概報の要約を繰り返すことになるが、北方流通史における大川遺跡の位置を明確化するために最低限度の概括をしておきたい（図46）。

遺構は、余市川南岸より65～80mを隔て、北東～南西方向に蛇走する大溝MO-10（幅2～3m、深さ0.8m～2m、断面逆台形、一部V形）を基軸とし、現河口より150mほどから東西約200m、南北約55m、約11,000m²の帯状空間をなす。河口に近い東辺に2列の柵列と、東西を溝MO-1・2とMO-6で画された東半に3×4間（約50m²）の管理事務所とおぼしき掘立柱建物が復原でき、雨落溝より西には管理事務所に勤仕する近侍層の居住域とみられる小形掘立柱建物の柱穴群がみられる。これに西接した区画は、大溝と直交するMO-8と出入り口を開き断続して弧状に伸びるMO-12・3・4・9・7が300～350m²ほどの狭隘なゾーンを形成し、南辺を不連続な柵列で画する。ここの柱穴群にはC2群のように160cm間隔で、径22cmと30cmの太い柱根の遺存例が認められることから倉庫域の可能性をもつが、積極的な証拠はない。

ここから西は、MO-10と直交するMO-8・11・14・13によって23～43m×30～50m（1,400m²～2,200m²）ほどに画されたCⅡ区・DⅠ区・DⅡ区の略方形ゾーンが連結する。このうちCⅡ区・DⅠ区からMO-10の南側のE区へかけて7群ほどの柱穴グループが検出され、小規模な掘立柱建物が複数回建て替えられた様子がうかがえる。とくにMO-10を挟むDⅠ区とE区には、続縄文期の竪穴JH-4および14上層に、ニシン頭骨を主とし少量の近海魚（エイ類・ホッケ・ヒラメ等）、回遊魚（サケ・カサゴ）、川魚（ウグイ）と貝類が若干の骨角製漁撈具（離頭鉞先・中柄・箆・網針）と加工痕のある鹿角・海獣骨片が遺棄されており、付近の柱穴小群との対応関係が想定される。この小貝層には14世紀後半・末の瀬戸平埴、珠洲片口鉢が包含されており、湾岸域での小規模な漁撈に従事するアイヌ集団の存在を彷彿させる。

大溝を軸線とし、直交する複数の溝で区画する遺構は本州でも未確認であるが、臨海地の町場の港湾付帯施設として将来検出がみこまれることに加えて、勝山館・志海苔館を除けば道内では

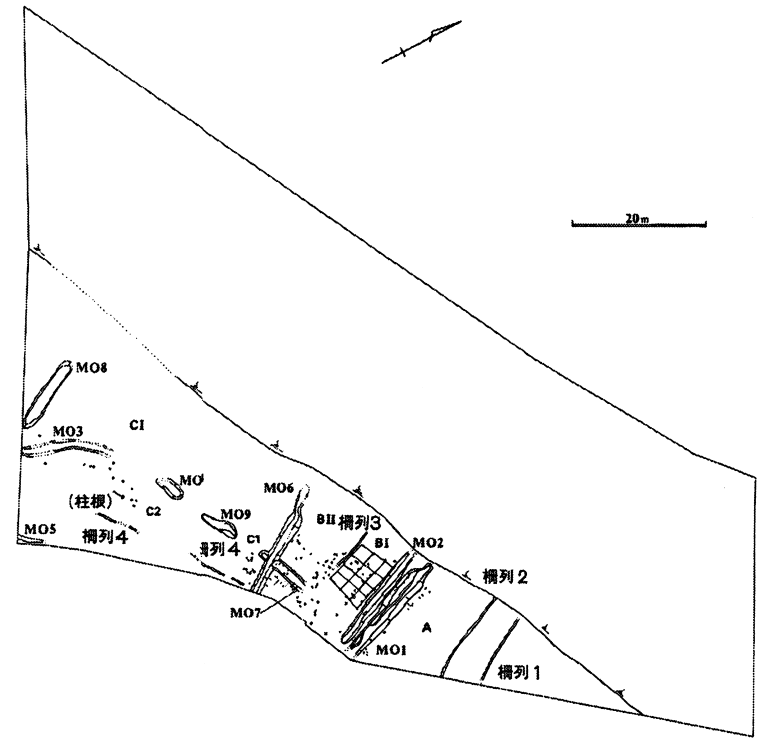
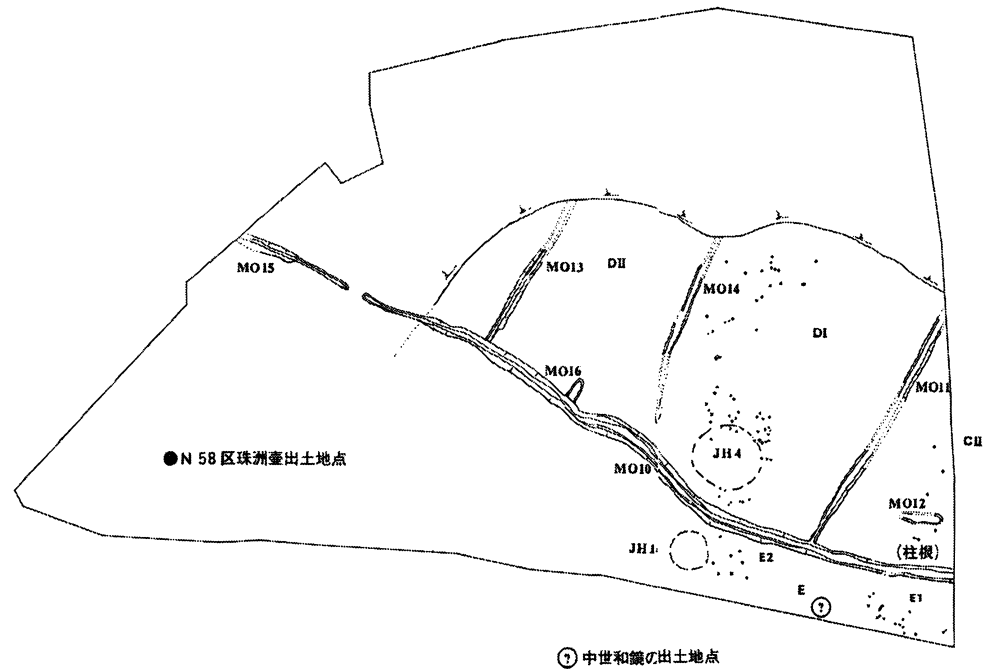


図 46 大川遺跡における中世遺構 (1989～1994)

表10 北海道中世陶磁器出土遺跡一覧

番号	遺跡名	所在地	発掘年代	陶磁器	文献
①	大森中	余市郡余市町大森中	14c.末~15c.末	[外] 青磁碗・皿(9)、[内] 瀬戸美濃天目碗(1)(完)	1
②	大川	" " 大川	12c.末、13c.末~15c.中	[外] 青磁碗・皿(48)、白磁碗・皿(8)、染付碗(1)、[内] 瀬戸平塚(3)、天目碗(6)、小皿(5)、御面(1)、平塚(7)、筒形(1)、三足碗(2)、小皿(2)、色(1)(器)、珠洲盤(1)、小皿(1)、片口鉢(8)	3
③	神里内蔵吉	古宇郡神里町内蔵吉	14c.中・後	[内] 珠洲盤(1)(完)、[外] 小皿(1)、片口鉢(1)	4・2
④	舟部	舟部郡舟部町舟部	14c.後~15c.前	[内] 珠洲片口鉢(4)	5・2
⑤	下若松	蘭越郡北檜山町下若松	14c.末~15c.中	[外] 青磁碗(1)(完)	2
⑥	利根川口	" " 利根町	13c.末~15c.前	[内] 珠洲片口鉢(4)	2
⑦	瀬田内	" " 瀬田町	14c.後~18c.中	[外] 染付皿(5)、[内] 瀬戸美濃・皿(2)、越前片口鉢(1)	6
⑧	元和寺	神楽川町元和寺	14c.末~15c.中	[外] 青磁碗(1)、[内] 珠洲片口鉢(1)	7
⑨	登	登町	14c.前	[外] 青磁碗(若干)	1
⑩	江差通	" " 江差町	14c.前・中	[内] 珠洲片口鉢(1)	8
⑪	佐賀	" " 上ノ国町藤山	14c.末~15c.前	[内] 珠洲片口鉢(2)	9
⑫	洞	" " 北村	14c.末~16c. (~17c.)	[外] 青磁碗(50)、皿(6)小皿(1)、白磁(18)、染付皿(1)、[内] 瀬戸美濃皿(2)、珠洲片口鉢(14)、瓦質・土質灰鉢・風炉(12)	9、吉岡寛定
⑬	北村	" " "	15c.中	[内] 珠洲片口鉢(1)(完)	10
⑭	勝山	" " "	15c.末~16c.末	[外] 青磁、白磁、染付、絵、浮彫碗・皿・小皿・茶碗、黄楊輪帯など(429片以上)、[内] 瀬戸美濃、勝津碗・皿・小皿・三足碗・鉢・天目碗・茶入・壺・土瓶、越前皿・片口鉢、信楽帯、瓦質片口鉢・火鉢・風炉、土師器皿など(723片以上)	11
⑮	武内塚	" " 上ノ国	12c.末	[内] 珠洲中皿(1)	2
⑯	上ノ国高瀬	" " "	14c.末~15c.中	[外] 青磁碗(1)、[内] 越前片口鉢(2)	12
⑰	比古	" " 字石崎	16c.	[外] 染付碗・皿、白磁皿(若干)、[内] 瀬戸美濃皿、越前片口鉢(若干)	9
⑱	福山	松前郡松前町	16c.	[外] 白磁皿(2)、染付碗(約10)、[内] 瀬戸美濃天目碗・皿(6)、越前片口鉢(約10)	13
⑲	大瀬	" " 大瀬	15c.末~16c.	[外] 青磁碗(1)、染付皿(1)、[内] 瀬戸美濃皿(若干)、越前片口鉢(1)	9
⑳	茂草田	" " 茂草	14c.末~15c.中	[外] 青磁碗(2)、[内] 越前皿(1)、片口鉢(1)	14
㉑	瀬内	渡島郡島崎町吉岡	14c.末~15c.前	[外] 青磁碗(2)、皿(1)、[内] 越前片口鉢(1)	15
㉒	湯元	" " 知内町湯元	15c.後	[内] 珠洲片口鉢(1)(完)	2
㉓	友別	上磯郡上磯町友別	14c.末~15c.中	[外] 青磁碗・皿(10)	2
㉔	矢本末	上磯郡上磯町矢本末	14c.末~16c.前	[外] 青磁碗・皿・壺・鉢・茶碗(約10)、白磁皿(18)、染付皿・茶(12)、[内] 瀬戸美濃天目碗(2)、越前皿・茶(1)、片口鉢(7)、瓦質土器(1)	長沼孝次
㉕	矢本末大満名	" " "	" "	[外] 青磁碗(1)、白磁皿(10)、染付皿(4)	16
㉖	久根洞	" " 東洞	" "	[内] 珠洲盤(9)(若干)	千代徹次
㉗	七重坂	南幌市	14c.前・中	[内] 越前皿(1)(完)	2
㉘	弥生町	" " 弥生町	15c.後半	[内] 越前片口鉢(1)(完)	2
㉙	志海若	" " 志海若	14c.中・後	[内] 珠洲盤(1)、越前皿(2)	17・2
㉚	志海若	" " "	14c.後~15c.後	[外] 青磁碗(20)、皿(5)、鉢(1)、白磁碗(1)、皿(12)、杯(1)、天目碗(1)、黄楊輪帯(1)、[内] 瀬戸美濃三足碗(6)、越前皿(1)、片口鉢(1)、珠洲盤(空)・片口鉢(6)、信楽壺(2以上)、瓦質火鉢(2)、土師器皿(7)	18
㉛	川井	亀田郡下町中島	14c.後	[内] 珠洲片口鉢(1)	19
㉜	森川	茅渚郡森町	14c.前~15c.中	[外] 青磁碗(1)、白磁碗(1)、[内] 越前片口鉢(8)	20・1・2
㉝	有珠町	伊達市有珠町	14c.末~15c.中	[外] 青磁碗(1)	21
㉞	新橋	室蘭市新橋	14c.末~15c.前	[内] 越前片口鉢(1)	22
㉟	支ノ目	千歳市	15c.中~16c.	[外] 青磁碗(2)、白磁皿(1)、[内] 瀬戸美濃皿(1)、珠洲片口鉢(1)(完)	23
㊱	末広	" " "	15c.末~15c.中、15c.	[外] 青磁碗(1)、染付皿(5)、[内] 瀬戸美濃皿(5)、珠洲片口鉢(1)	24
㊲	清川	苫小牧市清川	15c.末	[内] 瀬戸美濃皿(1)	25
㊳	ユオイ	苫小牧市ユオイ	15c.後	[外] 染付碗(1)	26
㊴	遠入地	新橋郡新橋町遠野	16c.前	[外] 白磁(1)	27

※1 「年代」は、おもむね報告書の記載によったが、一産業者の判断で補正した個体がある。また、「年代」欄は、消費電線から帰納された陶磁器の標準年代で、遺跡個々の存続年次そのものをささないばあいがある。
 ※2 16世紀末~17世紀初葉の染付・赤絵磁器、唐津陶器の標準年代代例は統計の余地があり、察定した遺跡もある。
 ※3 「数量」は個体数を原則とするが、統一されていない。
 ※4 成俣、長沼孝次のご教示により、森町弥生町遺跡より青磁碗(1)、碗皿(1)、伊達市南有珠町遺跡より五重皿(1)の出土を知った。また、⑭は検討を要するようである。

【参考文献】

- 松下 寛「北海道出土の中国陶磁」『北海道の研究』2 (1984年)
- 吉岡寛定「北海道の中世陶磁」『日本文化』6 (1979年)。(補正の上『日本海峽の土器・陶磁』[中世編] (1989年) 収録)
- 松下 寛「大川遺跡出土の陶磁器について」『1989年度大川遺跡発掘調査報告』余市町教育委員会 (1990年)
- 吉岡寛定「大川遺跡出土の中世陶磁器」『1990年度大川遺跡発掘調査報告』余市町教育委員会 (1991年)
- 吉岡寛定「大川中世遺跡の概況と史的意義」『1992年度大川遺跡発掘調査報告』余市町教育委員会 (1993年)
- 宇田川洋・河野本道「神里内蔵吉遺跡の調査」
- 下代 徹「渡島半島神里内蔵吉遺跡の調査」『河野本道博士没後二十年記念論文集』(1984年) ほか。
- 大嶋利夫・櫻原善一・金子有明「舟部遺跡」舟部町教育委員会 (1963年)
- 嶋山 隆・森 広樹ほか「瀬田内チャン遺跡発掘調査報告書」瀬田町教育委員会 (1980年)
- 大沼忠春・佐藤隆広・大沼あさ子「元和(紀)乙部町遺跡」(1977年)
- 宮下正司「江差町史」5 (論説1) 第2章第1節、江差町史編纂室 (1982年)
- 松崎水穂「北海道の城跡」『中世の城と考古学』(1991年)
- 白々幸雄・中村公彦・松崎水穂「北海道阿部郡知内町の中世遺物と調査」『考古学雑誌』67-2 (1981年)
- 松崎水穂・斎藤邦典ほか「史跡之上ノ国藤山遺跡」1~XV、上ノ国町教育委員会 (1980年~94年)
- 光永伸介・松崎水穂・石原 謙「上ノ国藤山遺跡」上ノ国町教育委員会 (1987年)
- 久保 泰・松谷 太ほか「史跡福山遺跡」II・IV・V・Ⅹ、松前町教育委員会 (1985・88・89・91・93年)
- 久保 泰「茂草田遺跡調査報告書」松前町教育委員会 (1979年)
- 千代 徹ほか「福山遺跡」福島町教育委員会 (1972年)
- 柳 宏明・前田正基ほか「矢本末天満宮跡」北海道埋蔵文化財センター (1989年)
- 宮崎昌一・森田知忠・森田洋子「南幌市古蹟」市立南幌博物館 (1973年)
- 印原良徳・鈴木正徳「室蘭市古蹟」室蘭市教育委員会 (1966年)
- 千代徹「中世の丹波川遺跡調査報告」『北海道考古学』5 (1969年)
- 北海道開拓記念館「旭野宮瓦葺資料目録」II (1980年)
- 竹田朝雄・福田法夫ほか「有珠オヤコ遺跡・ボンマ遺跡」伊達市教育委員会 (1983年)
- 大嶋利夫・野口 剛「室蘭松前遺跡発掘調査報告書(第1・2次)」(1971年)
- 越前部一郎・佐 宗男・佐川隆一・佐藤和雄・田口 尚 鈴木 信法ほか「美尻川流域の遺跡群」V・Ⅹ・ⅩⅢ、北海道埋蔵文化財センター (1991・86・88・90・92年)
- 大谷敏三・田村俊之ほか「末広遺跡における考古学的調査(上・下)」千歳市教育委員会 (1981・82年)
- 佐藤一夫・山藤 徹ほか「清川22遺跡」苫小牧東部工業地帯埋蔵文化財発掘調査報告書
- 苫小牧市教育委員会 (1984年)
- 竹田朝雄・田中哲郎ほか「ユオイチャン遺跡・ボロモイチャン遺跡・三島谷遺跡」北海道埋蔵文化財センター (1987年)
- 嶋山友之ほか「遠入地2チャン遺跡発掘調査報告書」北海道教育委員会 (1975年)

例をみない約100個体の中国陶磁・国産陶器がB・C I区を中心に出土していることから、本遺跡が少数の和人集団が河口部に村落を営んでいた余市アイヌ集団の一部をとりこみ、利尻のコンブに代表される樺太方面と道西部および石狩のサケ・マス交易ルートの結節を扼する交易基地として設営されたことは確かである。そして、施設の造営ならびに維持にあたり、アイヌ集団が鉄器・漆器・衣服や米・酒などの支給と引き替えに労働力を提供し、複数世帯が基地内に居住して遺跡前面に設置された接岸施設からの船荷の揚げ下ろしや海産食料の採捕に従事したとみられる。溝区画による広場の空間は、遠来のアイヌとの交易場としてだけでなく、①大浜中遺跡（付表番号、以下同じ）の存在からモイレ岬からフゴッペ岬に至る臨海ゾーンが和人の武装集団によって占拠され、アイヌを使役する海産物資の直営的な生産支配に伴う魚類の貯蔵・加工処理などの作業空間として機能したのではないかと考えてみた。民家用とは思えない径50cm余の鉄鍋や、遺跡の住人の自家消費のみでは説明しにくい大量のニシン頭骨の投棄も、遺跡内で一定の組織的な労働力編成が行われた状況をうかがわせる。

このようにみえてくると、当遺跡の性格は港湾付帯の交易基地といっても、石川県普正寺遺跡⁽¹⁾、青森県十三遺跡⁽²⁾など日本海域で顕在する中核港湾町の、幹線道路を挟み魚屋・酒屋・鍛冶屋・檜物屋などの諸職・商人が棟を接して集住する大規模な町場とは異質の景観を呈しており、いわゆる道南十二館とも構造・段階の異なる蝦夷地での交易形態に規定された構造といえよう。問題は遺構が整備された時期であるが、青磁広鍋連弁文碗と IV₁期の珠洲片口鉢の供膳・調理具一式の存在から和人集団の侵植が13世紀末に遡ることが確実視されるので、遺物量は全体の5%でいどにすぎず、当初季節的恒常的な交易場であった可能性を考慮するとしても、それほど時間的経過をおかずに整備されたと考えておきたい。この時期が、さきの日本海域における中核港湾町の町場形成の始期と一致することは重要であろう。遺物は、甕・壺=貯蔵具が欠落する点に問題を残すものの、ごく一部染付碗が15世紀後半ないし以降に下るとみられる以外ほぼ13世紀末から15世紀中葉におさまり、遺跡の盛期は道南十二館や日本海域の中核港湾町より幾分先行し14世紀後半～15世紀前半に求められる。大川中世遺跡の廃絶については、先稿で述べたように大溝でほとんど例外なく数cm～25cmほどの焼灰層が上部に堆積し、被火痕を有する中国陶磁・瀬戸陶器が総量の10%に上ることから、長禄元（1457）年のコシャマインの蜂起に連動した余市アイヌ集団の襲撃に求めうるかもしれない。当遺跡の中国陶磁に15世紀末に下るものを含まず、瀬戸陶器も小皿の一部が後 IV 古期（1440～60年）に帰属するもの⁽³⁾の大半は後 III 期までにおさまり、珠洲片口鉢で確実に VI 期（15世紀第3四半期中心）に下る個体を見出せぬことは、珠洲 V 期の下限が推定暦年代よりやや幅をもつことになる点に微調整の余地を残すものの、大きな年代的齟齬は生じない。

2 道内中世陶磁器出土遺跡の検討

道内の中国陶磁については松下 亘が16遺跡を集成し（付表文献1）、筆者も珠洲・越前陶器を出土した11遺跡について考察を加えたことがある（付表文献2）。以後十数年を経過し、上ノ国町勝山館・函館市志海苔館・大川遺跡の調査によって良好な資料が蓄積されたものの、その他の中世

遺跡からの出土資料は断片的で中世陶磁器の分布域と所有・消費層の性格に変更をもたらすような知見は報告されていない⁽⁵⁾。かえって上記3遺跡の調査の結果、中世陶磁器の所有・消費層が和人にほぼ限定されること、したがってそれを出土する遺跡の分布域と陶磁器組成の諸段階を整理することによって、道内への和人の侵植過程と交易形態の諸段階を推知しうることが再認識されたといえよう。とくに、大川遺跡の調査によってえられた港湾付帯の交易場の新知見を、城館の成立時期・性格とかかわらせて北方流通史にいかん位置づけるかを検証するため、あらためて道内の中世陶磁器出土遺跡について検討してみたい。

さて、遺漏が多いと思われるが管見に入った12～16世紀の中世陶磁器出土の39遺跡(表10)を瞥見していえることは、第1に㉞苦小牧市静川22遺跡(瀬戸美濃灰釉碗, 15世紀末), 沙流川流域の㉟平取町ユオイチャシ, ポロモイチャシ, 二風谷遺跡, イルエカシ遺跡(染付碗・壺, 瀬戸美濃天目碗, 唐津大皿, 備前系片口鉢, 16世紀末～17世紀初葉), ㊱釧路市遠矢第2チャシ(白磁皿, 16世紀前半)など、戦国～江戸初期に道東沿岸部に点在するアイヌのチャシ・村落出土事例はあるものの、大部分が余市と千歳周辺を結ぶ道南部に限られることである。しかもその分布域は、12～16世紀代を通して変動がなく、松前藩史料に和人居住地として現れる余市と鶴川を結ぶ圏内(『新羅之記録』)と一致をみる。現状では余市から渡島半島西岸部を経て函館付近までは小河川の河口部を中心に均一的に分布するのに対し、内浦湾岸沿いでは㊲森町森川遺跡から苦小牧市あたりが希薄なのがどのていど事実関係を反映しているかは調査の進展をまたねばならないが、従来やや漠然と捉えられていた14～15世紀代の和人の居住地は、(1)半島西海岸の港湾、(2)一部松前町におよぶ天の川河口部(上ノ国町)、(3)函館湾岸から恵山岬の周域、(4)内浦湾岸の四ゾーンにおいて、13世紀末と15世紀前半の二段階を画期として、予想以上に高密度に展開していたことになる。

第2は、道内の中世陶磁器の組成が、供膳＝中国陶磁(青磁・白磁, 碗・皿・盤)＋国産陶器(瀬戸美濃各種碗・皿), 漆器(椀・皿), 調理＝国産陶器(珠洲・越前片口鉢＋瀬戸三足盤・卸皿), 煮炊＝鉄鍋, 貯蔵＝珠洲・越前甕・各種壺, 喫茶＝瀬戸美濃天目碗, 信楽壺, 瓦質・土師質風炉＋茶臼, 暖房＝瓦質・土師質火鉢, 宗教他＝中国・瀬戸美濃香炉・花瓶・合子＋金属製品を基調とし、中世Ⅳ期についていえば供膳器にみる中国陶磁の卓越と瀬戸陶器の劣勢、調理器における珠洲陶器の圧倒的優勢は、北東日本海陶磁圏に連鎖する。ただし、大川遺跡でとくに顕著な貯蔵器の欠落や14世紀後半代を中心とする1群の白磁碗などについては流通ルートについて別途考察を深める必要がある。第3は、上記の陶磁器組成は、(Ⅰ)12世紀後半～13世紀中葉(中世Ⅱ<前>期), (Ⅱ)13世紀後半～14世紀前半(中世Ⅲ<中>期), (Ⅲ)14世紀後半～15世紀中葉(中世Ⅳ<後>期), (Ⅳ)15世紀末～16世紀末(中世Ⅴ<末>期)の4段階に区分でき、生産・流通の諸段階とも相即する⁽⁶⁾が、Ⅱ期前半は3遺跡3点、後半の陶磁器を出土する遺跡は皆無で、Ⅲ期以降との間に大きなヒアタスがある。この点は後述する。

ところで、出土遺跡の性格は、(1)城館が4分の1を占め、ついで(2)臨海河口低地、(3)ア

イヌ村落を含む点的な出土遺跡、および(4)墳墓その他に大別できる。まず(1)は、かつて「道南十二館」として包括的に捉えられ、永享4(1432)年(『満濟准后日記』)ないし嘉吉3(1443)年(『湊文書』『新羅之記録』)の津軽(上国)安東氏の滅亡と一党の島渡り⁽⁷⁾、あるいは1450年代の安東政季・蠣崎信純の渡道(同上)を契機として、「小河川の河口などの港をかかえた地域が、15世紀にはいるとしだいに商業都市化し、(中略)小規模の城郭=館^{なて}を築いてそれに拠る館主という階層が形成された」、その性格は「豪商であり、港湾部分を排他的に支配(具体的には、館に付属する港と上方方面との商品流通経路、およびそこでの対アイヌ人交易を独占)することによって一定の領主的成長を遂げた⁽⁸⁾」とする海保嶺夫に代表される見解は、中世北海道史を総体的に規定するものであった。

ただ、館の成立時期を15世紀代に求める所論が大勢を占めるなかで、③函館市戸井館跡を調査した千代肇は、当館がコシャマインの戦乱に姿をみせず、14世紀代の珠洲片口鉢が出土したことから、蠣崎氏との関係が希薄なそれ以前の築造ではないかとし、館跡北側の海津神社に遺存する2基の板碑を傍証として14世紀後半の築造年次を示唆した。筆者も、志海苔館膝下の海浜で発見された②蓄銭遺構が洪武通寶(1368年初鑄)を下限とし、包蔵していた越前大甕の14世紀中葉～後半の編年観と一致すること、米2,000石に匹敵する銭貨の備蓄に要する時間を考慮して、館の成立が14世紀前半に遡る可能性を考えた(付表文献2)。③志海苔館跡は、その後の精査によって、4,100m²ほどの略方形をなし、館主と近侍衆の居宅および儀礼用の殿舎よりなる北西郭と、井戸と厨房などの建物群とみられる北東郭、軸線が異なる書院造り風の東南郭より構成されることが判明した。北西郭を中心に出土した陶磁器には、一部14世紀後半代の口元げ白磁碗、珠洲片口鉢を含むものの、中国陶磁52個体、中世陶器約14個体は15世紀前半代を中心とする良好な一括であり、下限は瀬戸三足盤が後IV古期(1440～60年)の編年観を示すことから主要建物の廃絶は1450年代として大過ない。したがって、館跡調査の所見ではコシャマインの襲撃によって落城した形跡は認められないとするが、陶磁器の編年観は『新羅之記録』の年代と矛盾しない⁽⁹⁾。本館跡の中国陶磁の存続年次は14世紀末～15世紀第3四半期の幅をもつが、珠洲片口鉢には14世紀後半(IV₂・₃期)の製品が見出され、蓄銭遺構を館の構営と一体的に把握する限り14世紀第4四半期のうちに求めるべきであろう。

道南館跡群のうち③戸井館・③上磯町茂別館・④同町矢不来館・⑤福島町穩内館・⑥上ノ国町洲崎館・⑦同町花沢館は、採集陶磁器に即してみる限り、成立は志海苔館と同じか15世紀前半のある時期と判断される。このうち洲崎館は、長禄元(1457)年、蠣崎信純(武田信広)の築城とされるが(『新羅之記録』・『福山秘府』)、陶磁器組成は型押双鱼文を施した青磁皿と大川遺跡に類する白磁碗以外は志海苔館と同じ15世紀前半を中心とする組成であり、染付皿・稜花皿など少量ながら16世紀代の遺物を含んでおり、松前藩史料にはわかりに可信し難い。勝山館に先行し花沢館と併存して天の川河口部に構築された第I期の城館と考えねばならない⁽¹⁰⁾。⑥上ノ国漁港の陶磁器は、西岸河口一帯の町場で廃棄された遺物の流入・堆積物とされ、コシャマインの蜂起を

誘発したとされる和人の鍛冶屋とアイヌのトラブルも、志海苔館膝下の臨海地に想定される商人・職人の居住区での出来事とも考えられるから、城館が構営された半島南部の成立基盤は、同じ道南部でも城館に発展しなかった大川タイプの交易基地のゾーンと異なり、より直営的にフロンティア化する条件があったと予測される。このように推定すると、「道南十二館」として模式化されてきた松前藩史料にみえる城館は、考古学的調査に即していったん解消し、とりあえず上記の14世紀末ごろを上限とし15世紀前半代を中心に存続したⅠ期のグループと、15世紀末ないし16世紀前半に構築された⑬松前町大館・⑭上ノ国町勝山館・⑰同町比石館のⅡ期のグループに大別して段階的構造的特質の解明に努めねばならない。

つぎに(2)は、古宇川河口の③神恵内観音洞窟、朱太川河口の④寿都(樽岸)遺跡、後志利別川河口の⑥利別川口遺跡、乙部川河口の⑧元和8遺跡など渡島半島西岸の小河川河口部に営まれた一連の遺跡のほか、⑳松前町茂草B遺跡、㉑森町森川遺跡も包括しておく。寿都利別川口、元和8の諸遺跡は、青磁碗皿、珠洲片口鉢および宋銭が少量出土しているだけで遺跡の性格は不明である。しかし、寿都・利別川口両遺跡は渡島半島西岸の中級河川河口の砂丘地で擦文期以来村落が所在し、漁撈活動の基地であるとともに交易の拠点であったと考えられる。

この点を瀬棚地区についてみると、享祿2(1529)年セタナイのタナイヌの勝山城攻撃にみるごとく西岸地域を代表するアイヌ集団が所在し、太櫓以北はアイヌの居住域で「口蝦夷」と呼ばれていた。また、元和4(1618)年に渡道した宣教師J. アンジュリスの報告書には、大きな川をアイヌが船に乗りメナシ(道東北端)から瀬田内へ商い行くと記され、寛文9(1669)年シャクシャインの蜂起時にはアイヌ人家が33軒ほどあり、大将彦次郎の居城がおかれていたという(付表文献6ほか)。この間の考古学的物証としては、後志利別川北岸に和人が被葬者と考えられる火葬墓群(利別川口遺跡⁽¹¹⁾)があり、前期珠洲片口鉢片は一帯の整地時に出土した。また、南東約1.1kmを隔て旧太櫓街道に接して16世紀末~18世紀中ごろに営まれた瀬田内チャシがあって、大量の鉄製工・漁具類と骨角製漁具、鉄鍋・武器具・煙管・ガラス玉・砥石および唐津・有田を中心とする陶磁器が出土しており、北東約250mにアイヌの土葬墓群(南川2遺跡⁽¹²⁾)が所在する。利別川口・南川2両墳墓遺跡の存続年次については、15~17世紀前半代の幅で捉えられており確定できないが、本州中世の墳墓構造から勘案すると、前遺跡で一般的な小土壇に有機質の火葬蔵骨器を埋納する事例は14世紀後半を遡るとは考え難い⁽¹³⁾。しかりとすれば、中世Ⅳ・Ⅴ期には和人とアイヌの近接地での住み分け、葬り分けが確認できることになる。このように当地区でも15世紀以前の状況は明確でないが、砂丘地から採集された珠洲片口鉢片がⅣ₁・Ⅳ₂・Ⅴ期(13世紀末~15世紀前半)にわたるのが注目される。このように陶磁器が複数窯式におよぶのは、同一の占地を示す寿都遺跡でも認められ、珠洲片口鉢はⅣ₂・Ⅴ期の陶片を含む。これらのうちには、㉒知内町湧元遺跡、㉓上ノ国町北村遺跡の珠洲片口鉢(Ⅳ古期)や㉔函館市弥生町遺跡の越前片口鉢(15世紀後半)のごとく鉢被り人骨に伴う特異な埋葬事例もあるかもしれないが、河口部の砂丘地の拡がりからみて、大川中世遺跡と同じ港湾に付帯する対アイヌ交易場の実在が想定され、

少なくとも中世Ⅲ期の長期にわたり季節的恒常的な和人の往来があったとしなければならない。

そう考えて大過なければ、積丹半島基部の古宇川南岸に占地し、恵山式—後北C₂式—北大Ⅲ式—擦文各期—中世Ⅲ期—江戸末期にわたり、季節的な漁撈を主体にし、ときに土器の製作や鍛冶も行ったベースキャンプの居住・作業場として断続的に利用され、一時埋葬場ともなった神恵内観音洞窟出土の珠洲片口鉢（Ⅳ₂期）は、大川遺跡や尻別川河口など近傍の拠点から交易物資の調達に訪れた際の足跡と解されよう。また松前町茂草B遺跡は、茂草川の南約850m、吉岡漁港東方の海岸段丘上に擦文村落を踏襲して営まれた中世Ⅳ期の遺跡であって、20穴弱の柱穴を検出しているだけで詳細は不明である。占地から大川タイプの拠点的な交易基地とは考えられないが、段丘崖下の小河口を足場とし、福島町穂内館などに先行してアイヌ村落付近に営まれた、小規模な和人村落の交易基地と考えておきたい。

森町森川遺跡は、茂草B遺跡同様やや内陸の丘陵上に占地する擦文期の拠点的な漁撈村落遺跡であって、14～15世紀前半代の陶磁器が出土している。遺物量からみても内浦湾岸の一角に館跡群に先行し港湾地区と連繋して設営された、大川遺跡とは別類型の拠点的な交易場としてよいであろう。

また(3)は、③⑤千歳市美々8遺跡、③⑥末広遺跡など、石狩低地の内陸河川域、および内浦湾岸から沙流川・釧路川におよぶ③③、③④、③⑦～③⑨の諸遺跡での点的な出土例である。このうち後者のグループは、16～17世紀前半の「ウイマム」の落し子とも思われるアイヌの遺跡からの出土品で、恒常的な交易品とは考えにくい。前者のうち、美々8遺跡は、松浦武四郎の『再航蝦夷日誌』（1846年）にみえる「ビビ小休所」にあたる建物の至近地にあって、T a-b層（1667年降下）直下より宋銭、離頭銛先、マレク、斧などの鉄器、貝殻・獣骨と珠洲片口鉢（Ⅴ期）1個体、青磁碗若干が、出土した。崖頂部には2×2～2×3間の小掘立柱建物群が検出され、斜面方向に美沢川北岸の船着場？へ下りる小径も確認でき、近世初頭まで年代幅をもつものの、アイヌ集団が媒介し内陸水運—陸路を通して道東（勇払平野）から道西（石狩低地）へ抜ける交易の中継地とできる（付表文献23）。これを和人の移動の足跡と即断しないとしても、8～9世紀代に東北北部と道南部の交易媒体者を被葬者とするいわゆる北海道式古墳以来の内陸の交易幹線路「ユウフツ（シコツ）越」上に所在することは重視すべきであろう。(4)に包括した遺跡は、前述の鉢被りの特異な埋葬に供されたばあいのほか、②⑦函館市七重浜出土と伝える完形の珠洲壺（Ⅳ₂期）が火葬蔵骨器の可能性を残すものの、道内では陶製の火葬蔵骨器の確実な事例は報ぜられていない。

このほか中世陶磁器の重要な一括として、①余市町大浜中遺跡出土資料がある（図47・写真26・27）。本遺跡の陶磁器は松下亘の詳細な報文によって周知されているが、遺物の年代観と遺跡の性格には検討の余地を残しているので要説しよう。本遺跡は、大川遺跡の東約2.2kmに所在した登川放水路工事中、海岸部の深度約60cmから発見されたといい、完好の青磁碗4・皿5・瀬戸美濃天目碗1、漆器数点、内耳鉄鍋3、丸玉9、鐺2、宋銭（淳化元宝ほか）がまとまって出土したとされる。現在これらの正確な同伴関係は確認できず、ここからさらに東1.8kmの砂丘地の栄町遺跡⁽¹¹⁾

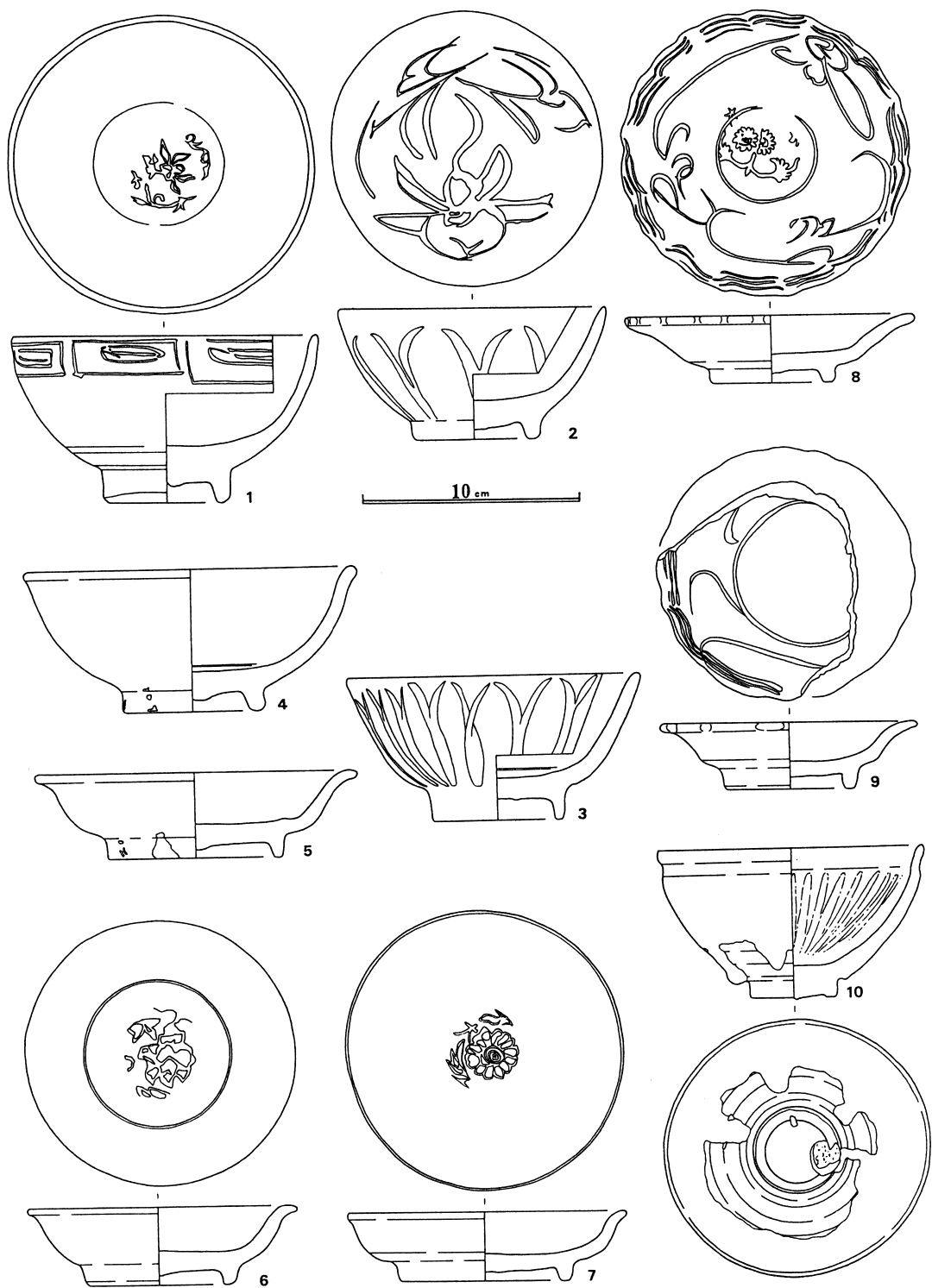


图 47 大浜中遺跡陶磁器 (縮尺 1/3)

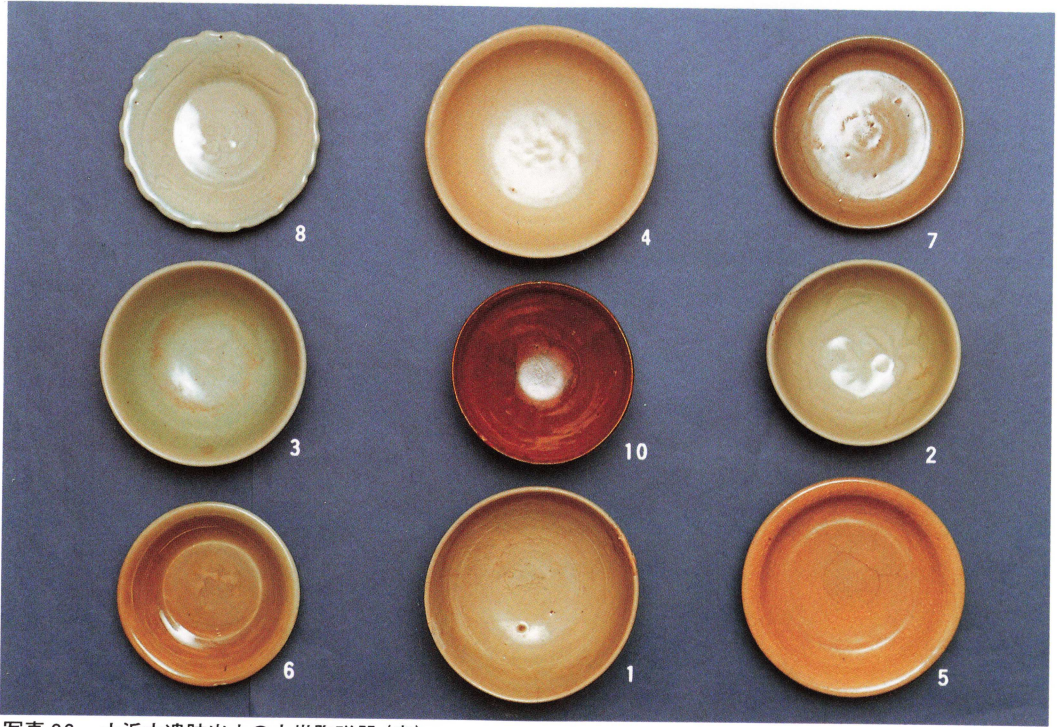


写真 26 大浜中遺跡出土の中世陶磁器 (表)

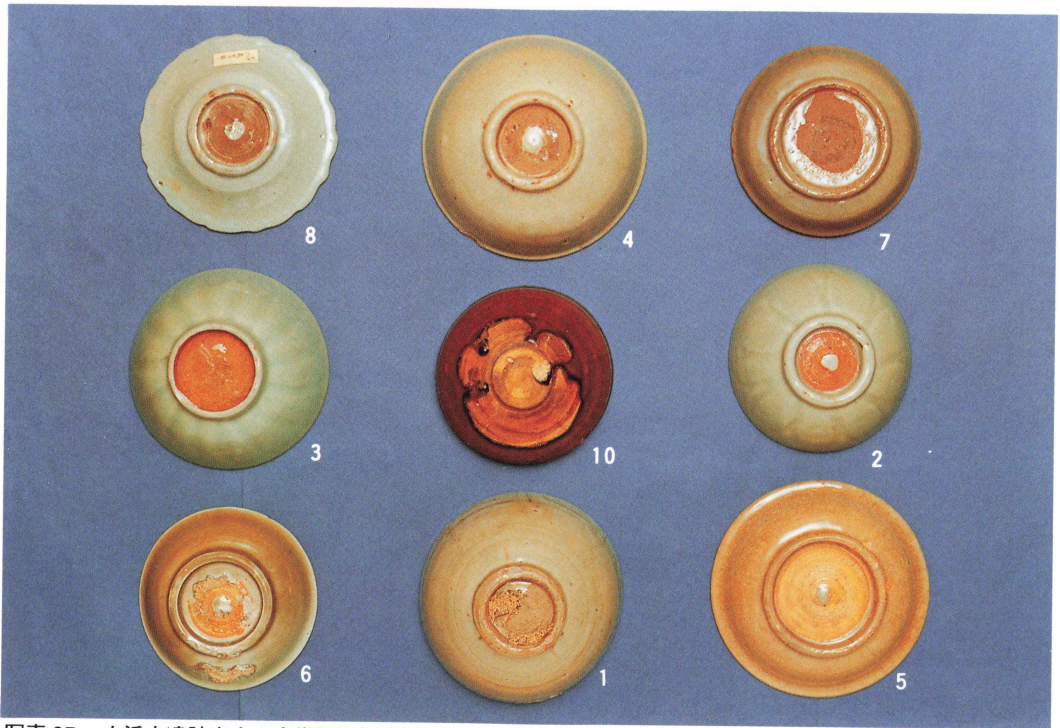


写真 27 大浜中遺跡出土の中世陶磁器 (裏)

からは、かつて鎌倉後期の兵庫鎖付帯執(図48)や鐔などの刀装具、室町中期の胴丸残欠(杏葉・大袖・背板・小札ほか)を出土したとされ、昭和33(1958)年には発掘調査が行われ貝等の供物を入れた木製容器が出土したといわれるが詳細は不明である。

ただ、大川遺跡の陶磁器と融着した数個の漆および鉄鍋は、中世後期に各地でみられる蓄物遺構dépôtの存在を示すと思われる。陶磁器は2時期を含み、青磁雷文直口縁碗(図47-1)・粗線蓮弁文直口縁碗(2・3)・無文端反口縁碗(4)、および青磁無文端反口縁皿(5・6)は、紀淡海峡友ヶ島の海揚りの一括⁽¹⁵⁾を指標とする14世紀末～15世紀中葉、内面に凶案化のすすんだ草花文を施した稜花皿(7・8)と美濃天目碗(9)は15世紀第4四半期(1570～80年代)の所産である。雷文帯で加飾した青磁碗は、道内では②4矢不來館跡の採集資料と高台外側に施文した陶片が②1穂内館跡から出土しているにすぎない。このうち青磁無文端反口縁碗・皿は大川遺跡の主体的な中国製供膳器であるが、大浜中遺跡の埋納時期は15世紀末としてよいから、大川遺跡が大浜中へ拠点を移して営まれたとも考えられるが、陶磁器に伝世品とみられるものを含み、宋銭のように蓄物遺構への一括埋納とは考えにくい遺物の散布からすると、大川遺跡と併存して大浜中に居館的遺跡が存在した可能性も否定できない。

3 北方流通史と大川遺跡

上記略述してきたところによって、13世紀末ごろを上限として大川中世遺跡に代表される和入集団が、港湾を核とするアイヌ集団との交易場ないし特産物を直営的に調達する基地を、余市と鶴川を結ぶ道南の河口部に一斉に設営し、本格的な侵植を開始した実相の一端が明らかになったと思う。このことは、「安東氏が蝦夷嶋に竄入すると間もなく蝦夷の大乱が起った。」という『新撰北海道史』以来の松前藩史料に依拠して説かれてきた、道南十二館の築造とコシャマインの蜂起の同時的発生という年代的矛盾(付表文献2)を修正し、従来ほとんど具体的に論述されなかった館主層以下の和入集団の直接的侵植を大川タイプの交易基地と道南館跡群の2段階の展開として把握することによって、コシャマインの蜂起以後1世紀におよぶ「和夷戦争」⁽¹⁷⁾の顛末が説得的に説明できるようになったといえよう。

しかし課題はすこぶる多いのであって、大川タイプの交易基地の後半が、汐首岬と江差湾岸間に1段階遅れて成立するI期の館群と併存する以上、両者の相互関係ならびに館群構築以後との交易形態の段階差が、大川タイプの交易基地と館群の分布差の意味を含めてまず検討されねばならない。また、13世紀末における列島社会の経済変動と日本海流通圏の推移とのかかわりもあらためて問われよう。個別発掘事例が限られた現状で考古資料による状況判断はかなり大胆にならざるをえないが、中世Ⅲ・Ⅳ期の陶磁器供膳器についていえば、中世Ⅲ期の青磁広鍋蓮弁文碗+白磁口兀皿、Ⅳ期の青磁粗線蓮弁文・雷文・無文碗+白磁粗製皿・坏+瀬戸灰釉平碗・小皿の組成と中国陶磁卓越を基調とする産地構成は道内の諸遺跡で共通しており、13世紀末の和入集団の侵植が、おおづかみに首都市場圏に直結する北東日本海交易圏の北進・膨張に連動することは確かである。ただ、大川遺跡では日本海域でみられない白磁端反碗の1群が顕在し、大川・大浜中⁽¹⁸⁾

	器種	法量 (cm)		
		器高	口径	底径
1	青磁・碗	7.8	14.0	5.2
2	〃 〃	6.2	12.3	5.4
3	〃 〃	6.7	13.3	5.9
4	〃 〃	6.7	14.8	6.2
5	〃 皿	4.0	14.3	7.8
6	〃 〃	3.6	12.1	6.3
7	〃 〃	3.2	12.8	7.6
8	〃 〃	3.1	13.0	5.4
9	〃 〃	3.1	11.5	5.7
10	瀬戸美濃・天目碗	7.1	12.1	3.6

表 11 大浜中遺跡陶磁器法量



図 48 伝栄町遺跡兵庫鎖付帯執 (縮尺 1/2)

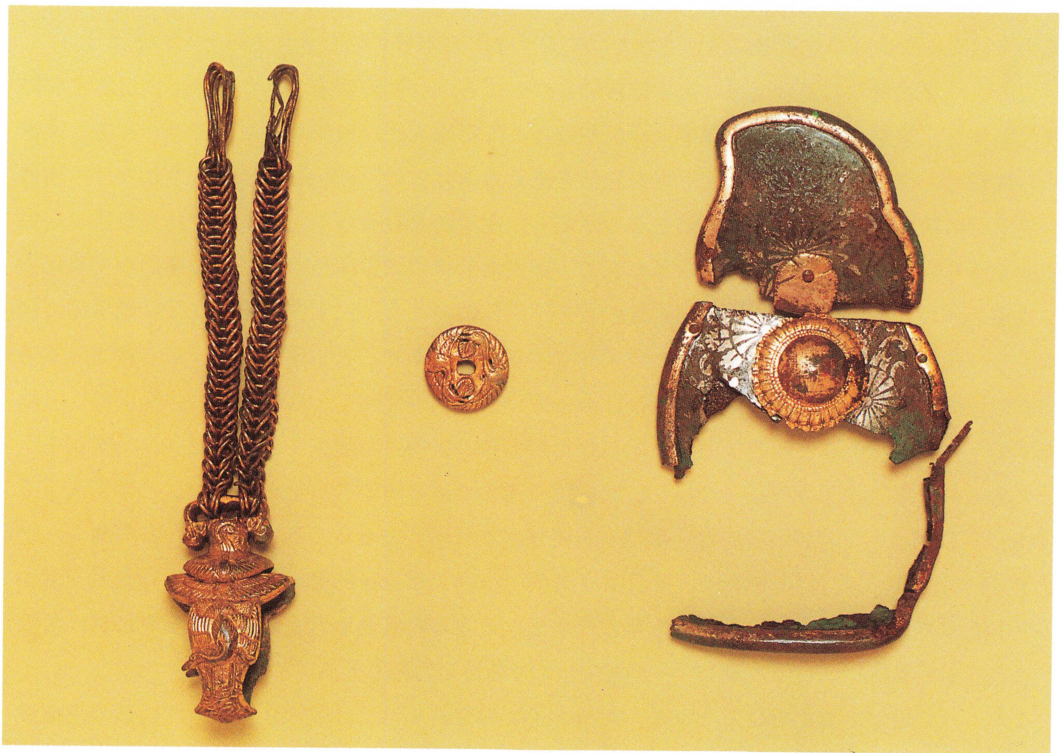


写真 28 伝栄町遺跡出土の兵庫鎖付帯執と杏葉

両遺跡で石川県普正寺遺跡、秋田県後城遺跡、青森県十三遺跡など中世Ⅳ期の組成に普遍的な白磁粗製皿・坏が全く存しないことは、志海苔館跡、洲崎館とは異なる流通経路、ひいては大川タイプの諸遺跡を安藤一党によって組織的に設営された交易基地と即断できないことを示しているとも思われる。

しかし一方で、14世紀末に成立する志海苔館を指標とするⅠ期の道南館群の展開が、対蝦夷地交易の北辺基地として建設された十三遺跡の北に館跡が構営され、以南の中軸街路を軸線とする整然たる短冊街区として整備される14世紀末の段階⁽¹⁹⁾で、安藤氏が港湾・交易機能を一元的に掌握したという見通しにたてば、館跡群および大川タイプの諸遺跡の後半は、東北北部から渡島半島南岸の交易活動と一体性をもって推移したこととなり、従来強調されてきた南部氏との覇権争いに敗退した安藤氏一党の島渡りを現実的契機とする北海道中世史の構想は、再検討を要する。この点の検証は、中世後期の港湾町構造の変容に具象される経済変動の基本的な理解にかかわる鍵点なので稿をあらためたい。

このように想定をすすめるならば、大川遺跡を終着とする道内各地の河口部に占地する小規模な交易基地は、十三遺跡から進発した廻船の寄港地としてネットワークで結ばれていたのは確かとしても、安藤氏一党によって一元的に統轄される状況は考えにくく、各自が独自の交易場として機能し経済的自立性を保持していたかと思われる。ただ、日本海域の港湾町のごとく地域相互間の交易機能にとどまらず、商・職人が集住し半国ていどの地域経済圏⁽²⁰⁾に各種の民需物資を供給する在地の流通核としての役割りを果たしたとは認め難く、そこに異民族=エゾとして認識されるようになった中世の北海道に設営されたフロンティアの本質が明示されていたといえよう。

このような独自性と競合関係は道南館跡群についても、つとに考定されており、大川タイプの交易基地を武装集団が占拠し、軍事・経済基地として再編された城館もあったと思われる。港湾から隔離した臨海丘陵地に館主と近習が城館を構えるあり方は、居館を核に改造された日本海域の港湾町の第2段階とは異なる。館主層の軍事・防衛空間とおそらく対アイヌ交易を意識した威圧的な儀礼空間として丘陵に整備された点で、蝦夷地独自の城館構造であり、強権的な交易形態に規定されたと考えてよい。道南館跡群でも矢不来館跡のごとく、下国守護職安藤家政居館の伝承をもつ茂別館や志海苔館を凌駕する規模を有するものがあり、考古学的方法による城館の重層構成の把握を進めねばならないが、そのばあい佐藤季則（中野館）・近藤季常（弥保田館）・蠣崎季繁（花沢館）のごとき若狭出身と記された館主層の信憑性が議論されてきた。データが不十分であるが、東北北部から道内の14～15世紀代の遺跡で越前陶器の出土が目立つことは、永享7（1435）年に炎上した若狭羽賀寺が「奥州十三湊日之本將軍」安藤康（泰）季によって再興された記事（『羽賀寺由来記』）とあわせ、北日本と若狭（小浜）が直接的ないし頻度の高い廻船交易のルートを保持していたことの反映とも考えられる⁽²¹⁾。そうした流通形態が成立する背景には、若狭方面から直接渡島した武士・商人たちが実在した可能性を想起させる。

このように想定をめぐらしてみると、大川タイプの交易基地は、設営当初より河口部の港湾機

能の掌握と直営的な特産物資の調達を通して強権的収奪的な側面を具備しており、14世紀前半代には互恵的な「和夷共存」とはいえない状況が急速に作り出されつつあったといえよう。そうした状況を作り出した列島の経済的背後事情として、『庭訓往来』(1334年)の「宇賀昆布・夷鮭」に象徴される、町衆をはじめとする都市・町住民の北海産物を含む特産品に対する需要増があったと思われる。そして城館がいったん構営されると、たとえば後志利別川以南の小港湾基地は道南十二館に姿をみせない洲崎館、内浦湾岸沿いのそれは茂別館などとの間に館主＝国人－武装商人といった形で個別的な重層関係を生じつつ組織化され、やがて15世紀末に勝山館と一体的な出先機関としての洲崎館が存続する段階で、松前・上ノ国地区に往来する商船・商人に年俸を課す形で(『新羅之記録』)、交易業務を独占するようになるのであろう。

ところで、中世Ⅲ・Ⅳ期の交易形態を一応上記のように理解したばあい、先行する中世Ⅱ期のそれは、どのように考えるべきであろうか。この点の手がかりとなる中世陶磁器出土はきわめて乏しいが、⑫洲崎館跡の採集資料中に珠洲四耳壺(Ⅰ₂期)、勝山館膝下の天の川南岸、河口部の⑮竹内屋敷より珠洲壺(Ⅰ₃期)が出土し、12世紀後半・末ごろすでに当地区が和人の交易拠点であったことを暗示し、洲崎・花沢・勝山館へ発展する基礎がおかれていたと考えられる。そして、当該期のいまひとつの出土が大川遺跡N58区出土の珠洲壺であって、下胴を亡失するが、口径20cm、胴径33.3cmを測り、3cm当たり9条のやや粗な叩き目が右下がり深く施され、口端を嘴頭状に仕上げている(甕口縁a2類)、Ⅰ₃期に帰属する(図49)。これらは、両地域へ

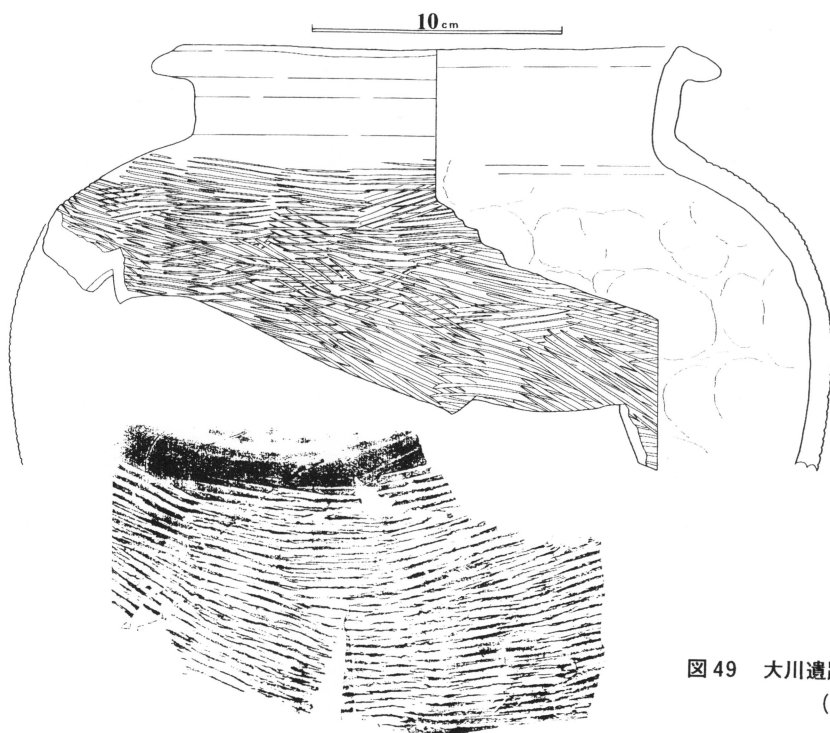


図49 大川遺跡珠洲陶器
(縮尺1/3)

の和人の一時的来往の痕跡とも「オムシャ」に伴う酒類を入れた贈答品とも考えられるが、大川遺跡で確認されたことは、その存在理由を奥州合戦で敗れた平泉藤原氏の残党や流刑者との関係で捉えることに否定的である。この段階が道内における擦文土器の終焉に伴う本州産漆器埴皿類と鉄鍋普及の最終段階と考えられているだけに、これら陶磁器の存在が示す意味は小さくない。

擦文土器の終焉については、近年東北北部の在地土器の編年観と対応させほぼ11世紀代のうちに求める見解が提示されている⁽²²⁾。一方、道内の研究者でもかつてのごとく13世紀後半以降とする見解のなりたち難いことは明白であるが、釧路市材木町5遺跡15号竪穴における湖州鏡⁽²³⁾や泊村茶津4号洞窟、別海町浜別海遺跡1号竪穴⁽²⁴⁾などでの宋銭の共伴例などから12世紀後半代まで下げて考える意見が一般的なようである。材木町5遺跡出土湖州鏡について報告者は、「東北地方から北海道への北上を肯定する材料は引き出せない⁽²⁵⁾」とするが、「湖州真石家」銘方鏡が東北に偏する出土傾向はその流入経路を示唆するとみるのが自然であり、流入時期も宋銭同様12世紀後半ごろが妥当視される。しかりとすれば、前記中世Ⅱ期前半の陶磁器の挙動とかかわらせて理解できることとなるが、そのばあいも三浦圭介が説くごとく、擦文土器の終焉が10世紀中葉を画期とする津軽地域を中心とした水田開発と製陶・製鉄・製塩業の発達に緊密に連動しつつ本州産生活財への依存度を飛躍的に高める消費形態への転換が、以後段階的に進行したことは間違い⁽²⁷⁾ない。そのことは、当該期の東北北部の土師器組成における供膳器絶対量の低下に端的に現れており、11世紀前半から中葉へかけての粗製漆器への置換と11世紀後半から12世紀初葉へかけての鉄鍋の普及という2段階の展開が、道内でも進行したことは確実視され、12世紀後半は一応その最終段階となる⁽²⁸⁾。青森県古館遺跡に代表される多量の鉄鍋の所有・消費と同期に特徴的な差し鍋を転写した把手付土器⁽³⁰⁾および内耳土器の存在は、その間の推移を示す事象といえる。ただし、煮炊具の鉄鍋への置換には鑄造遺跡の存在が前提となるが、岩木山麓の製鉄遺跡群では未確認で、より広域的に東北全域ないし北陸・畿内周辺を含めた生産地の模索が必要であろう。

また、本期の東北北部における殖産興業の担い手については、擦文土器の分布に加えて近年道南でも発見があいついでいる要塞村落の存在をも考慮し、東北北部と道南部の一体性を強調し、擦文集団を開発主体とみる見解がある。これに対し東北北部の擦文土器の時期・地域性を分析した天野哲也は、下北半島には一部貝層を伴う岩蔭遺跡や擦文主体の村落があり、南下した擦文集団が日常生活を営む基盤が残されていたのに対し、青森湾岸から津軽半島にかけては製鉄・製塩遺跡からの出土例が多いものの散発的なことから、「特殊な生産物を求めて道内各地から擦文人がやってきた痕跡⁽³²⁾」とみなし、擦文終末期の土器を出土する遺跡が減少しながら一遺跡の住居群での出土頻度が高いのは、津軽地域の特定集団に交易権の集中が生じつつあったことの現れとした。天野の擦文土器の地域区分に従えば、道西北部の擦文集団(Ⅱ・Ⅲ)とかかわる遺跡が目立ち、利尻・樺太方面から西海岸ないし石狩低地を経て千歳水系を介しユーフツ越えのルートで南下する擦文集団が交易に深くかかわり、おそらく余市集団も一翼を担ったことになる⁽³³⁾。

道内における須恵器の分布が道東に希薄でかつ供膳器の出土がみられないことは、調査の進捗

状況に左右されるとはいえ道南部とともに石狩低地での出土量が多く、大川遺跡の擦文期村落では大体別個体とみられる甕・長頸瓶・坏の出土数が150~180点に上ることも、樺太方面からの南下ルート、西海岸沿いの北上ルートおよび石狩低地を結ぶ結節に位置する物資集散地として機能したことを如実に物語っている。大川遺跡で米を大量に備蓄した擦文前期の建物（SH-8・13）は、米・酒もまた重要な交易物資であったことを物語る。道内出土須恵器は、10世紀後半代の製品の大半が津軽五所川原窯産であることは問題なく、8~9世紀代の製品については日本海域の複数の窯跡とする胎土分析の所見のまま留保されているが、陶片の砥石への再利用を含め特定の⁽³⁴⁾ 堅穴における醸造器など日常生活財として普及した点で、擦文集団の積極的な交易活動を裏づける。

大川遺跡を含め小鍛冶遺跡が全道に流布するのもこの時期⁽³⁵⁾ であり、鉄製工具の広汎な普及は多様な木製品の量産をもたらしたと推定される。この段階はまた、古代律令制下で「辺民」として編成され、貢進する獣皮・羽毛類が身分表徴として機能する段階から、異民族=エゾとして自立する前提条件が整えられた時期でもあった⁽³⁶⁾。9世紀以降、東北北部の生活様式は政治的版図とは別に基本的に列島中央に同化したのに対し、北海道では作り付け竈を有する堅穴住居構造は受容されたが、都市の不在、貨幣経済の未発達、水稻栽培をはじめとする木轆轤、鉄製錬などの生産技術や乗馬の習俗、文字文化、仏教イデオロギー（火葬）は定着せず、津軽海峡を挟む東北北部社会との異質性が表面化し、アイヌ固有の民族文化の形成がすすんだことも看過できない⁽³⁷⁾。

北方流通史における擦文後半期の占める意義にふれてきたが、ここで先行する続縄文期との対比によって中世流通史の位置を巨視的に俯瞰してみたい。続縄文土器の本州への南下については佐藤信行らがつとに集成的考察を行い、以後もこの問題に関説した論者は多い⁽³⁸⁾。その成果によれば、100遺跡を越える続縄文期の遺跡群の時期別推移は後北C₂・D式期に集中し、北大式は3分の1ほどで、分布域は後北C₂・D式期には米代川・馬淵川以北に集中するほか、牡鹿半島、北上川流域、仙台湾岸の東北6県におよび、南限は日本海側では新潟県中部、太平洋側では福島県南部におよぶ。これは山田秀三によるアイヌ語地名の広がり⁽³⁹⁾ と正確に一致する。近年はこれを異質の文化の一過性の南下とする理解からすすんで、縄文期以来の東北と北海道の生活レベルでの親密な交流による「文化領域」の形成とする認識が広まりつつあり、移入の多経路も予測されている⁽⁴⁰⁾。ただ、擦文文化との交渉と対比すると分布域が広大なだけでなく、後北期の土壌墓にみる両端の柱穴、北大期のそれにみる土器埋納用袋状ピット、あるいは後北C₁期特有の二等辺三角形石鏃、後北C₂・D~北大期の黒耀石製ラウンドスクレイパーなど続縄文期に特徴的な墓制や生産用具を伴うことから、擦文期をはるかに上回る北海道側からの広域的な人的移動と生産活動が展開されたと考えられ、交易形態も量的には擦文後半段階に比肩すべくもないが、より多集団間の直接的なものであったと推定される。

以上、大川中世遺跡の構造的把握から出発し北方流通史における段階的位置と背後事情について考定をめぐらしてきた。近年の北方史研究は、人類学・民族学および文献学主導から、ようや

く考古学も加えた古代・中世史像構築の方向性が模索されるようになったとはいえ、いぜん文献学が照射した律令—王朝—中世国家の北方政策の展開に規定された北方民族観や収取体制の変容が論じられている。したがって交易については、北方諸民族との交流が広く認識され北海道先住民の広域的積極的な交易活動の実態が明らかにされながら、鉄器・木器類が遺存しにくいという資料的制約があって、主として威信財レベルで議論されることが多いのが現状である。今後、問題を具体的に深化させるためには、擦文・アイヌ社会の交易組織と変容の段階的な解析が不可欠の作業であるが、小稿ではほとんど言及できず、主として陶磁器のあり方を手がかりに、従来不分明であった14～15世紀代の館主層以下の和人集団の動向を素描し、この段階から互恵的な交易を基本とする「和夷共存」の状況は急激に変化するとの推察を提示するにとどまった。なお、北方諸民族とのかかわりのなかで北方史を論ずる視点自体は正しいが、民需品レベルの交易問題では、あくまでも小稿の骨子となった本州と蝦夷地の交渉を基軸に展開すべきであると考えていることを付言して擱筆する。

小文の作成にあたり、小野正敏・久保泰・越田賢一郎・佐藤一夫・鈴木 信・藤沢良祐・西本豊弘・馬淵和雄・長沼 孝・松崎水穂・松下 亘の諸氏からご教示いただいた。大川・大浜中両遺跡の陶磁器・刀装具の実測にあられた斉藤麻紀氏とともに深甚なる謝意を表する。

註

- 1 吉岡康暢・桜井甚一・浅香山木ほか 『普正寺』 金沢市教育委員会 (1970年)、垣内光次郎・芝田悟 『普正寺遺跡』 石川県立埋蔵文化財センター (1984年)
- 2 千田嘉博・小島道裕・宇野隆夫・前川要 「福島城・十三湊遺跡1991年度調査概報」 『国立歴史民俗博物館研究報告』 48 (1993年)、宇野 「日本海に見る中世の生産と流通」 『中世都市十三湊と安藤氏』 (1994年) ほか。
- 3 藤沢良祐 「瀬戸古窯址群」Ⅱ 『瀬戸市歴史民俗資料館紀要』 X (1991年)
- 4 吉岡康暢 『中世須恵器の研究』 (1994年) 390～391頁
- 5 以後、道内の中世陶磁器出土遺跡を集成したものに、松下亘 「第10節 イルエカシ遺跡出土の陶磁器の意義」 『イルエカシ遺跡』 (1989年)、松崎水穂 「上ノ国町勝山館発掘調査と関連させて」 『中世都市十三湊と安藤氏』 国立歴史民俗博物館 (1994年) がある。
- 6 『中世須恵器の研究』 第一部序論三、第二部第四章第3節
- 7 以下、文献資料との照合は、主に海保嶺夫編 『中世蝦夷史料』 (1983年)、『同上補遺』 (1990年) による。
- 8 海保嶺夫 『幕藩制国家と北海道』 (1978年)、197頁
- 9 付表文献18では、瀬戸三足盤を15世紀末として14世紀後半からおよそ1世紀間に4期の遺構変遷図を示し、廃絶に永正のアイヌ蜂起 (1512年) を想定させるため、館の存続年次で私見と約半世紀の齟齬を生ずる。松崎水穂も指摘するように (『中世道南の様相』『列島の文化史』 7, 1990年, 103～104頁)、北東・北西郭と南西郭が併存した余地があるのではなからうか。
- 10 前掲『中世須恵器の研究』、393頁註27。なお、洲崎館跡出土陶磁器の集計数 (付表12) は松崎水穂のご配慮をえて筆者算定。
- 11 加藤邦雄 「北海道の中世墓について」 『北海道の研究』 2 (1984年)
- 12 田部 淳・田村リラコほか 『南川2遺跡』 瀬棚町教育委員会 (1985年)
- 13 前掲『中世須恵器の研究』 785～788頁
- 14 佐藤矩康 『埋もれていた余市の宝物』 北海道文化財保護協会 (1990年)

- 15 西山要一 「紀淡海峡海底採集の中国陶磁器」 『古代研究』 5 (1974年)
- 16 高倉新一郎 『新撰北海道史』 2 (通説2) (1937年) 52頁
- 17 註8 海保文献ほか。
- 18 前掲『中世須恵器の研究』第二部第四章第3節
- 19 註2 文献。なお、北東日本海域の中核港湾町が、14世紀と15世紀の2段階の画期をもって町場が成立・膨張したことはつとに指摘してきたが(前掲『日本海域の土器・陶磁 [中世編]』351頁以下)、とくに14世紀代の構造究明は残された基本課題である。
- 20 浅香年木 『中世北陸の社会と信仰』 (1988年) 第1編第1～3章
- 21 前掲『中世須恵器の研究』827～828頁
- 22 三浦圭介 「本州の擦文文化」 『考古学ジャーナル』 341 (1991年) ほか。
- 23 西 幸隆・松田 猛・蛭原真奈美・菅谷誉柴子 『釧路市材木町5遺跡調査報告書』 釧路市埋蔵文化財調査センター (1989年)
- 24 竹田輝雄ほか 「茶津洞窟遺跡」 『小樽博物館紀要』 1 (1962年),
岩崎卓也・前田 潮・大沼忠春ほか 『浜別海遺跡』 別海町教育委員会 (1972年)
- 25 註23 文献, 341頁
- 26 久保智康 「平安後期出土鏡の研究序説」 『東アジアの考古と歴史』 下 (1987年)
- 27 三浦圭介 「古代東北地方北部の生業にみる地域差」 『北日本の考古学』 日本考古学協会 (1994年)
宇野隆夫 「考古学からみた日本生産流通史」 『日本歴史』 380 (1994年)
- 28 擦文土器の終焉年代については、旧稿(付表文献2)で上ノ国竹内屋敷における所見を参考に、12世紀後半ないし以前と推察し、現在は基本的に三浦説を支持する。宋銭との共伴関係については、筆者の調査体験でも遺構のかなり深部まで混入している事例があるので留保すると、材木町5遺跡の湖州鏡共伴が道内のほとんど唯一の問題例かと思われる。擦文土器編年について論評能力をもちあわせないが、この湖州鏡が北方ルートの紛れこみとでもしない限り(北方ルートの交易物が服飾品主体の威信財であることからその可能性は薄い)、その流入時期を状況的に12世紀前半以前に遡らせるのは躊躇される。後考を期したい。
- 29 北林八洲晴・福田友之・長谷川潤一ほか 『碓ヶ関村古館遺跡』 青森県教育委員会 (1980年)
- 30 飯村 均 「平安時代の鉄製煮炊具」 『しのぶ考古』 10 (1994年)
- 31 松前町伝原口館跡, 上ノ国町汐吹ワシリチャシ遺跡, 乙部町小茂内遺跡
- 32 天野哲也 「本州北端部は擦文文化圏にふくまれるか」 『考古学と地域社会』 同志社大学考古学シリーズⅢ (1987年) 538頁
- 33 山本哲也 「擦文文化に於ける須恵器について」 『国学院大学考古学資料館紀要』 4 (1988年)
- 34 三辻利一 「大川遺跡出土土器の蛍光X線分析」, 山本哲也 「大川遺跡出土の須恵器」 『1992年度大川遺跡発掘調査概報』 余市町教育委員会 (1993年)
- 35 越田賢一郎 「鉄をとおして北の文化を考える」 『北の鉄文化シンポジウム』 岩手県立博物館 (1990年),
三浦正人 「北海道金属製品出土遺跡地名表」 『北海道考古学』 28 (1992年)
- 36 関口 明 「北海道式古墳と渡嶋蝦夷」 『古代文化』 37-7 (1985年),
遠藤 巖 「中世国家の東夷成敗権について」 『松前藩と松前』 9 (1976年) ほか。
- 37 藤本 強 『擦文文化』 (1982年), 石附喜三男 『アイヌ文化の源流』 (1986年),
宇田川洋 『アイヌ文化成立史』 (1988年), 横山英介 『擦文文化』 (1990年) ほか。
- 38 佐藤信行 「東北地方の後北式文化」 『東北考古学の諸問題』 (1976年),
阿部義平編 『蝦夷の墓』 国立歴史民俗博物館 (1994年) ほか。
- 39 山田秀三 『アイヌ語地名の研究』 1 (1982年)
- 40 小林 克 「農耕社会に南下した狩猟採集民」 『考古学ジャーナル』 341 (1991年) ほか。

g 大川遺跡出土の握石とその類例

はじめに

「人骨に共伴した特異な形態の石器」としたのは、畑 宏明氏（註1）であり、美々4遺跡出土の当該遺物の出土状況（写真30-10）や個々の特徴から表したものであるという。筆者が「握石^{にぎりいし}」としての認識を示し、「握石」と便宜上命名したのは、沢町遺跡（註2）においてである。写真30-1）～9）は沢町遺跡当該遺物の出土状況である。特に、GP-62（写真30-6）～8）の朱塗の腕輪との共伴状況に注目して頂きたい。この調査を誰が担当したとしても、この事例に遭遇すれば、「握石」と命名したに違いない。本稿では、良好な一括当該遺物が出土している大川遺跡と沢町遺跡の事例を中心に若干述べてみることにする。

大川遺跡出土の握石

大川遺跡からは、遺構及び遺構外合計47点の握石が出土している。そのうち遺構出土例は、縄文晩期前葉（大洞B・BC併行）の墓壇伴出のものが41点、続縄文・擦文の住居址や中世の壕状遺構の覆土から各1点、遺構外からは3点出土している。墓壇の伴出遺物としては、サメの歯・石鏃・玉・石斧他である。

出土した握石のうち、計測可能な38点について長軸×短軸×高さ及び重量の計測をし、石質については肉眼鑑定を行った。その結果、大川遺跡出土握石の平均値は、84mm（長軸）×64mm（短軸）×52mm（高さ）、365gであった。石質は褐鉄鉱が最も多く16点、次に安山岩9点、凝灰岩7点、頁岩3点、珪岩・砂岩・軽石は各1点という構成である。

縄文晩期の墓壇に伴出した握石は、壇底部の遺体に伴って出土している。遺体は残存状態が悪く、埋葬方法、出土位置等が不明確な墓壇も多いが、ほとんどは仰臥屈葬の遺体に伴出しているとみられる。握石の出土位置は、出土状況より類推すれば、手の位置か腰の横、胸の上、あるいは頭部近くから出土している。握石の平らな面を上にしての出土例は8点、平らな面を下にしての出土例が12点である。遺体に伴う握石の点数は、6基6遺体が各2点、19基20遺体が各1点である。このうち合葬墓は6基あるが、両遺体に握石が伴出するのはGP-951だけである。墓壇に伴う遺体の性別・年齢等については、札幌医科大学第2解剖学講座に同定していただいたが、遺体の残存状態が悪く詳細については不明であるものが多い。

沢町遺跡出土の握石

沢町遺跡からは遺構及び遺構外合計58点の握石が出土している。そのうち44点が、縄文晩期前葉（大洞B・BC併行）の墓壇に伴出し、残りは遺構外からの出土である。墓壇の伴出遺物としては、朱塗の腕輪・土器・石鏃・石斧・玉・敲石・凹石・砥石・石錘等がある。

出土した握石のうち、計測可能な45点について長軸×短軸×高さ及び重量の計測をし、石質についても肉眼鑑定を行った。その結果、沢町遺跡出土握石の平均値は75mm（長軸）×59mm（短軸）×46mm（高さ）、387gである。石質の構成は安山岩が最も多く25点、次に褐鉄鉱7点、頁岩5

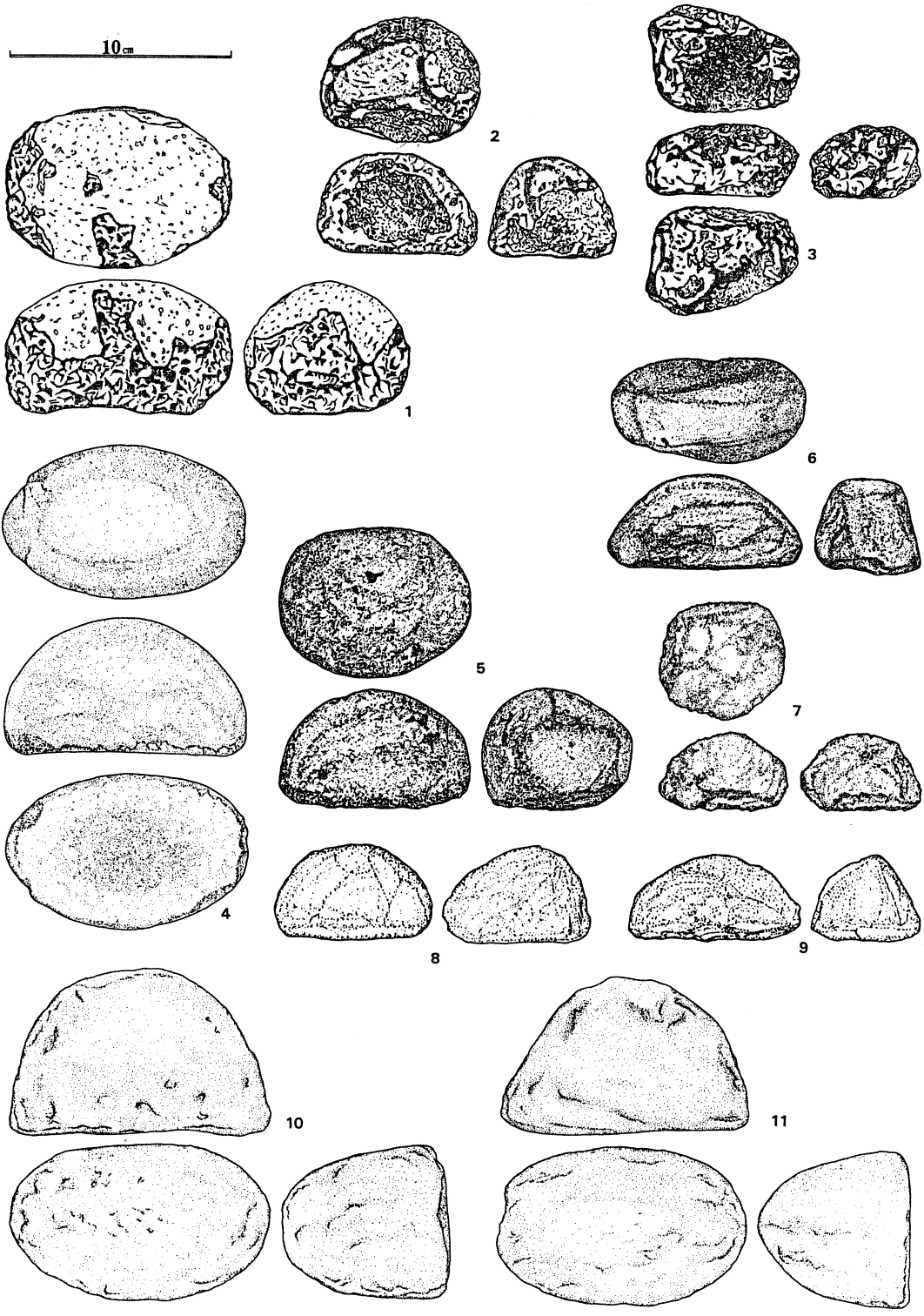


図50 各遺跡出土の握石 (1~3 大川遺跡, 4~7 沢町遺跡, 8~9 美々4遺跡,
10・11 厚別出土 東北大学考古学研究所蔵)

写真29 大川遺跡主要握石出土状況



◀ 1) GP-355 握石出土状況
(ヒスイの勾玉, サメの歯3点,
石鏃18点他伴出)



6) GP-594 握石出土状況
(3点並んでいる)



◀ 2) GP-445 検出状況
(2体合葬例, 方形配石)



◀ 3) GP-445 握石
出土状況 (サメの
歯34点, 覆土上部
より土版出土)



7) GP-887 握石出土状況 (玉11点伴出)



◀ 4) GP-476 握石
出土状況 (風化が
進んでいる)



8) GP-939 握石出土状況 (サメの歯12点伴出)



9) GP-951 握石出土状況 (合葬墓, 握石は風化)



1) GP-7検出状況（縄文晩期前葉）



2) GP-7握石出土状況（玉3点伴出）



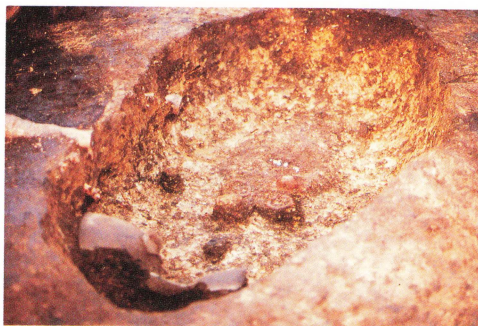
3) GP-42検出状況（石鏃1点伴出）



4) GP-48検出状況（握石2点伴出）



5) GP-60検出状況（握石2点伴出）



6) GP-62検出状況（縄文晩期前葉）



7) GP-62握石出土状況（朱塗腕輪2点伴出）



8) GP-62握石出土状況（握石2点，玉9点伴出）



9) GP-73検出状況（握石1点，玉24点伴出）



10) 美々4遺跡出土の握石
（写真提供 北海道埋蔵文化財センター）

写真30 握石出土状況（1）～9）沢町遺跡，10）美々4遺跡

表12 大川遺跡出土握石一覽

遺構名	No.	長軸 (mm)	短軸 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)	石質	伴出遺物 他
GP-144	2	102	77	44	360	砂質凝灰岩	玉13点, 石斧1点 勾玉1点, サメの歯3点, 石鏃18点
GP-355							
"							
GP-399	3	77	53	52	200	凝灰岩	玉1点, 石鏃6点
"	10	86	56	50	275	安山岩	
GP-406	6	75	60	70	565	褐鉄鉱	玉2点, 石鏃2点, 漆器(椀?)
GP-411							石鏃4点
GP-433	15	87	62	59	430	褐鉄鉱	玉1点, 石鏃3点
GP-445	85	103	76	62	730	安山岩	サメの歯34点, 異形土製品 図50-1
"							石鏃6点
GP-447	2	66	49	43	125	凝灰岩	
GP-470							石鏃1点
GP-474		68	44	51	200	珪岩	
GP-476	28	68	50	35	250	褐鉄鉱	石斧2点 図50-3
"	29	85	59	48	200	砂質凝灰岩	
GP-499	8	91	69	55	480	安山岩	石鏃1点, シラカバ様の樹皮 図50-2
GP-505							石鏃2点
GP-594	1	96	87	72	890	安山岩	玉13点, サメの歯8点
"	2	91	66	40	275	褐鉄鉱	
"	17	87	69	52	215	砂質凝灰岩	
GP-602		120	74	54	355	砂岩	
GP-700							褐鉄鉱
GP-859	1	109	66	49	475	褐鉄鉱	
"							痕跡のみ確認
GP-887	16	91	84	55	470	輝石安山岩	玉11点, 漆器1点, 完形土器1点
"	18	72	54	44	235	褐鉄鉱	石器1点
GP-900	1	98	66	56	465	安山岩	玉36点, サメの歯11点, 石棒1点
"							安山岩
GP-904	2	92	61	53	390	褐鉄鉱	
GP-906	23	83	71	49	395	褐鉄鉱	玉10点, サメの歯4点, 石鏃2点
"	24	98	72	56	445	褐鉄鉱	
GP-910	3	79	77	67	525	褐鉄鉱	完形土器1点
GP-913							褐鉄鉱塊1点
GP-917							完形注口土器1点
GP-920	14	79	67	47	275	褐鉄鉱	玉10点
GP-939	2	92	72	70	555	メノウ質頁岩	サメの歯12点
GP-951	4	83	57	59	410	褐鉄鉱	石鏃1点, 石器1点, 痕跡1点
"	5	88	66	48	340	褐鉄鉱	
GP-956							凝灰岩
GP-957	1	64	58	44	115	砂質凝灰岩	
"							痕跡のみ確認
JH-11	16	96	81	62	520	褐鉄鉱	覆土
SH-19		80	57	51	175	軽石	"
MO-10		84	61	47	345	褐鉄鉱	"
Grid	層	長軸 (mm)	短軸 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)	石質	備 考
M 46	II	90	74	59	585	メノウ質頁岩	
O 47	III	70	64	40	210	メノウ質頁岩	
R 46	III	97	60	52	455	安山岩	
大川遺跡出土握石							〔総計 47点〕

表13 沢町遺跡出土握石一覧

遺構名	No.	長軸 (mm)	短軸 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)	石質	伴出遺物 他																																																
GP-7	5	88	83	64	700	輝石安山岩	玉3点, スクレイパー1点 勾玉1点																																																
GP-14		78	53	39	190	安山岩																																																	
"		55	44	34	100	褐鉄鉱																																																	
GP-17	2	79	64	63	440	頁岩	詳細不明 玉1点																																																
GP-25								78	60	49	440	無斑晶質安山岩	" 石鏃1点																																										
GP-26														82	72	53	450	珪質頁岩	石鏃1点																																				
GP-31																				76	71	51	380	メノウ	玉1点																														
GP-39																										91	71	50	420	黒曜石	石鏃1点																								
GP-42																																82	73	62	540	輝石安山岩	" 石鏃1点																		
GP-48																																						57	39	27	90	安山岩	玉2.6点												
GP-51																																												65	66	38	480	輝石安山岩	玉3点						
GP-57																																																		72	73	47	250	凝灰質砂岩	" 玉3点
GP-58																																																							
GP-60	390	褐鉄鉱	詳細不明	玉2.3点, 石鏃1点																																																			
GP-62					70	53	40	345	褐鉄鉱	石斧5点																																													
GP-64											57	56	57	230	頁岩	玉2.4点, 石鏃1点																																							
GP-70																	109	71	63	760	変朽安山岩	" 石鏃1点																																	
GP-72																							61	51	36	330	安山岩	" 石鏃1点																											
GP-73																													88	81	57	445	凝灰岩	" 玉1点																					
GP-75																																			51	45	25	110	安山岩	" 玉1点															
GP-76																																									3	220	褐鉄鉱	" 石斧1点											
GP-77																																													88	47	43	290	石英	" 石鏃1点					
GP-78																																																			310	褐鉄鉱	" 石鏃2点		
GP-80	83	63	56	470																																																		輝石安山岩	玉9点, 石鏃2点
GP-87					98	54	51	480	石英	" 玉1点, 石鏃2点																																													
GP-81											76	56	43	380	輝石安山岩	" 詳細不明																																							
GP-86																	70	64	55	450	メノウ質頁岩	" 玉1点, 石鏃2点																																	
GP-87																							87	52	55	350	安山岩	" 石鏃1点, 石斧1点																											
GP-95																													95	58	60	640	石英質安山岩	" 石鏃2点, スクレイパー1点																					
GP-100																																			130	79	80	1120	輝石安山岩	" 詳細不明															
GP-121																																									43	45	15	100											
GP-132																																													72	60	45	260	輝石安山岩	" 詳細不明					
GP-149																																																			72	60	45		
GP-160	72	60	45	260																																																		輝石安山岩	" 石鏃1点
GP-162					72	60	45	260	輝石安山岩	" 石鏃1点																																													

Grid	層	長軸 (mm)	短軸 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)	石質	備考
G 28	I	42	38	21	160	凝灰質砂岩	詳細不明
H 35	I	68	51	38	370	輝石安山岩	
J 32	I	64	61	41	180	頁岩	
D 21	II	72	63	59	440	角閃石安山岩	
F 22	II	61	60	40	180	角閃石安山岩	
F 26	II	68	58	40	150	褐鉄鉱	
F 30	II	81	62	38	280	輝石安山岩	
G 28	II	72	61	47	265	輝石安山岩	
H 34	II						
I 36	II	62	40	39	150	輝石安山岩	
J 34	II						
"	II	82	72	55	490	角閃石安山岩	
B 調査	"						
"	"						

沢町遺跡出土握石						〔総計 58点〕
----------	--	--	--	--	--	----------

点、凝灰岩3点、石英3点、珪岩2点、メノウ、黒曜石が各1点である。

握石は墓壙底部の遺体に伴って出土しているが、遺体は残存状態が悪く、埋葬方法・出土位置等について明確な墓壙は少ない。出土位置が確認できた墓壙では、手の位置か腰の横、胸の上などから出土している。出土状態は、平らな面を上にしての出土例が8点、平らな面を下にしての出土例が9点である。遺体に伴う握石の点数は、24基が各1点、10基が各2点である。沢町遺跡の墓壙は合葬例が少ない。墓壙に伴う遺体の性別・年齢等については、遺体の残存状態が悪く詳細については不明である。

まとめ

握石の使用された時期は、これまでのところ縄文時代晩期前葉（大洞B・BC相当）に限定されるようである。地域的にも、道央部に限定されているようであるが、類例が少なく、判断については今後委ねたい。

握石のすべてが遺体の手に握らされていたとは考えられないが、手に握らされていたとみられる確たる事例が少なからず存在することはまちがいない。握石の類例については、多くの情報を入手していないが、東北大学文学部考古学研究所蔵の比較的大型の2点の握石（図50-10・11）が須藤 隆教授の御好意で実測を許され、掲載させて頂いた。当該資料は、北海道日高国厚別（門別町）出土と記されており、喜田貞吉博士の時代に所蔵された資料のようである。詳しい経緯について明らかではないが数少ない類例として重要である。したがって、握石に関する類例は、これまでに判明したところでは、4遺跡、合計で概ね120点ということになる。断面がD字状で、前述したようにさまざまな石質が認められるが、美々4遺跡でも注意されたように、「多くは、比較的比重の大きな石を選択しているようである」ということは、概ね（註3）踏襲されている。

縄文後期～晩期における立石・配石、そして、本稿でとり上げた握石、恵山期の南川型葬法（註4）にみられるような伴出礫、続縄文期後半～擦文期初頭にみられるウサクマイ型葬法の墓壙の遺体に挟在する耳石（註5）とも称せられ、両脇に置かれた礫（2点・4点・6点の例あり）等、時期は異なるけれども大川遺跡をはじめとする他の多くの遺跡から、礫によって、石によって、印象づけられる他界観の実態の一面を知ることができる。握石については今後の資料の増加に注視していきたい。

（青木・宮）

註

註1 畑 宏明 1977 「美々4遺跡 石器」 『美沢川流域の遺跡群』I 北海道教育委員会

註2 熊崎農夫・鎌田 望ほか 1989 『沢町遺跡』 余市町教育委員会

註3 表12にもみられるように軽石（SH-19覆土出土）が1点のみあるが、これについては、握石と考えない方が合理的かもしれない。しかし、形態は、そのものといえる。

註4 加藤邦雄 1982 「道南・道央地方の墳墓」 『縄文文化の研究』6 雄山閣

註5 菊池徹夫 1975 『鳥柵舞』 雄山閣

h 大川遺跡検出恵山期の遺構について

当遺跡では過去6年間に恵山期の遺構を多数検出した。すでに調査されている他の当該期の遺跡と比べても調査面積及び検出遺構数は最大級であると言える。そこで調査予定区を全掘した訳ではないが本報告の前に恵山期の遺構について若干述べてみたい。

はじめに、今回取り上げた住居・墓壇の選択の基準、土器の分類等について記しておきたい。

遺構は伴出遺物等から恵山期としてよいものに限定した。よって、遺物の伴っていない遺構や残存状態の良くないもの、あるいは、他の時期と明確に区別することが困難な場合等は、これを除いた。その為、除いた中には当該期の遺構も少なからず含まれている。

本稿では恵山式土器の甕を基準に以下のように4分類した。**I類** 頸部に無文帯を有し、肩部の張り出し以下に変型工字文を有するもの。また、口縁部内側に沈線文が施されることも大きな特徴である。類例は、下添山遺跡出土土器（註1）他にみられる。**II類** 頸部に無文帯を有し直立し、肩を強く張り出すもの。類例は、アヨロ遺跡（註2）II群1類・2類aである。**III類** 直立ないし内傾する頸部を有し、肩部は丸みを帯びて張り出すもの。II類までの無文帯に縄文が磨り消されずに残る。類例は、南川遺跡（註3）III群土器である。**IV類** 胴中位が丸味を帯びて大きく張るもの。沈線で囲んだ横走帯縄文等が施される。類例は、南川遺跡IV群土器である。IV類には基本的に恵山式土器でありながら、吊耳状把手をもつものや口縁部に刻目のある貼付紐をめぐらすなど後北式的土器をも含んでいる。類例は、大黒島遺跡（註4）出土土器等である。

さてこれまでに検出された大川遺跡の恵山期の遺構について述べることにする。住居はII類期とIII類期のもののみであるが、当遺跡における港大照寺期の大型住居址と比較すると、住居内床面積は、約1/2と小さい。また、III類期には直径6m前後のもの、3m前後の小型のものがある。ほぼ同時期と思われる旧豊平河畔遺跡検出住居址（註5）も直径7m前後のもの、3m前後の小型のものがある。しかし、他の恵山期の遺跡ではIII類段階に舌状部を有するものが存在するのに対し、当遺跡ではそれが確認されなかった。墓壇はI～IV類期のものが検出された。I～III類までの段階は概ね壇径（口径）が110cm前後、IV類段階では150cm前後が平均である。このIV類段階では規模が大きくなり、さらに合葬例もみられるようになる。また、恵山期を通じて一般的であったとみられる頭位方向は東～南東であり、平面プランは楕円形と円形のものである。

次に、これらの遺構の分布について述べるが、まず当遺跡の地形上の特質について記しておきたい。調査区の中央部には氾濫原堆積物としての礫層が幅20mにわたって北西から南東方向に伸びている（註6）。この厚い礫層にあたる部分は大川砂丘の頂上部分にあたるため、頂上の東側と西側になだらかな斜面を形成している。遺構の分布は礫層を避けるようにして東側と西側にみられる。この氾濫原堆積物を境にして、それぞれ東地区、西地区（図3）と称することにする。

I・II類期において、住居は西地区の礫層寄りに分布し墓壇は両地区に点在する。まれには礫層中に存在するものもある。III類期は西地区に住居、東地区に墓壇がそれぞれ集中する。住居域

表14 大川遺跡検出恵山期住居址一覧

住居址No.	グリッド	長軸×短軸 (cm)	深さ (cm)	平面プラン	柱穴	伴出土器	備 考
JH-1	K38-39-40, L38-39-40	(710) × (580)	100	不整楕円形	[1]	Ⅲ	ベンチ状構造, 中央より北に地床炉 (190×170cm)
JH-3	Q41	265 × (220)	30	楕円形?	なし	Ⅲ	中央部に土器等の集中, 北側半分を攪乱により消失
JH-5 a	I40, J40	343 × 340	57	円形	10	Ⅲ?	中央部に地床炉 (70×40cm), 地床炉の北にフレークの集中
JH-5 b	I40-41, J40-41	390 × 360	78	ほぼ円形	3	Ⅲ?	中央部に地床炉 (60×40cm), 南壁際に炭化材出土
JH-6	Q39-40, R39-40	450 × (370)	30	長楕円形?	なし	Ⅲ?	中央部やや東に地床炉 (40×20cm), 北側半分を別遺構により消失
JH-7	O39-40, P39-40	(570) × 470	36	#	10	Ⅱ	床面より完形の壺出土
JH-8	J40-41, K40-41	355 × 340	27	円形	[5]	Ⅲ	中央部に地床炉 (80×70cm), 中央部にフレークの集中
JH-9	R41, S40-41	640 × (550)	71	楕円形	[5]	Ⅲ?	南側半分を攪乱により消失
JH-12	Q40, R39-40	(580) × (500)	20	不整楕円形?	[5]	Ⅱ or Ⅲ	北側をJH-6により欠いている
JH-13	H39, I38-39	(480) × (380)	66	長楕円形?	[2]	Ⅲ?	南側の2/3を攪乱により消失
JH-14	Q41-42-43, R41-42-43	585 × 575	117	円形	[6]	Ⅲ	壁は緩やかに立ち上がる, 南壁際に幅55cmほどのベンチ状構造あり
JH-15	K41-42, L41-42, M41-42	660 × 580	121	楕円形	なし	Ⅱ	西壁はベンチ状構造 (70cm~1m), そのすぐ内側に, 長さ3m, 幅60cmの掘り込みあり
JH-17	K47, L47	340 × 336	65	円形	3	Ⅲ	中央部に地床炉, 床面に黒塚石によるフレーク・チップのスポット 8ヶ所あり

※ () は推定, 深さは確認面からの数値を示し, 柱穴における [] は現状の柱穴数を示した

表15 大川遺跡検出恵山期墓墳一覧

墓墳No.	グリッド	長軸×短軸 (cm)	深さ (cm)	頭位	平面プラン	埋葬方法	伴出土器	備 考
GP-17	N29	(180) × 178	88	東	円形?	側臥屈葬	Ⅲ	南側半分を攪乱により消失
GP-20	T26-27, U26-27	(210) × (210)	100	南西?	円形?	屈葬?	Ⅳ	頭位に礎, 足部付近に石斧・石鏃, 墳底部及び覆土中程にベンガラ散布, 中程に完形土器
GP-23	N29	(92) × (73)	53	不明	ほぼ円形?	不明	Ⅲ	墳底部に土器3個体・石斧2点
GP-24	N29	(80) × (60)	59	不明	不明	不明	Ⅲ or Ⅳ	南側半分を攪乱により消失, 墳底部より江別太式土器の破片出土
GP-27	Q29	96 × (65)	26	南東?	楕円形	不明	Ⅲ	南東側に完形土器
GP-28	Q29	113 × (100)	13	南東?	ほぼ円形?	屈葬?	Ⅲ	南東側に完形土器及び有孔石製品1点
GP-37	T27-28	140 × (140)	61	不明	円形?	不明	恵山	北西側に礎・南側に土器, 北東半分を消失
GP-42	R29	108 × 94	28	南東	ほぼ円形	側臥屈葬	Ⅱ	南側に土器, 墳口部中央に, メノウ剥片集中
GP-47	S27	116 × (108)	44	不明	ほぼ円形	不明	Ⅲ	墳底部及び覆土中程にベンガラ散布, 西側半分を消失
GP-53	S28	(45) × (40)	11	不明	ほぼ円形?	不明	Ⅲ	小型壺出土, 上面削平
GP-56	S28	120 × 100	80	南東?	楕円形	不明	*	墳底部にベンガラ散布, 墳口部付近出土の字鉄式併行の土器が伴うと思われる
GP-57	S28	120 × 115	100	南東?	ほぼ円形	屈葬?	Ⅲ	頭蓋の付近に完形土器
GP-69	Q27	(105) × 89	17	不明	楕円形	不明	Ⅲ	南側から石斧・石鏃出土
GP-72	S26-27	105 × 100	85	南	円形	仰臥屈葬	Ⅲ	東側に大型土器, 北側に大型石斧・石鏃等多数出土
GP-75	T26	126 × 110	19	不明	不整楕円形	不明	Ⅲ	中央と東側に土器3個体, 北側に魚形石器・靴形石器
GP-78	S28	102 × 81	86	東	楕円形	不明	Ⅲ	北東側に完形土器, 覆土中よりサメの歯出土
GP-79	S28	41 × 32	16	不明	楕円形	不明	Ⅲ	小型壺等4個体が, 合口の状態で2組出土
GP-82	S29	170 × 168	71	南東?	円形?	不明	*	南東側に字鉄式土器・サメの歯6点, 中央にコハク平玉2000点以上出土
GP-84	S34, T34	117 × 77	14	北西?	楕円形	不明	恵山	コハク平玉2点出土, 東側に径5cm深さ4.5cmの小ピット検出
GP-85	S28	不明	62	北東	円形?	屈葬?	Ⅲ	墳口部に半円形の配石と完形土器, 墳底部に滑石製有孔石製品1点, 掘り込みの確認できず
GP-87	R29, S29	84 × 80	29	北東?	ほぼ円形	屈葬?	Ⅲ	東側に完形土器
GP-89	R29	86 × 80	43	南東?	ほぼ円形	不明	Ⅲ	南東側に完形の小型土器, 中央に有孔石製品1点
GP-90	Q27-28	(60) × 55	39	不明	円形	不明	Ⅲ	墳底部及び覆土中に数回ベンガラを散布, 墳口部に土器
GP-91	Q28	(133) × 102	42	南東	楕円形?	屈葬?	Ⅰ	頭蓋付近に完形の小型土器
GP-100	O28	128 × 118	113	東	ほぼ円形	仰臥屈葬	Ⅲ	頭蓋付近に土器, 胸部と思われる箇所に滑石製有孔石製品, 墳口部から多数の土器出土
GP-105	R29, S29	126 × 114	99	南東	ほぼ円形	側臥屈葬?	Ⅲ	頭蓋付近に完形土器
GP-107	T26	(105) × 88	88	南東	楕円形	側臥屈葬	Ⅲ	頭蓋付近に完形土器
GP-109	R28	118 × 113	88	南東?	ほぼ円形	不明	Ⅲ	南側に完形土器, 東側から滑石製有孔石製品13点とヒスイの磨蝋1点が連なった状態で出土
GP-116	Q28, R28	(80) × 78	70	南東?	円形?	屈葬?	Ⅲ	南東側に完形土器, 南側に滑石製有孔石製品2点出土, 墳口部に石鏃多数
GP-117	S27	65 × 55	12	南東?	ほぼ円形	屈葬?	Ⅲ	東側に礎及び完形土器
GP-118	S27	92 × 85	82	東?	ほぼ円形	屈葬?	Ⅲ	東側に完形土器, 小型の土器内に半分ほど割片が入っていた
GP-120	R27-28	115 × 111	54	東	円形	側臥屈葬	Ⅲ	遺体の北側に完形土器, 他に有孔石製品等出土
GP-123	R28	128 × 109	67	南東?	楕円形	屈葬?	Ⅲ	東側に完形土器, 墳口部に石鏃多数
GP-125	N29, O29	112 × 106	74	東	円形	側臥屈葬	Ⅲ	頭蓋付近に土器, 他に骨角器(針入)・熊の土製品(?)出土
GP-126	N28	96 × (95)	29	不明	円形?	不明	Ⅲ	西側に土製勾玉1点, 南東側からコハク玉1点出土
GP-131	R27	210 × 200	101	東?	ほぼ円形	屈葬?	Ⅳ	北東側に完形土器2個体, 1体分の頭蓋のみの検出だが, 合葬の可能性もあり
GP-132	N28, O28	50 × 45	32	不明	ほぼ円形	不明	Ⅲ	墳口部に礎4個, その下より土器片多数出土

墓塚No	グリッド	長軸×短軸(cm)	深さ(cm)	頭位	平面プラン	埋葬方法	伴出土器	備	考
GP-133	T29	119 × 118	31	東?	円形	不明	Ⅲ		南東側に完形土器
GP-141	O34-35	135 × (125)	43	不明	円形	屈葬?	Ⅲ		墳底部の一部に炭化物範囲あり
GP-145	K41	110 × 101	43	不明	不整形円形	不明	恵山		覆土上面～中に多数の礎出土
GP-148	K41-42,L41-42	159 × (142)	71	不明	楕円形	不明	Ⅱ		中央部に大よりの礎集中、西側を擾乱により消失
GP-150	T35	81 × 75	27	南東?	ほぼ円形	不明	Ⅱ		南側に完形土器
GP-155	L41	132 × 72	39	南東?	長楕円形	不明	Ⅳ		南側に完形土器
GP-163	L41	(150) × 110	47	南?	長楕円形	不明	Ⅳ		南側に後北系の影響を受けたⅣ類土器、中央部に垂飾 覆土中に一括土器
GP-175	K36	125 × 108	40	東	楕円形	屈葬	I・II		沓原の礎層中に振られている。南側に土器片集中
GP-179	O35,P35	155 × 136	63	東	楕円形	側臥屈葬	Ⅳ		頭蓋付近に完形土器、脛部付近に魚形石器2点、不明鉄製品
GP-195	O35,P35	113 × (110)	30	東?	円形?	側臥屈葬?	Ⅲ		頭蓋付近に完形土器
GP-200	Q34	(138) × 130	38	東	ほぼ円形	側臥屈葬?	Ⅳ		頭蓋付近に土器、北側及び西側に石斧・石鏃が集中
GP-224	R34	(60) × 58	3	不明	円形?	不明	Ⅱ		南東側半分は擾乱により消失、上面も削平
GP-225	P35	47 × 43	44	不明	円形?	不明	恵山		墳口部中央に土器片剥片集中、南側は擾乱により消失
GP-231	T34-35	95 × 76	27	不明	楕円形	不明	恵山		中央部付近に石鏃集中
GP-238	T34-35	117 × 94	77	不明	不整形楕円形	不明	恵山		覆土中に大きめの土器片・石斧
GP-243	N35,O35	164 × 157	53	東	ほぼ円形	a仰臥屈葬b側臥屈葬	Ⅳ		2体合葬、a体頭蓋付近に完形土器、墳口部にベンガラ散布、ドリル・コハク出土
GP-262	H40-41	162 × 117	77	東	不整形楕円形	屈葬	Ⅳ		北側に完形土器
GP-271	O34	82 × (80)	21	不明	円形?	不明	Ⅳ		東側に一括土器
GP-348	H47	121 × 110	54	南東	楕円形	屈葬?	Ⅳ		頭蓋付近に完形土器
GP-359	G47,H47	149 × (110)	19	南東?	楕円形	不明	Ⅳ		南東側に完形土器、他に魚形石器2点・不明鉄製品等出土
GP-370	G44,H44	115 × 105	22	東	円形	仰臥屈葬?	Ⅳ		頭蓋付近に完形土器、遺体の脇に矢柄の痕跡と、先端が足の方向にそった石鏃8点出土
GP-372	H44	162 × (145)	56	不明	楕円形	不明	Ⅳ		東側に完形土器、遺体の脇に矢柄の痕跡と、先端が足の方向にそった石鏃数十点出土
GP-373	H44	114 × 110	30	不明	円形	不明	Ⅳ・*		南東側に完形の土器、北西側にアスファルトにて補修した痕のある江別太式土器出土
GP-375	M43,N43	137 × 114	29	南東?	楕円形	不明	Ⅳ		南側から4個体の土器が「入れ籠」状になって出土、東北地方の影響を受けた土器を伴う
GP-378	N42	(115) × 95	18	南東?	不整形楕円形	不明	Ⅳ		南側に一括土器
GP-390	N42,O42	145 × 122	80	南東	楕円形	不明	Ⅳ		頭蓋付近に完形土器、他に魚形石器1点、サメの歯1点出土
GP-400	N43	150 × 150	109	東?	円形	不明	Ⅳ		墳口部に厚い焼土層検出、覆土中央中央に完形土器3個体、墳底部東側に完形土器2個体
GP-422	N43-44	173 × 143	55	不明	楕円形	不明	Ⅳ		中央部及び北側に完形土器、墳口部付近に焼土
GP-425	J42,K42	(112) × 98	25	不明	楕円形	不明	Ⅲ・*		東側にⅢ類土器と江別太式土器の完形小型壺各1点、覆土上にコハク散在
GP-448	K43-44	128 × (110)	75	不明	楕円形	不明	Ⅳ		中央部に泥岩製と思われる勾玉出土
GP-454	J44	139 × (130)	34	南東	ほぼ円形	不明	Ⅳ		東側に完形土器2個体、中央部にコハクの垂飾
GP-457	K44	156 × 139	84	東?	楕円形	不明	Ⅳ		東側に後北系の影響を受けたⅣ類土器、覆土上に多数の礎
GP-489	M44,N44	128 × 119	64	南東?	円形	不明	Ⅳ		南東側に完形土器、中央部に有孔石製品
GP-518	I45	171 × 160	51	南東	楕円形	側臥屈葬	Ⅳ		頭蓋付近に完形土器
GP-546	J43,K43	178 × 139	55	北東	楕円形	仰臥屈葬?	Ⅳ		頭蓋付近に完形土器と板状礎、足部付近に礎(南川型葬法)、他にコハク平玉出土
GP-548	K44-45	197 × 170	37	南東	楕円形	仰臥屈葬	Ⅳ		東側に完形土器と石鏃集中、腰部付近に礎(南川型葬法)
GP-588	O51,N51	(145) × 144	51	不明	円形	不明	Ⅳ		北西側と東側壁に袋状ビット
GP-590	O49	151 × 138	96	不明	円形	不明	Ⅳ		東側に完形土器、北側・西側に石鏃集中(計70点)
GP-593	O48	160 × 145	117	南東	ほぼ円形	屈葬	Ⅳ		南東側に完形土器、北側に石鏃集中
GP-617	M48	67 × 64	28	不明	円形	不明	恵山		
GP-620	P53,Q53	(260) × 260	74	不明	円形	合葬	Ⅳ		本遺跡最大級の墓、南側に完形土器、他に石鏃320点、管玉
GP-623	O51,P51	(185) × 165	99	西	円形	不明	Ⅳ		東側に完形土器、北東側に4個体の土器片集中。他に石鏃150本
GP-638	Q52	(120) × (120)	36	不明	不明	不明	恵山		石斧・石鏃・鏡形石器出土、西側半分を擾乱により消失、上面は別途構に切られている
GP-650	O53,P53	(115) × 114	35	不明	円形	不明	恵山		中央部に砂質凝灰岩の範囲あり
GP-668	N48,O48	156 × 125	85	不明	不整形楕円形?	不明	Ⅳ		西側に完形土器、他にフレークが並べられた状態で出土
GP-676	M47-48	116 × 104	57	不明	円形	不明	Ⅱ・Ⅲ		中央部にミニチュア土器3点、4ヶ所の袋状ビットを確認
GP-686	M49,N49	106 × 78	60	不明	楕円形	不明	Ⅱ		南側に完形土器
GP-711	P52	80 × 76	42	不明	不整形円形	不明	Ⅳ		中央部に完形土器2点
GP-720	P52	(190) × (190)	57	不明	円形?	不明	Ⅳ		中央部に完形土器、墳底部近くに多量の炭混じりの層あり
GP-729	P51	125 × 109	26	不明	楕円形	不明	Ⅳ		南側に完形土器
GP-731	P51	121 × 90	24	不明	楕円形	不明	Ⅳ		南側に完形土器
GP-847	K48	83 × 62	13	不明	楕円形?	不明	恵山		北側～西側にかけて716点のコハク出土、上面消失のため墓塚の数値は現状を示す
GP-853	L49	(135) × (122)	83	東	円形	不明	Ⅱ		頭蓋付近に完形土器
GP-854	L45-46	(120) × (112)	69	南	円形	不明	Ⅳ・*		南側にⅣ類土器、西側に江別太式土器、墳口部中央にⅣ類土器、他に石斧・石鏃出土
GP-856	M45-46	(120) × 118	58	東	円形	側臥屈葬?	Ⅳ		南東側に完形土器、墳口部北側に完形土器、北側・南東側壁に袋状ビット
GP-861	L48,M48	111 × 74	15	不明	楕円形	不明	恵山		南側にコハク平玉36点、他に石斧・つまみ付ナイフ等出土
GP-916	K46,L46	157 × 150	50	南	円形	不明	Ⅳ・*		墳底部の3箇所計4個体のⅣ類土器、墳口部にⅣ類土器と後北B式土器各1点、他石斧等出土
GP-941	M46,N46	166 × 154	76	不明	円形	不明	Ⅳ		南東側に完形土器、北側に石鏃208点、他に石斧等出土
GP-944	L48	(166) × 127	45	不明	楕円形	不明	Ⅳ		北側・南側・中央に土器集中、後北系の影響を受けたⅣ類土器1個体
GP-945	L47-48	147 × 137	62	不明	円形	不明	Ⅳ		南側に完形土器、北側に異形土器
GP-948	M45,N45	(182) × (173)	67	東	円形?	側臥屈葬	Ⅳ		頭蓋付近に完形土器、墳底部に直径20cmほどの4ビットを検出

() は推定、深さは確認面からの数値を示した。*は恵山式土器以外の土器を表し、「恵山」としたものは、恵山墓ではあるが破片資料のため分類不可能のものを表す。

と墓域の違いが明瞭である。Ⅳ類期は墓墳が西地区に集中するが、住居は検出されていない。墓墳群西側の調査区外に存在する可能性もある。

以上の遺構分布によると、礫層を掘り下げて住居や墓を構築することがいかに困難であるかということがあげられる。礫層範囲には遺構が非常に少ない。また、砂丘の頂上部分により明瞭な区分が存在したことは重要であろう。

最後に、この分析を通じて明確になったことを以下に述べる。

第一に、時期ごとの集落の変遷についてである。縄文晩期には、主に西地区に存在したものが続縄文期初頭からⅡ類期までは、砂丘の頂上部周辺への移動がある。Ⅲ類期までこの場に存続するがⅣ類期になると再び西地区へ移り、かつてⅢ類期の住居が存在した付近を墓域とした。南川遺跡においても先行する時期の住居域を後に墓域とすることが知られている。その後、後北期・北大期には東地区の海側へと移動するようである。

第二に、当遺跡の恵山期集落の性格についてである。当遺跡は、日本海側に面した比較的大きな河川の河口部に位置し、恵山期の集落としては拠点的存在であったと考えられる。また、北海道外からの移入品が少なからず出土しており、他地域との文化接触の機会もあったとしてよいであろう。したがって、当遺跡は日本海側の主要河川にいくつか存在したとみられる拠点集落のうちの代表的な例といえよう。移入品の例としては、東北地方の土器や、その影響下にあったものが出土している。その他の出土遺物に関しても、量のみならず、質的にも他遺跡を圧倒している。また、恵山墓において江別太式土器や後北B式土器が共伴するものが4例ある。恵山式土器と後北系の土器の共伴例は旧豊平河畔遺跡1号住居址等（註7）が知られているが、本例によって追認された。

以上、これまでに調査された大川遺跡の恵山期における遺構について若干述べてきたが、3・4年後には、現道路下（図1）及び1990年度調査区の東側を調査する予定である。更に、多数の恵山期の墓墳が検出され、貴重な遺物の出土が期待される場所である。（青野・宮）

註

- 1 吉崎昌一 1982 「下添山遺跡」 『北海道における農耕の起源（予報）、文部省科学研究費による一』
- 2 高橋正勝・宮塚義人他 1980 『アヨロー恵山文化の墓』 白老町教育委員会
- 3 高橋和樹他 1983 『瀬棚南川遺跡』 瀬棚町教育委員会
- 4 大場利夫他 1962 「大黒島遺跡」 『室蘭遺跡』
- 5 高橋正勝・園部真幸 1986 『旧豊平河畔 V』 江別市教育委員会
- 6 松田義章 1992 「余市大川遺跡における氾濫原堆積物—その堆積学的検討—」 『1991年度大川遺跡発掘調査概報』 余市町教育委員会
- 7 直井孝一 1981 「旧豊平河畔遺跡」 『元江別遺跡群』 江別市教育委員会
高橋正勝他 1979 『江別太遺跡』 江別市教育委員会

i 大川遺跡出土の運上家・漁場関連資料について

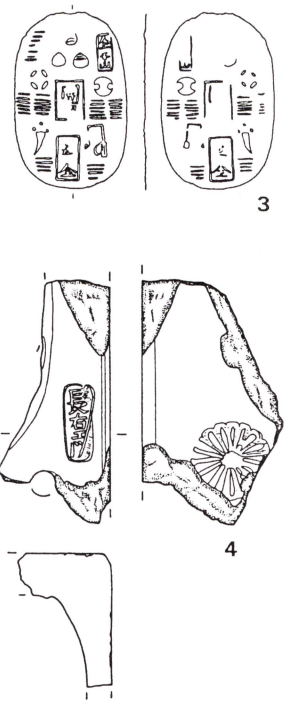
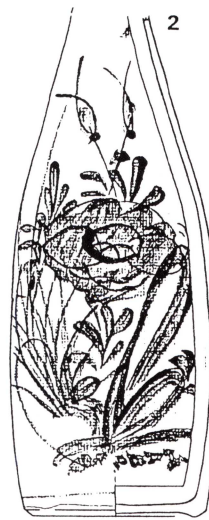
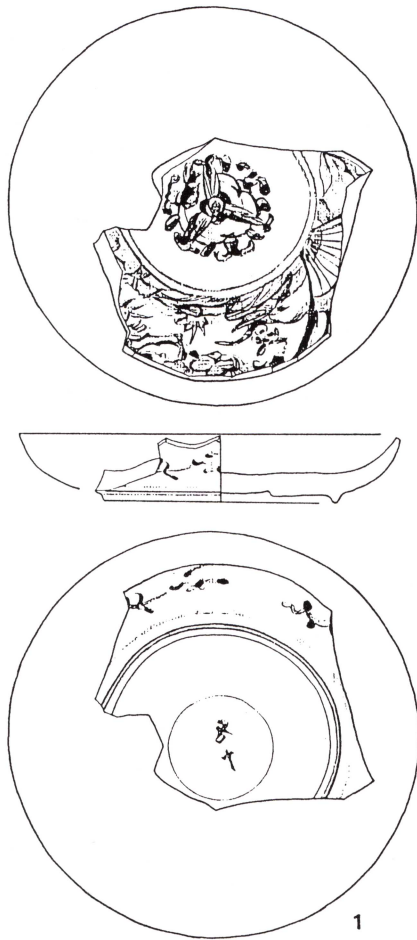
大川遺跡6ヶ年の発掘調査によって近世及び近代遺構(図6)の実態も概ね見えてきた。290にも及ぶ大きな礎石、50ヶ所の石組炉をはじめとする多くの遺構は、余市のそれぞれの時代を蔭で支えてきた貴重な文化遺産である。本稿では、近世における運上家及び近代における漁場関連施設に伴う出土遺物のうち、特に文書とのかかわりから重要とみられる、いくつかの資料について紹介し、若干述べてみたい。図51-1は、18c前葉~中葉に焼かれたとみられる肥前の染付皿で高級品であるために、われた時に焼継に出され、鉛ガラスで接合後、返って来たものであろう。裏面に卒の朱書きがなされていることで、焼継の依頼主が特定できる。当時、焼継師は、江差や松前にのみ存在していたようであり、余市のもも、依頼主がわからなくならないように朱書きがなされ、修理に出されたものなのであろう。2は、19c後半に焼かれたとみられる染付の銚子である。底には企の墨書が残されている。3は、企の「打出し」がみられる小判型の上棟銭^{むねあげせん}であり、運上家関連施設の新築の際にまかれたものと考えられる。景気の良いかけ声が伝わってくるかのようなようである。実測図左が表、右が裏である。真中の断面図により「打出し」によって作られていることがわかる。企をはじめ、蔵の鍵や分銅といった商家に相応しいモチーフが使用されていることで、生業守護と商売繁昌の願いが込められているに違いない。4については後述する。図52は、P45Grid(図6)出土の企と刻まれている石碑である。後述するが大正の末頃に建てられたものと考えられる。図53の1~4も企の墨書入りの磁器であり、1によって企が扇谷家の屋印であることが明確となった。1~4は、明治から大正にかけての遺物のようである。次に屋印とその周辺について述べることにする。

卒(マタジユウ)

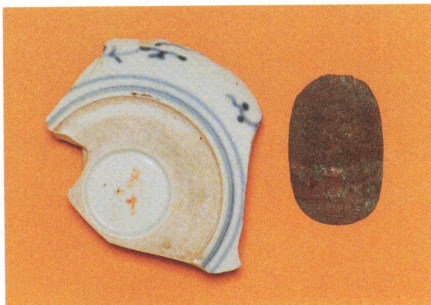
近江の日枝村(現在滋賀県犬上郡豊郷町)出身の柏屋 藤野喜兵衛が寛政12(1800)年に起業した時に用いた屋印である。柏屋は既に、近江商人の屋号として両浜組家名控などの文書にも登場しているが、そこにみられる宝暦11(1761)年時点の柏屋は、大橋五兵衛といい、屋印も^チ (チョウヤ)である。「藤野家履歴書」所収の「藤野家略歴」によると、近江出身の六代 藤野喜兵衛は、松前に渡って、天明元(1781)年から商売見習いのため呉服店へ奉公に入り、その後、寛政12(1800)年、松前の枝ヶ崎町に商店を設け、屋号を柏屋、目標を卒^{めじろし}と称して東西蝦夷地産物運輸販売の業を開いたとの記述があり、この段で彼が、近江出身の有力商人、柏屋となるのである。

さて、その藤野喜兵衛が次に着目したのは、場所請負であった。文化3(1806)年、松前藩に、上下ヨイチ場所請負を申し出、許可されたのである。以来記録上、年季の回数は不明ながら10年の請負の後、更に文化13(1816)年から7ヶ年季の請負を経て、続く文政6(1823)年から7ヶ年季の請負途中の文政8(1825)年まで、20年に亘って上下ヨイチの請負を続け、これと前後してソウヤ・クナシリ・エトロフなど、主要な場所を請負うこととなる。

企(ヤマジョウ)



2) 長右衛門銘の硯炉, 破片



1) 左 卒の朱書きがみられる焼継磁器
右 全の打出しが見られる上棟銭



3) 長右衛門銘のある硯炉の同一個体片

図 51・写真 31 大川遺跡出土運上家・漁場関連資料

上下ヨイチ場所請負人 竹屋長七、後の竹屋長左衛門の用いた屋印である。彼は明和2（1765）年、秋田の由利郡塩越村（現在象潟町）^{きさかた}に生まれ、当初長七を名乗っていた。享和から文化の初め（1801～1804）頃松前に渡り、文政元（1818）年から7ヶ年季に亘ってアツケシ場所を請け負い、一方、文化12（1815）年から畑屋が請負っていたアブタ場所も事実上共同経営していたようである。その竹屋が上下ヨイチ場所を藤野喜兵衛から引き継ぎ、七ヶ年季で請負ったのは、文政8（1825）年である。以後、明治2（1869）年にいたる52年間、ヨイチ場所の請負を続ける。文政10（1827）年、請負人の名称を長左衛門と改名、支配人を長七とした。ヨイチ場所請負人としての二代目は、初代の長男、彦左衛門で、天保4（1833）年相続、この彦左衛門は、長左衛門を名乗らぬまま三季目の途中、天保14（1843）年に死亡、引き続き、その長男が三代目を相続、長左衛門を名乗った。三代目は、元治元（1864）年に隠居し、スツツ場所請負人、又（リュウゴ）山崎屋田付新八の次男、良次郎を婿養子とし、四代目長左衛門とした。この代の慶応3（1867）年に苗字帯刀を許され、竹屋 林長左衛門となる。明治2（1869）年、場所請負制廃止をむかえるが、その後も、林家は余市町の発展に寄与してきた。

長右衛門

この「長右衛門」銘については、現在調査中であるが、製造者側の銘の可能性と、使用者側の銘の可能性の両方が考えられる。ここでは、使用者側の銘が入っているとした場合、実際の使用者に比定できる人物をリストアップしてみることにする。

近世、ヨイチ場所に関わる長右衛門の名は、林家文書（「余市町史」所収）中に4人分の記載がある。まず、文政11（1828）年から天保11（1840）年まで、松前城下唐津内町在住の長右衛門が、ヨイチ場所に二八取にやってくる。続いて、翌天保12（1841）年、南部丈ヶ沢（現在むつ市城ヶ沢か、町史では犬ヶ沢）の長右衛門が、越年稼方となっている。次に登場する長右衛門は、丑（嘉永6（1853）年と安政2（1855）年、モイレ番家に属する稼方で、南部^{うた}哥（現在むつ市宇田町か）の出身という長右衛門である。そして、最後の1人は、安政5（1858）年の文書に載っているシュマトマリの小網持、津軽出身の長右衛門である。

以上、これらの長右衛門であるが、さらに新たな史料の発見により、南部丈ヶ沢ないし哥、または津軽出身の長右衛門が、唐津内住の長右衛門と同一人物と特定できるかもしれない。

さらに視点を松前の竹屋の周辺に広げると、天保6（1835）年、厚岸の国泰寺境内の石地藏台座の刻文に、山田屋文右衛門の手船、栄順丸の長右衛門の名が見られ、また、安政年間に竹屋と同じ枝ヶ崎町に住んでいた大島・小島の請負人 長右衛門の名前も挙げられる。特に後者は、文久4（1864）年、病により場所請負を返上した際の文言に、「私、先代より数十年引き続き御請負仰せ付けられ」たが、ここ2・3年「病身に相成り、鍛冶職仕漁場出稼行き届き兼ね候に付」請負を返上したい、と理由を説明しており、漁場出稼^{なりわい}ぎを生業としていたことが知られ、当時とはともかく、かつては余市まで出稼ぎに来ていた可能性もある。

△（ダキヤマイチ）

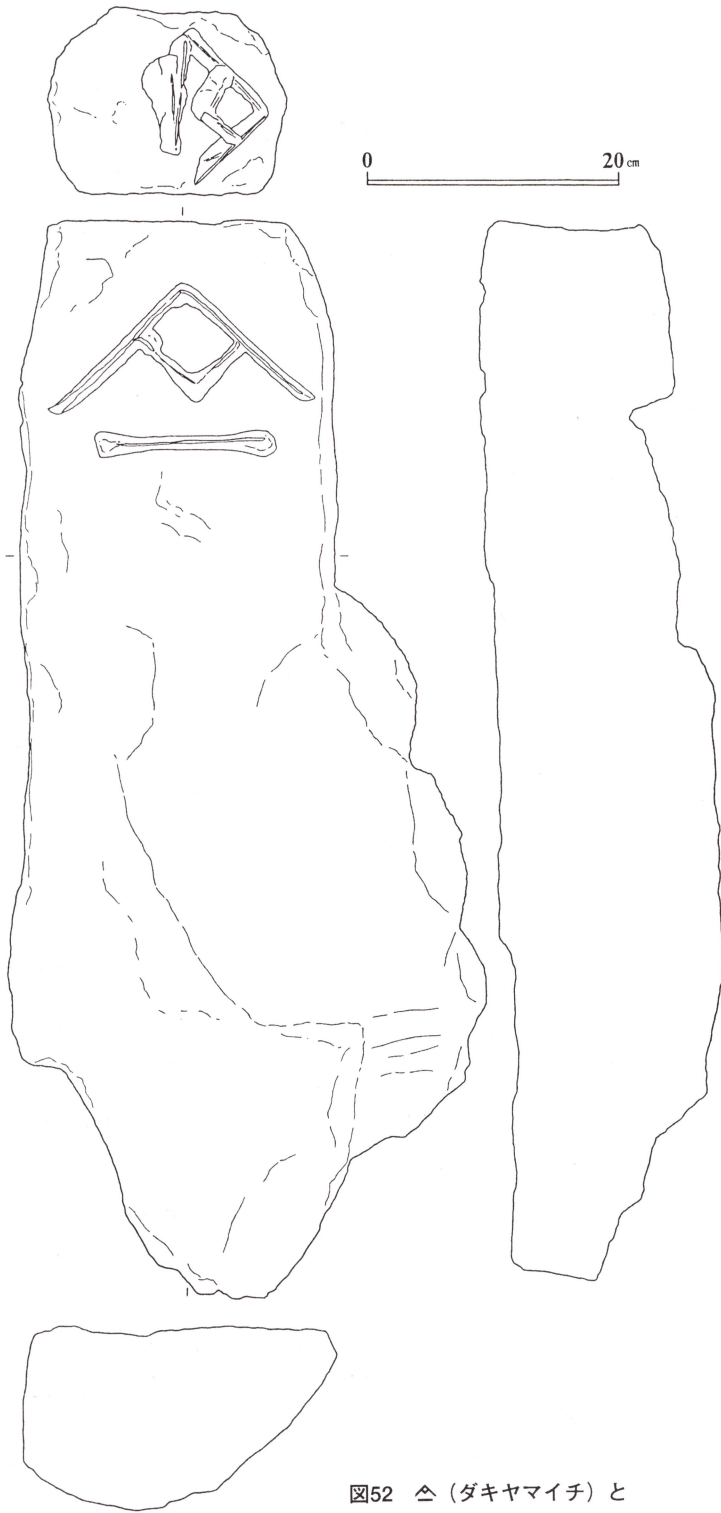


図52 ㄆ (ダキヤマイチ) と
刻まれている石碑

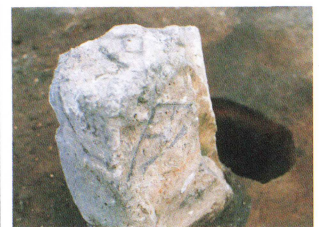


写真32 大川遺跡ㄆの
石碑出土状況

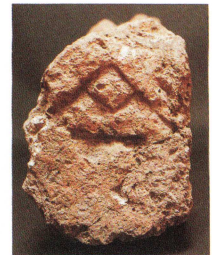


写真33 大川遺跡出土のㄆ
の石碑

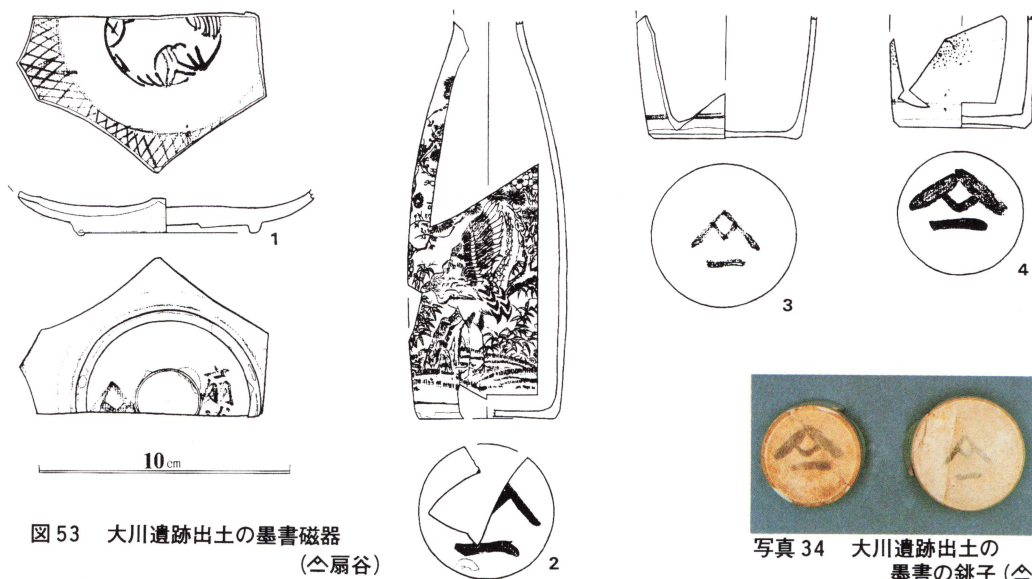


図53 大川遺跡出土の墨書磁器
(△扇谷)

写真34 大川遺跡出土の
墨書の銚子(△)

扇谷家の屋印である。その祖、扇谷重五郎は、嘉永3（1850）年、山形に生まれ、後、江差五勝手に渡り、漁業に従事したという。今でも五勝手にはダキヤマを屋印にする家が見られ、この家との関連を想起させる。扇谷氏は、ここから、さらに余市へ移住、大正末年、林家より、この大川遺跡の南西側に当たる地所（1994年度発掘調査区域）を譲り受け、住居や蔵、作業場などの施設を設け、いくつもの漁場を持って漁業を行い、ニシンと盛衰を共にした。これら施設の一部は、余市川の河川改修事業で立ち退きになるまで存続（重五郎の孫、扇谷亮三氏談）したとのことである。

図51・53に示した陶磁器7点は、大川遺跡6ヶ年間の発掘調査によって出土した近世・近代の陶磁器54,000点のうち0.02%にも満たないものである。既に、大橋康二氏によって一部の当該資料が紹介されているが、大半の陶磁器の接合・復原・実測・年代比定・産地分析等がまだ実施されておらず、現状では、整理が遅れている為、詳しいことは言えないが、卒柏屋による場所請負以前のものとみられる陶磁器も少なからず出土しており、残存している文書では知りえない新事実等も整理作業が進めば明らかになってくる可能性もあろう。調査当初、筆者のひとりである当遺跡の担当者が、上ヨイチ運上家である旨の発表をしたのに対して、数人の方々より強い疑義をもたれたが、「西蝦夷地ヨイチ廉絵図」や「蝦夷歴検図」他の絵図における建物配置を示す文書資料、6ヶ年の発掘調査によって明らかにされた多くの物的証拠や状況証拠、これらから大川遺跡が近世における運上家跡であったことは動かしがたい事実としてよい。

更に、大川遺跡近辺の古老によって伝えられている近世アイヌに関する伝承についても、大川遺跡の発掘調査によって追認されたとしてよい。これについては、本報告で詳細に述べなければならないが、大川遺跡の近世・近代における膨大なデータについては、郷土史、いや、少なくとも北海道史の研究に大きな足跡を残すに相違ない。（荒川・宮）

Ⅲ 結び

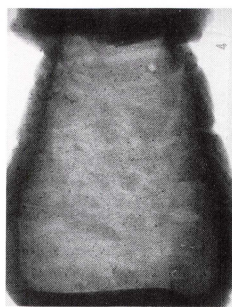
a 小括

1994年度の発掘調査によって検出された遺構及び出土遺物についての概略は、前述のとおりである。本稿では、主要な遺構・遺物について過年度来の経過をも踏まえ概述し、小括としたい。

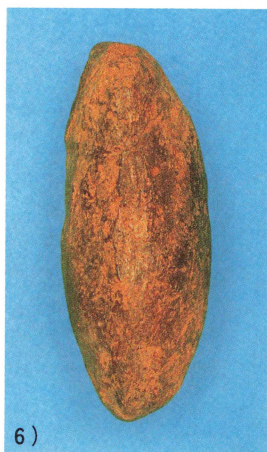
今年度検出された竪穴住居址は、合計13軒（表1）で、そのうち3軒が縄文期、残りの10軒が擦文期に該当する。縄文期の3軒は、JH-11（写真3-1）～5）、港大照寺期）・JH-16（写真3-6）～8）、後北期）・JH-17（写真3-9）、恵山期）である。JH-11の覆土からは貴重な土偶・土版・土製品等（図55・56、写真36）が出土している。JH-11の位置が縄文晩期墓塚の集中区であることに起因し、大型住居址であるJH-11の竪穴構築時に攪乱されたものかと考えられる。JH-16とJH-17は、ほぼ円形プランの遺構で、いずれも石器製作にかかわる建物跡と考えられる。JH-16の床面からは5ヶ所（写真3-7）、JH-17の床面からは8ヶ所のスポット（多数の黒曜石のフレーク・チップによって構成されている）が確認された。特にJH-16の床面からは、土鈴（図54-2・写真3-8）・写真35-5）～7）が1点伴出している。振ると「コロコロ」という音色を発する。石器の製作と何らかの形で関連するものなのか、あるいは偶然に床面に残されたものなのか、不明であるが、祭祀にかかわるものとすれば、それが、どのように取り行われたのか、非常に興味深いところである。当該土鈴は無文であり、図のように内部には6個の土製とみられる玉が封じ込められているようである。擦文期の竪穴住居址については、今年度10軒検出し、調査を実施したが、このうち、SH-17・19・20・24が、1992年と94年の両年度に互って、また、SH-40・58・60が、1993年と94年の両年度（図4）に互って調査されたため、表1のように今年度のみで完掘した擦文期の竪穴住居址は、3軒（SH-69～71）のみということになる。このうち特筆すべきは、SH-69床面の集石とSH-71の凝灰岩製とみられる細かく破碎したへっついの出土状況であろう。前者については、石錘とみられる礫80点が竪穴北東部隅の床面周辺より出土している。当遺跡では、これまでにSH-21・51・53でも集石が確認されている。後者については、時間をかけて接合・復原作業を実施したが風化が進んでいることもあって、原型に復することは難しい状態であった。当該事例は、SH-58・60でも既に確認されている。次に今年度検出された墓塚のうち特筆すべきものについて若干述べる。GP-847（写真4-1）は恵山期の小型の墓塚である。720点程のコハクの平玉が伴出した。特に、このうち60点は径2～3mmほどのコハク平玉で日本最小のものとみられる。なんと、これには1mm以下の孔が精巧にあげられている。非常に優れた技術を有している玉造集団によるものであろう。大川遺跡では、既に1990年（GP-82）に2,000点強の大型のコハクの平玉を伴出した恵山期の墓塚1基が検出されている。コハクに関する2度目の驚きである。GP-850（写真4-2）・3）は近世アイヌ墓である。ニンカリ2点（写真10上段2点）、刀子2点と人骨の頭部のみが出土している。頭部以下は後世の攪乱により失われている。SH-58中央部窪みに構築され、女性を埋葬したと考えられる。GP-853（写真4-5）・6）



GP-914 覆土出土
 (縄文晩期前葉)
 66mm×49mm
 重さ 68g



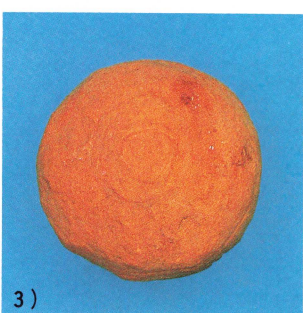
4)



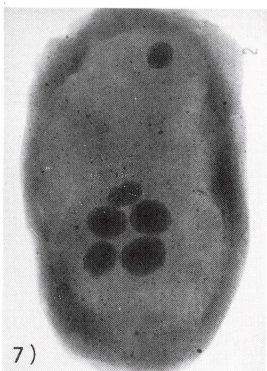
6)



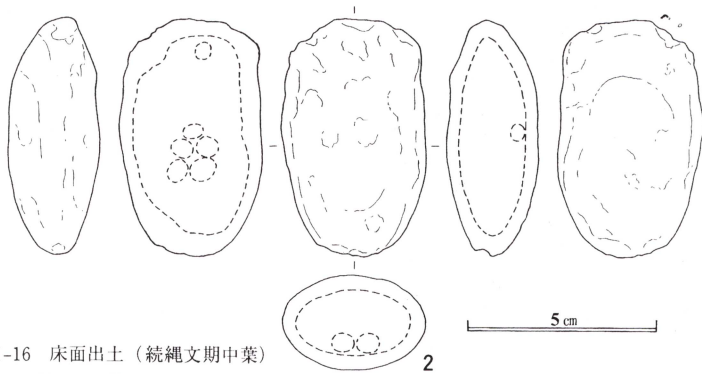
5)



3)



7)



JH-16 床面出土 (続縄文中葉)
 63mm×39mm×25mm
 重さ 37g

2)

図54・写真35 大川遺跡出土の土鈴

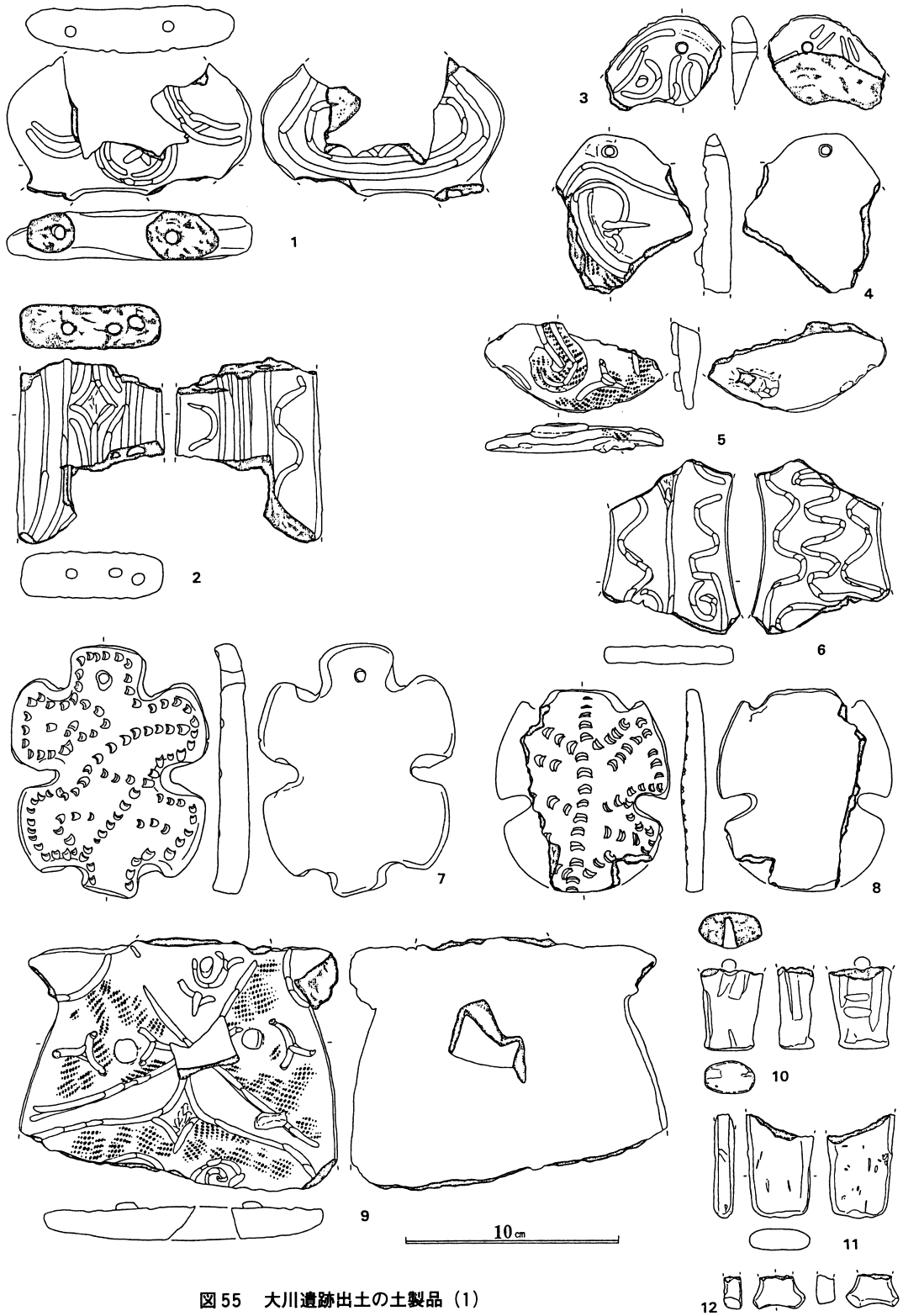


図 55 大川遺跡出土の土製品 (1)

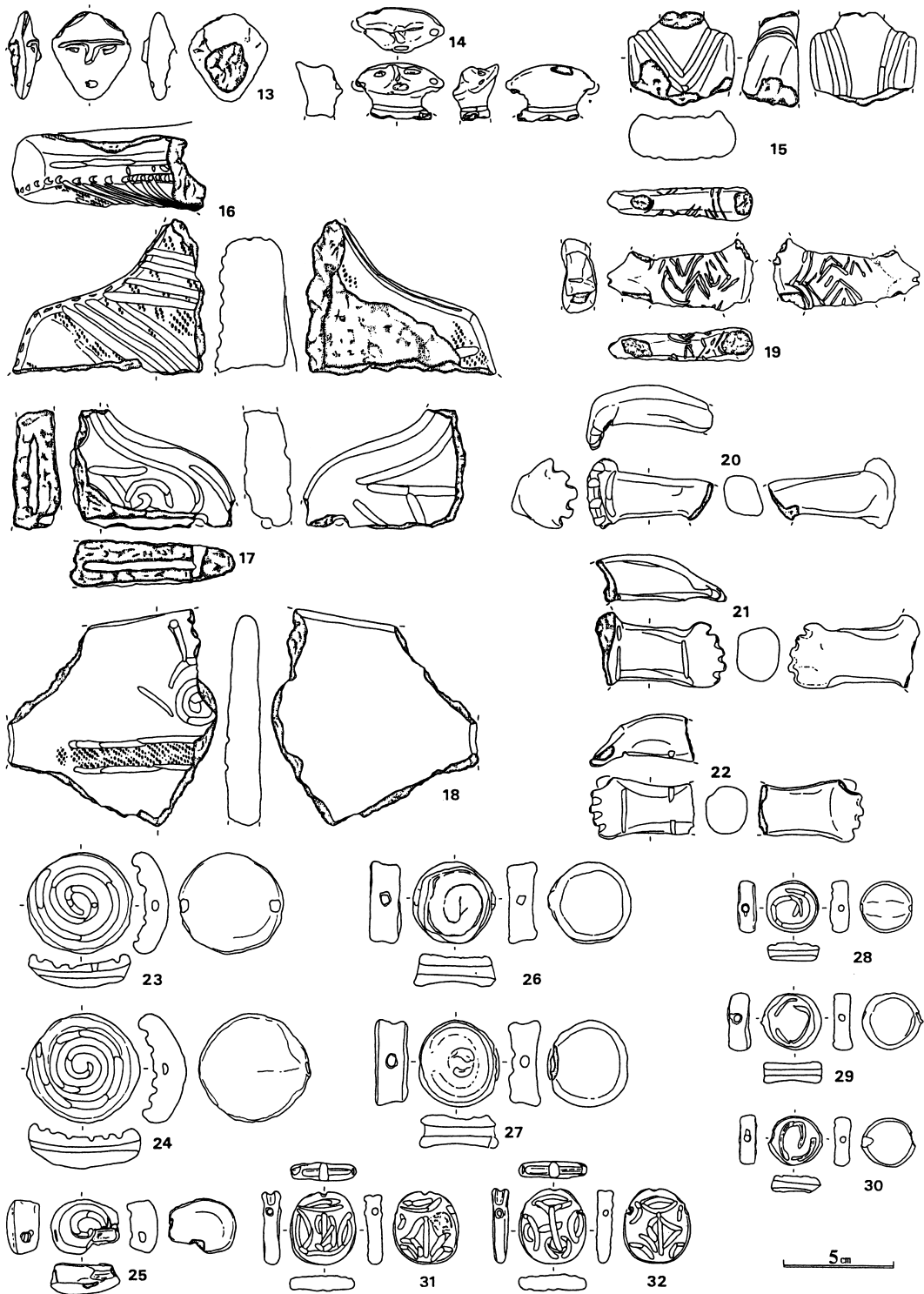


図 56 大川遺跡出土の土製品 (2)

・854 (写真4-7)・8) ・856 (写真5-1)・2) 等の恵山墓についてはⅡhを参照していただきたい。GP-900 (写真6-1)~3) は縄文晩期前葉の4体合葬例である。石剣 (図57-1・写真37) ・玉・石鏃・握石 (Ⅱg参照) 等が伴出している。石剣は出土状況等から、埋葬時には立てて副葬されていたものかと考えられる。石棒・石剣が出土している柏木B遺跡 (註1) 他の事例も概ね立てて埋葬されている場合が多いようである。GP-920 (写真7-5)~7) は縄文晩期前葉の配石墓である。GP-939 (写真8-1) も当該期の墓壙であるが、握石を大事そうに手に握らせているようにかがわれる明瞭な事例である。GP-914 (図54-1, 写真35-1)~5) の覆土からも土鈴が1点出土している。縄文晩期前葉のものであり、覆土出土とはいうものの、伴出遺物とみられる。埋葬する際に使用され、埋め戻された土の上に、この土鈴を置いたか、何かにぶら下げていた可能性も否定できない。図示していないが、土鈴とともに袖珍土器1点が伴出している。土鈴は、穴があいておらず、封じ込めるタイプのものであり、中には小さな物質 (種子か小礫か等不明) が入っており、振ると「カラカラ」という乾いた音色を発する。埋葬に伴う祭祀に使用されたとみられる。図55・56 (写真36) は各種土製品である。図55の1・2は同一個体であるかもしれない。完形であれば重要文化財まちがいなしといったところであろうか。7・8は特異な土版である。特に7はGP-445, 方形配石墓の配石面に伴った土製品であり、墓標状のものにぶら下げられてい



写真36 大川遺跡出土の土製品 (1)・(2)

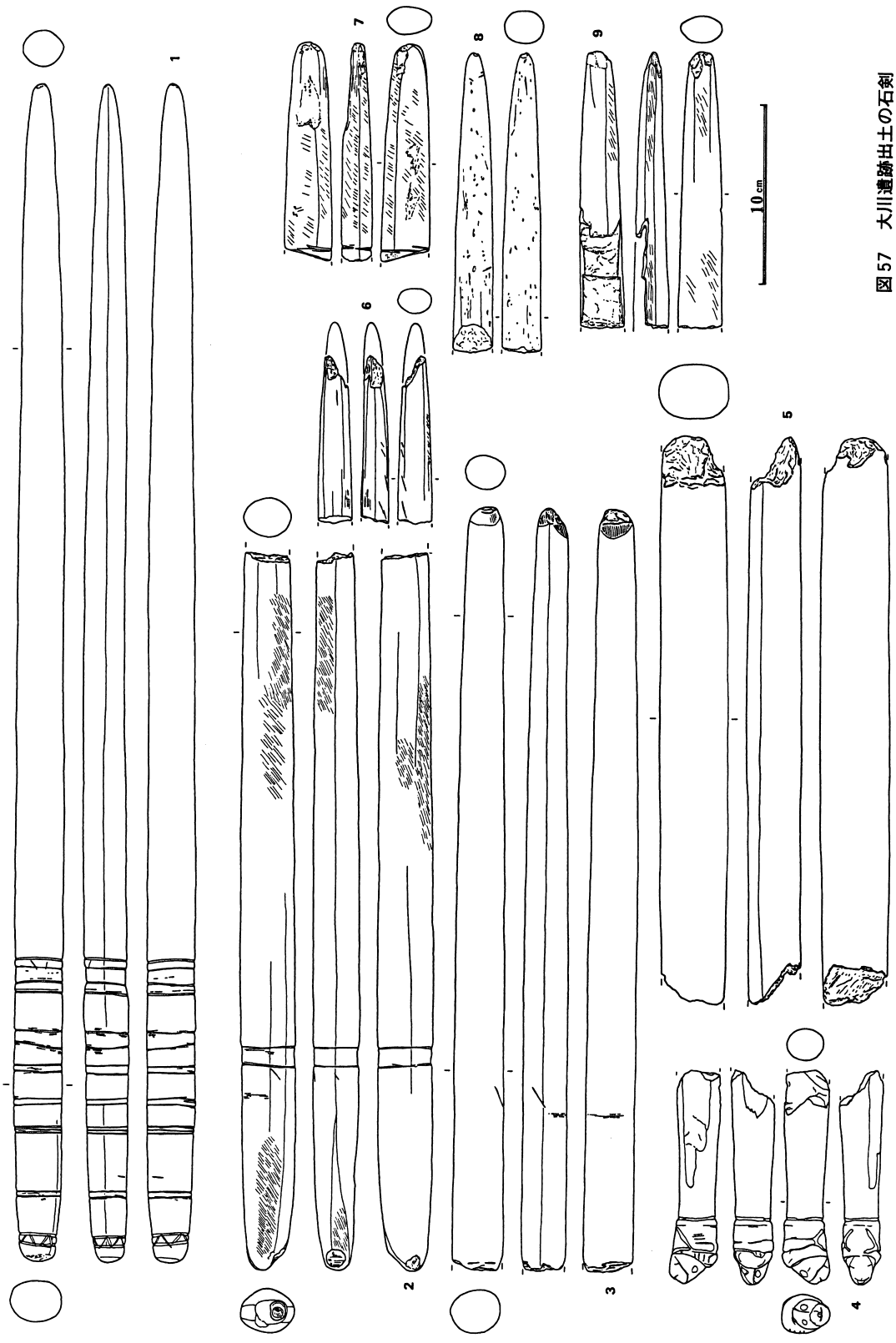


図 57 大川遺跡出土の石剣

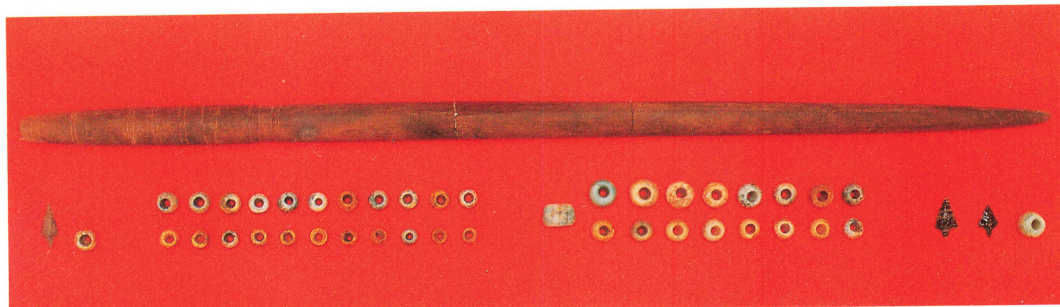


写真37 大川遺跡GP-900伴出の石剣・ヒスイ玉

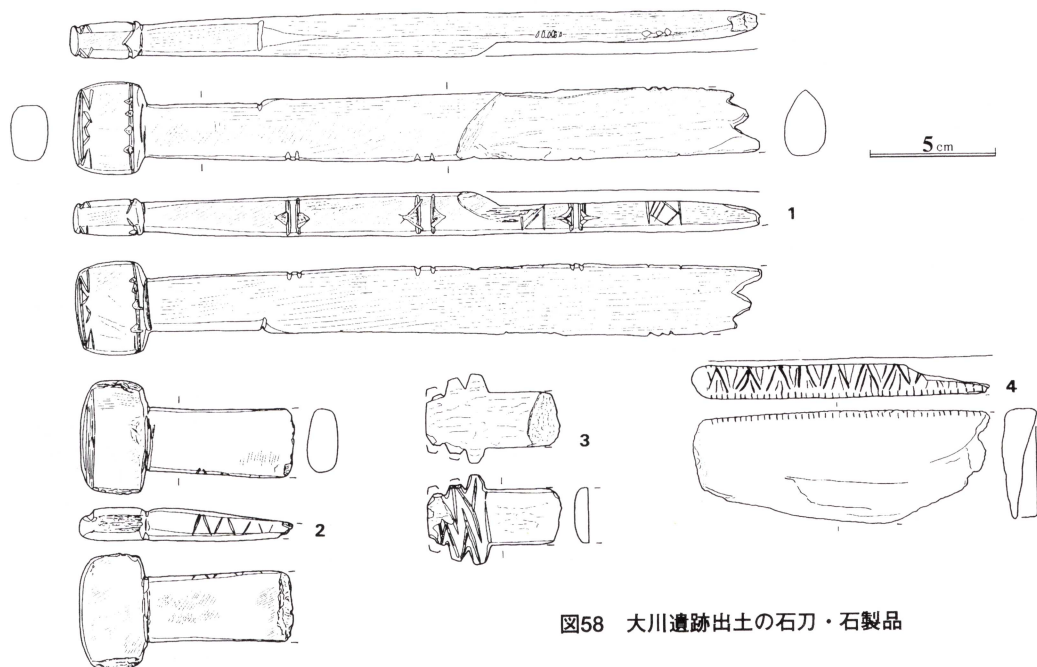


図58 大川遺跡出土の石刀・石製品

た可能性もある。図56の23～25は、いわゆるイモ貝状土製品（写真3-5・写真39-4）である。23は山岸コレクション（後述）、24がJH-11覆土、25が遺構外からの出土である。26～32は腰飾りとみられる土製品である。いずれも横に穴が貫通しており、腰飾り、あるいは、腰紐の緒締め様のものかとも考えられる。特に31・32はGP-440の遺体の腰のあたりから2点伴出した。23～25については、横穴が貫通しており、腰飾りと考えて良いと思われる。図57は石棒というよりは石剣と分類した方が良いと考えられる。先がとがっていることや、断面が楕円形あるいは菱形に近いものが多い。石棒（縄文後期後葉～晩期前葉）→石剣（晩期前葉～晩期中葉）→石刀（晩期中葉～晩期後葉）へと概ね変遷するようである。図58は石刀（1～3）ならびに特異な石製品であり、いずれもスレート質である。1の文様は、アイヌ文様の祖形であろうか。4は物差しの目盛りのようにも見えるが、石斧様の板状石製品の破片とみた方が良いと思われる。管見の限り類例を知

りえないが、柏木B遺跡（註2）出土の石棒の中に類似のキザミが施されている例がある。図59は、GP-373出土の古手の後北式土器である。黒く潰された部分は、アスファルト状の物質によって接合されている。土器や石器・土偶等にもアスファルトが使用されている例がある。縄文後期中葉のアスファルトの塊が入っていた土器（註3）や石器の装着に使用されている例、あるいは、補修孔をとめる白樺様樹皮をアスファルトで接着する例（註4）等もあり、縄文時代におけるアスファルト使用事例が蓄積されている。図60は大川遺跡出土の山岸コレクションである。1は君子甕（註6）と称されている2足土器で、2は恵山式とみられる異形土器である。3はヒスイ

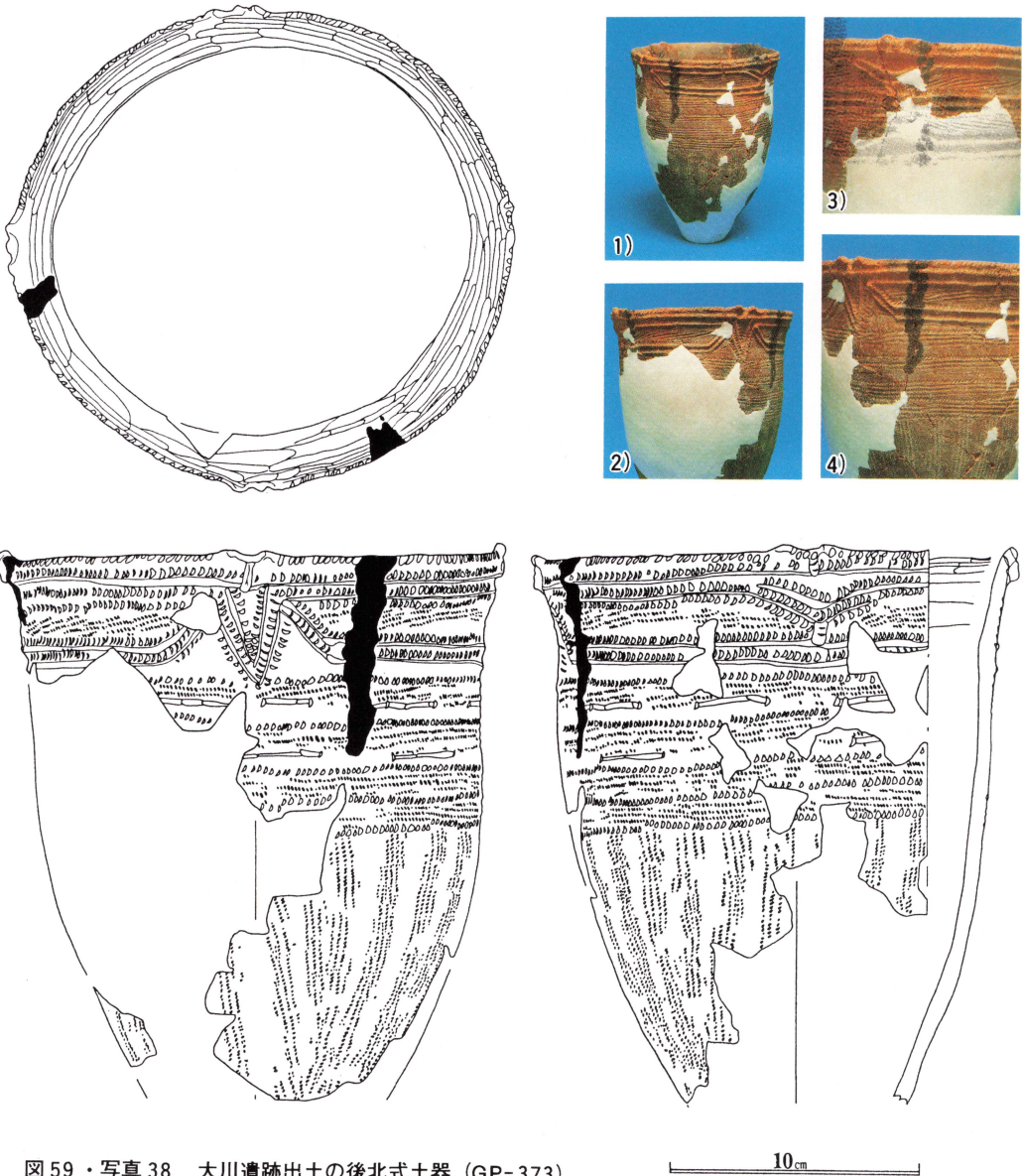


図59・写真38 大川遺跡出土の後北式土器（GP-373）

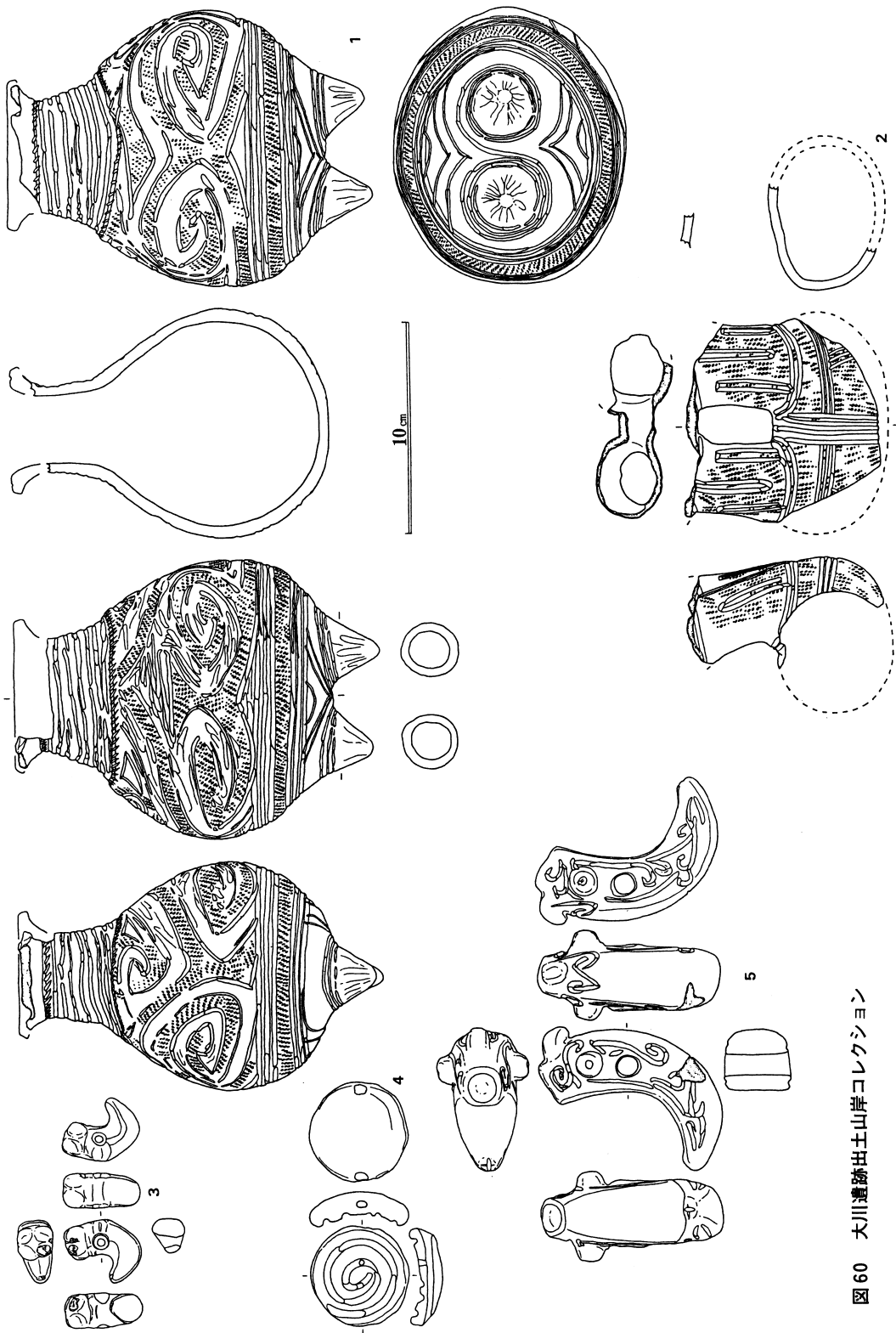


図 60 大川遺跡出土山岸コレクション



写真39 大川遺跡出土山岸コレクション（余市水産博物館蔵）

の勾玉，4は前述したイモ貝状土製品，5は土製勾玉である。2を除き，縄文晩期前葉～中葉のものと思われる。いずれも，60年ぶりに里帰りした資料（Ⅲb参照）である。

前述したように，今年度の調査によって，土鈴が2点出土した。縄文晩期前葉のものと，続縄文中葉のものである。縄文期の土鈴は，すでに約20遺跡からの出土例があるが，北海道においては，大川遺跡が初出例となった。擦文期の土鈴は，高砂遺跡や錦町5遺跡から各1点出土している。大川遺跡出土のものは，従来どおり一応，土鈴と分類したが，実質的には，民族例にみられる「ガラガラ」とした方がより正確であるように考えられる。最後にⅡaにおける碧玉について若干述べておきたい。写真14の1～4は，島根県の花仙山を原産地とする管玉であることがほぼ判明したようである。東日本での事例は非常に少なく，これまでの分析例では，関東に1例のみという。これなども，大川遺跡の各時代における連続的な重要度を更に追認する証左となったといえよう。

（宮）

註

- 註1 木村英明 1981 『柏木B遺跡』 恵庭市教育委員会
 註2 木村英明 1981 『柏木B遺跡』 恵庭市教育委員会 第2004号土墳墓出土石棒
 註3 阿部千春 1994 『豊崎N遺跡』 南茅部町教育委員会
 富樫泰時 1993 「アスファルトと土器」 『考古学の世界』①北海道・東北 ぎょうせい
 註4 大川遺跡はじめ，多数の事例があり省略。
 註5 高橋正勝編 1979 『江別太遺跡』 江別市教育委員会
 註6 山岸玄津 1934 『北海道余市貝塚に於ける土石器の考察』 茂山吟社

b あとがき 一余市大川遺跡の6年一

発掘調査を始めてから6年が経ち、17,200㎡の調査を終了した。余市川の改修工事にかかわる調査なので、2・3年後に現在の道路部分を手がけるまで、大川遺跡の調査は一時休止となる。一口に17,000㎡と言ってもそう生易しい面積ではなく、遺跡も縄文後期から近代まで重複しているので、そう簡単な調査ではなかった。6年目の年次報告書を提出して一応の決着を見るが、今後、膨大な資料の整理は延々と続くこととなろう。これにかかわる関係者諸氏にはその労を求めることになるが、最後まで続けられるようお願いのものである。

本年初頭には、また調査補助員の移動があった。しばらくの間たいへん役立ってくれた中山昭大氏が北海道埋蔵文化財センターに正規の職員として奉職し、1年間経験を積んだ秋山洋司君が札幌市職員として札幌市埋蔵文化財センターに勤務することになった。専門職として共に得難い職場を得たことを喜びたい。この穴を埋めて、6月から小川康和君が加わり、夏休みには考古学専攻の大学生による応援を得て発掘調査は滞りなく進められた。

1994年の夏は極めて暑い日々であった。連日の猛暑のなかで調査は順調に進んだが、せっかく迎えた「余市シンポジウム」の参加者たちは、その暑さに参ってしまった。この余市シンポジウムは北海道・東北史研究会の主催によるもので、評価の高い研究活動を進めている当研究会が、大川遺跡に着目し、開催地として選んだものである。余市町教育委員会と大川遺跡の調査スタッフたちは、それに応えて7月30・31日と8月1日の3日間、それぞれに手伝いながら参加した。シンポジウムは盛会で内容も盛りだくさんであったが、暑さのために良い印象が薄れてしまったのではないかと憂えている。

これと前後し、札幌市市民局から念願の遺物が移管されて、余市町に戻ってきた。札幌市埋蔵文化財センターの計らいには特段の感謝を捧げたい。この遺物は元々大川遺跡の一部にあった旧山岸病院の敷地内から発見されたもので、当時院長の山岸禮三氏によって昭和9年にその概要が発表（「北海道余市貝塚に於ける土石器の考察」1934 茂山吟社）されている。それによれば、縄文晩期および恵山期の17点の土器や玉の存在が知られている。また、その前年、札幌の㊦今井呉服

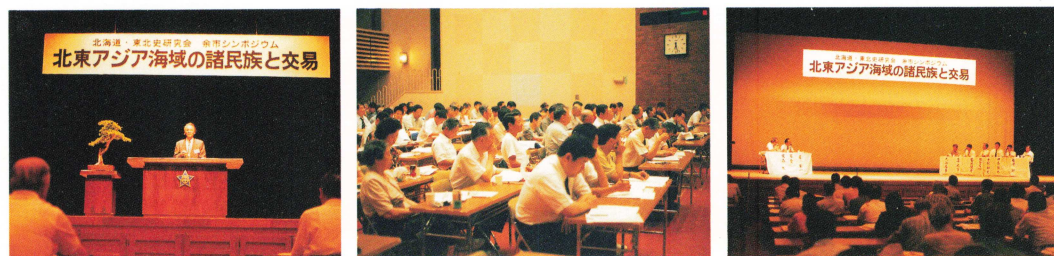


写真40 北海道・東北史研究会 余市シンポジウム 「北東アジア海域の諸民族と交易」1994年7月30日(土)～8月1日(月)

店郷土室で催された北海道原始文化展覧会にこれらの資料が出品（「北海道原始文化聚英」1933 犀川会）されている。さらに札幌時計台に収蔵されていたこともあったが、最近までその一部7点が札幌市埋蔵文化財センターに大切に保管されていた。この度、余市水産博物館にあった残りの遺物と久しぶりにまとめられ、今回の発掘遺物とも一緒になって、大川遺跡から出土した遺物の結集がはかられたのは嬉しいことである。

少し遡るが7月12日にはソウル大学の任 孝宰（Hyo-Jay Im）教授と韓国文化放送（MBC）の関係者が遺跡を訪問した。一行は古代の大陸から日本への文化移入に関する番組を制作していたもので、任教授は内外黒色土器に着目し8世紀頃の渤海国の影響が強いと語った。これは調査員が考えていた可能性と一致する。また、8月上旬には文化庁の原田昌幸氏が来町し、大川遺跡の遺物を親しく観察した。毎年、話題を呼ぶ資料が出土しているので、重要文化財として推挙する必要も考えられてのことかと思われる。調査が完全に終了し、本報告書の提出を待って、そのような動きがあるかも知れない。余市大川遺跡はそれだけの価値がある遺跡である。

本年の年次報告にはまた、いくつかの注目すべき成果が掲載されている。そのひとつは、黒褐色で粗い粒子の玉の材質である。練り物のようでありながら軽石のように軽く、今まで見たことのない材質であった。北海道南茅部町・秋田県昭和町出土の類品とともに示された分析によれば、草炭または泥炭と土による練り物であるとのことで、また、新しい知見が加わった。並んで発見された琥珀玉に糸が残されていたものがあり、これも材質を調べて貰った。それは草の茎ではないかと結論され、以前調べたものと同じような所見であり、撚を掛けずに草の繊維がそのまま用いられていたパターンがあったことを再確認することとなった。洪武通寶の合金の割合についても調べたが、今後私鑄銭を見分ける資料として期待したい。吉岡康暢氏は、余市を中心とする北海道の中世についての大論文を寄せて下さり、この報告書の価値を高めている。

1995年度には、4月早々事務所や資料整理に使われているプレハブの建物の移転がはじまる。現在の仮建物は4年間風雪に耐え、耐用年数を過ぎたものなので取り壊され、新しいプレハブを建てることになっている。また、新しい橋脚の工事が同時にはじまるため、その邪魔にならぬよう現在の道路を隔てた川上側に移動することも含まれている。来年度からは少し新たな気分になるであろう。

新大橋が完成し取り付け道路が出来るまでには、まだ10年の歳月を要するとも聞いている。遺物の整理が終わり、本報告書を完成するのにも同じくらいの年月がかかるかも知れない。その時私たち調査に携わったものの望みは、ただ一つ、人類の文化遺産として資料が安全に保管され、然るべく役立てられていることである。そのためにはどうしても資料館または博物館の建設が避けて通れない課題として浮き彫りにされてくるであろう。それは簡単なことではないが、遺跡と遺物を世に残すために、私たちは町民と一緒に力を出し合ってなんとか成し遂げたいと考えている。

（岡田）

1994年度大川遺跡発掘調査概報

おおかわ

—余市川改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の概要 VI—

発 行 余市町教育委員会
北海道余市町朝日町26番地

発 行 日 1995年3月

株式会社 毛利印刷
北海道余市町大川町1丁目26番地
